

高浜天狗原遺跡

高浜天狗原遺跡

（主）前橋安中富岡線（西毛広域幹線道路高崎西工区）に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書



一一〇一一一

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2021

高浜天狗原遺跡

(主)前橋安中富岡線(西毛広域幹線道路高崎西工区)に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2021

群 馬 県 高 崎 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は、高崎市高浜町に所在し、令和元年度西毛広域幹線道路(高崎西工区)に伴い発掘調査された高浜天狗原遺跡の調査報告書です。西毛広域幹線道路は、「群馬がほぼたくための7つの交通軸構想」の一つ、西毛軸として地域連携を強化・向上することを目指し前橋市、高崎市、安中市及び富岡市を結ぶ全長27.8kmの主要幹線道路です。

西毛広域幹線道路の開通は、交通渋滞の緩和と物流の効率化が果たせ、西毛地域の産業や経済、観光の発展を担う道路として、県民の期待を集めています。高浜天狗原遺跡は西毛広域幹線道路の高崎西工区のほぼ中央部にあたり、発掘調査は令和元年12月に行われました。

本遺跡の発掘調査では縄文時代前期と中期の集落、古墳時代～古代の集落が小規模ながら良好な様相で検出されました。特に縄文時代前期中葉の出土遺物群や古代竪穴建物の調査成果は、榛名山南麓域の原始・古代の人々が暮らした様子の一端を明らかにするでしょう。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、群馬県県土整備部、群馬県高崎土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元関係者の皆様には多大なるご指導とご協力を賜りました。

本報告書の上梓にあたり、関係者の皆様に心より感謝を申し上げますとともに、本書がより多くの皆様に活用されることを願い序といたします。

令和3年9月30日

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 向 田 忠 正

例　　言

- 1 本書は、令和元年度西毛広域幹線道路整備事業に伴い発掘調査され、令和3年度社会资本総合整備(活力・重点)（主）前橋安中富岡線(西毛広域幹線道路高崎西工区)に伴う埋蔵文化財の整理委託による高浜天狗原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地　群馬県高崎市高浜町2006-1・2015・2016・2019
- 3 事業主体　群馬県高崎土木事務所
- 4 調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 発掘調査の期間及び体制

履行期間　令和元年11月1日～令和2年4月1日
調査期間　令和元年12月1日～令和元年12月31日
調査面積　761.8m²
調査担当者　新井　仁(上席調査研究員)・山本直哉(調査研究員)
遺跡掘削工事　有限会社 高澤考古学研究所
地上測量委託　アコン測量設計株式会社
- 6 整理作業の期間と担当者

履行期間　令和3年4月1日～令和4年3月31日
整理期間　令和3年6月1日～令和3年9月30日
整理担当者　山口逸弘(専門調査役)
- 7 報告書編集、執筆担当者

(1)編集担当及び本文執筆　山口逸弘
(2)デジタル編集　齊田智彦(主任調査研究員)
(3)遺物実測図・写真撮影・観察表
　　土師器・須恵器：神谷佳明(専門調査役)　石器・石製品：岩崎泰一(専門調査役)
　　金属器・木製品：板垣泰之(専門員(主任))　縄文土器：山口逸弘
　　なお、土師器・須恵器の写真撮影は、編集担当が行った。
(4)遺構写真　発掘調査担当者
(5)石材同定　飯島静男(群馬県地質研究会会員)
- 8 発掘調査による出土遺物図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 9 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の関係機関にご協力、ご助言をいただいた。記して感謝します。

群馬県土整備部、群馬県高崎土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会

凡　例

- 1 本書で使用する測量図の座標値及び方位は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)を用いている。挿図中の方位は座標北を表し、座標値の単位はメートルである。
- 2 等高線、遺構断面図基準線に記した数値は海拔標高値である。各ポイントの右脇に○、○mと表示した。
- 3 遺構図・遺物図の縮尺については各挿図中にスケールを貼付したが、原則下記の縮尺で掲載した。また、遺物写真の縮尺は概ね掲載実測図に準拠するが厳密ではない。
 - 遺構図：竪穴建物 1/60、土坑・ピット・溝 1/40、遺構配置図 1/300である。
 - 遺物図：縄文土器 1/2・1/3・1/4、土師器・須恵器 1/3、石器・石製品 1/1～1/6、鉄製品・鉄滓 1/2
- 4 遺構番号に関しては、発掘調査時の番号を踏襲し、調査区や時期に関わらず通し番号となる。本書掲載の遺構図・遺物図・観察表・写真図版に付した番号と一致する。
- 5 遺構図中の網掛として、■=焼土、■=擾乱
土器実測図中の記号、網掛として、●=含織維、■■■=黒色土器、■■■=スス、■■■=緑釉
- 6 遺構・遺物の計測表・観察表の記載については、計測値単位はcmである。残存値は()で記した。54・55頁に詳細を記している。
- 7 本書で使用したテフラ(火山灰)の名称については、以下の略称を使用した。
 - As-B=浅間Bテフラ(天仁元年(1108))、As-C=浅間Cテフラ(3世紀末～4世紀初)、As-YP=浅間板鼻黄色テフラ、As-BP (Group)=浅間褐色テフラ群
- 8 本書で使用した地図は下記のものの一部を編集して使用した。
 - 第1図遺跡位置図は、国土地理院 1/50,000地形図「榛名山」
 - 第2図遺跡配置図は、高崎市発行 1/2500高崎市都市計画基本図「90」
 - 第3図周辺遺跡位置図は、国土地理院 1/25,000地形図「下室田」

目 次

序・例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査経過と周辺の環境

第1節 発掘調査に至る経過と調査の経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
第2節 整理作業の経過と方法	2
第3節 遺跡の立地と環境	2
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
第4節 基本土層	8

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要	9
第2節 縄文時代の遺構と遺物	11
1 積穴建物	11
2 土坑	19
3 遺構外出土遺物	22
第3節 古墳時代～古代の遺構と遺物	25
1 積穴建物	25
2 土坑・溝	43
3 ピット	50
4 遺構外出土遺物	50

第3章 総括

1 縄文時代前期中葉の周辺遺跡	51
2 5号積穴建物について	52
3 古代の積穴建物について	52

遺構計測表・遺物観察表

抄録

写真図版

挿図目次

第1図	道路位置図	
	(国土地理院1/50,000地形図「榛名山」を加工)	1
第2図	道路配置図(高崎市発行の都市計画図を加工)	3
第3図	周辺遺跡位置図	
	(国土地理院1/50,000 地形図「下室田」を加工)	5
第4図	旧石器試掘坑配置図(1/400)及び土層柱状図(1/40)	8
第5図	遺構配置図(1/300)	10
第6図	4・7号窓穴遺物	12
第7図	4号窓穴建物出土遺物(1)	13
第8図	4号窓穴建物出土遺物(2)	14
第9図	7号窓穴建物出土遺物	14
第10図	11号窓穴建物	15
第11図	11号窓穴建物出土遺物(1)	16
第12図	11号窓穴建物出土遺物(2)	17
第13図	11号窓穴建物出土遺物(3)	18
第14図	11号窓穴建物出土遺物(4)	19
第15図	12号窓穴建物及び出土遺物	20
第16図	15・16号土坑及び出土遺物	21
第17図	遺構外出土遺物(縦文) (1)	22
第18図	遺構外出土遺物(縦文) (2)	23
第19図	遺構外出土遺物(縦文) (3)	24
第20図	1号窓穴建物及び出土遺物	25
第21図	2号窓穴建物	26
第22図	2号窓穴建物出土遺物	27
第23図	3号窓穴建物及び出土遺物(1)	28
第24図	3号窓穴建物出土遺物(2)	29
第25図	5号窓穴建物(1)	30
第26図	5号窓穴建物(2)及び出土遺物(1)	31
第27図	5号窓穴建物出土遺物(2)	32
第28図	6号窓穴建物(1)	33
第29図	6号窓穴建物(2)	34
第30図	6号窓穴建物出土遺物(1)	35
第31図	6号窓穴建物出土遺物(2)	36
第32図	8号窓穴建物(1)	37
第33図	8号窓穴建物(2)及び出土遺物	38
第34図	9号窓穴建物及び出土遺物	39
第35図	10号窓穴建物(1)	41
第36図	10号窓穴建物(2)	42
第37図	10号窓穴建物出土遺物	43
第38図	土坑(1)・溝	45
第39図	土坑(2)・ピット(1)	46
第40図	ピット(2)	47
第41図	ピット(3)	48
第42図	遺構外出土遺物(古代)	50
第43図	周辺道路における縦文時代中期中葉の事例	51
第44図	5号窓穴建物における壁外柱穴配置図	52
第45図	古代窓穴建物時期別配置図	53

表 目 次

第1表	周辺道路一覧表	6
第2表	遺構計測表	56
第3表	4号窓穴建物出土遺物	58
第4表	7号窓穴建物出土遺物	58
第5表	11号窓穴建物出土遺物	58
第6表	12号窓穴建物出土遺物	60
第7表	15・16号土坑出土遺物	60
第8表	遺構外出土遺物(縦文)	60
第9表	1号窓穴建物出土遺物	63
第10表	2号窓穴建物出土遺物	63
第11表	3号窓穴建物出土遺物	63
第12表	5号窓穴建物出土遺物	63
第13表	6号窓穴建物出土遺物	64
第14表	8号窓穴建物出土遺物	65
第15表	9号窓穴建物出土遺物	65
第16表	10号窓穴建物出土遺物	65
第17表	遺構外出土遺物(古代)	65
第18表	非掲載遺物数量一覧	66

写 真 目 次

PL. 1	1 調査区北側全景(西から)	
	2 調査区北側全景(東から)	
PL. 2	1 調査区南部全景(西から)	
	2 調査区南部全景(東から)	
PL. 3	1 4号窓穴建物土層(西から)	
	2 4号窓穴建物 遺物出土状況(西から)	
	3 4号窓穴建物遺物出土近接(東から)	
	4 1号・4号・7号窓穴建物重複状況(北から)	
	5 7号窓穴建物全景(西から)	
	6 7号窓穴建物土層(西から)	
	7 7号窓穴建物 遺物出土状況(北東から)	
	8 7号窓穴建物 遺物出土状況(南から)	
PL. 4	1 11号窓穴建物全景(北から)	
	2 11号窓穴建物遺物出土状況(北から)	
	3 11号窓穴建物遺物出土状況(北から)	
	4 11号窓穴建物遺物出土状況(北から)	
	5 11号窓穴建物遺物出土状況(北から)	
PL. 5	1 12号窓穴建物全景(北から)	
	2 15・16号土坑土層(西から)	
	3 15・16号土坑遺物出土状態(西から)	
	4 15・16号土坑遺物出土状態(東から)	
	5 15・16号土坑全景(西から)	
PL. 6	1 1号窓穴建物全景(北から)	
	2 1号窓穴建物床下全貌(北から)	
	3 1号窓穴建物床下土坑土層(西から)	
	4 1号窓穴建物床下土坑全貌(北から)	
	5 2号窓穴建物(東から)	
	6 2号窓穴建物上層(北東から)	
	7 2号窓穴建物遺物出土状況(北から)	
	8 2号窓穴建物床下全貌(東から)	
PL. 7	1 3号窓穴建物全景(北から)	
	2 3号窓穴建物遺物出土状態(北から)	
	3 3号窓穴建物土層(西から)	
	4 3号窓穴建物床下全貌(西から)	
	5 5号窓穴建物全景(西から)	

PL. 8	1 5号竪穴建物上層(西から) 2 5号竪穴建物カマド全景(西から) 3 5号竪穴建物遺物出土状態(西から) 4 5号竪穴建物遺物出土状態(西から) 5 5号竪穴建物遺物出土状態(西から) 6 5号竪穴建物白玉出土状態(西から) 7 5号竪穴建物床下全景(西から) 8 5号竪穴建物調査風景	PL. 16	1 26号ピット全景(西から) 2 27号ピット全景(西から) 3 28号ピット全景(西から) 4 29号ピット全景(北から) 5 30号ピット全景(西から) 6 31号ピット全景(西から) 7 32号ピット全景(北から) 8 33号ピット全景(南から) 9 34号ピット全景(南から) 10 35号ピット全景(南から) 11 36号ピット全景(南から) 12 37号ピット全景(南から) 13 38号ピット全景(南から) 14 39号ピット全景(南から) 15 40号ピット全景(南から)
PL. 9	1 6号竪穴建物全景(北西から) 2 6号竪穴建物上層(南から) 3 6号竪穴建物カマド全景(北西から) 4 6号竪穴建物カマド内支脚(南西から) 5 6号竪穴建物カマド掘方(北西から)	PL. 17	1 41号ピット全景(南から) 2 42号ピット全景(南から) 3 43号ピット全景(南から) 4 1号溝全景(北から) 5 道構外出土上器(縄文時代中期)(西から) 6 基本上層1(南から) 7 基本上層2(南から) 8 調査風景 9 調査風景
PL. 10	1 6号竪穴建物遺物出土状態(北西から) 2 6号竪穴建物遺物出土状態(北から) 3 6号竪穴建物出土状態(西から) 4 6号竪穴建物床下全景(北西から) 5 6号竪穴建物床下土坑(北西から)	PL. 18	4号型穴建物出土遺物
PL. 11	1 8号竪穴建物全景(西から) 2 8号竪穴建物上層(南から) 3 8号竪穴建物カマド(西から) 4 8号竪穴建物床下全景(西から) 5 9号竪穴建物全景(西から) 6 9号竪穴建物上層(南から) 7 9号竪穴建物遺物出土状態(西から) 8 9号竪穴建物床下全景(西から)	PL. 19	7号・11号竪穴建物出土遺物
PL. 12	1 10号竪穴建物全景(西から) 2 10号竪穴建物上層(北から) 3 10号竪穴建物カマド全景(西から) 4 10号竪穴建物床下全景(西から) 5 10号竪穴建物床下土坑(西から)	PL. 20	11号型穴建物出土遺物
PL. 13	1 1号土坑全景(南から) 2 2号土坑全景(北から) 3 3号土坑全景(南から) 4 4号土坑全景(北から) 5 5号土坑全景(北から) 6 6号土坑全景(南から) 7 7号土坑全景(北から) 8 8号土坑上層(北東から)	PL. 21	11号・12号竪穴建物、15・16号土坑出土遺物
PL. 14	1 9・11号土坑全景(西から) 2 10号土坑全景(西から) 3 13号土坑全景(南から) 4 14号土坑全景(南から) 5 1号ピット全景(北から) 6 2号ピット全景(北から) 7 3号ピット全景(北から) 8 4・5号ピット全景(南東から) 9 6号ピット全景(北から) 10 7号ピット全景(北から)	PL. 22	16号土坑、道構外(縄文)出土遺物
PL. 15	1 8号ピット全景(北から) 2 9号ピット全景(南から) 3 10号ピット全景(南から) 4 11号ピット全景(北から) 5 12・13号ピット全景(南から) 6 14号ピット全景(南から) 7 15号ピット全景(南から) 8 16号ピット全景(北から) 9 17号ピット全景(北から) 10 18号ピット全景(北から) 11 19・20号ピット全景(北から) 12 21号ピット全景(北から) 13 22・23号ピット・8号土坑全景(北東から) 14 24号ピット全景(西から) 15 25号ピット全景(西から)	PL. 23	道構外(縄文)・1・2号竪穴建物出土遺物
		PL. 24	道構外(縄文)・1・2号竪穴建物出土遺物
		PL. 25	3・5号型穴建物出土遺物
		PL. 26	5号型穴建物出土遺物
		PL. 27	6号型穴建物出土遺物
		PL. 28	6・8・9・10号竪穴建物、道構外(古代)出土遺物

第1章 調査経過と周辺の環境

第1節 発掘調査に至る経過と 調査の経過

1 調査に至る経過

高浜天狗原遺跡は、高崎市高浜町に所在する遺跡で、令和元年度西毛広域幹線道路(高崎西工区)に伴って、令和元年12月に発掘調査された遺跡である。

群馬県高崎土木事務所(以下高崎土木)は西毛広域幹線道路整備を進めるにあたり、西毛幹線道路本線につながる取り付け道路部分に対して、群馬県知事部局県土整備部建設企画課をとおして、群馬県教育委員会文化財保護課(以下保護課)に照会した。これを受けた保護課は当該事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である(高崎市遺跡番号H088A)こと、さらに先に西毛広域幹線道路整備事業に伴う調査が行われた本郷大力サ遺跡などが近接することから、確認調査の必要がある旨的回答をした。そのため高崎土木は、保護課に試掘・確認調査の実施を依頼した。

保護課による確認調査は平成30年7月に行われ、遺構の存在、遺構の時代・種類、予想遺構量を確認した。そ

の結果、調査対象地のうちの一部に対し遺構と遺物が確認されたため本調査が必要と判断された。

この結果を基に保護課は高崎土木に対して、試掘・確認調査の依頼範囲の一部で、事業を実施するにあたり埋蔵文化財の発掘調査が必要である旨を通知した。高崎土木は、高崎市教育委員会に必要書類を提出し、高崎市教育委員会は保護課に進達を行った。

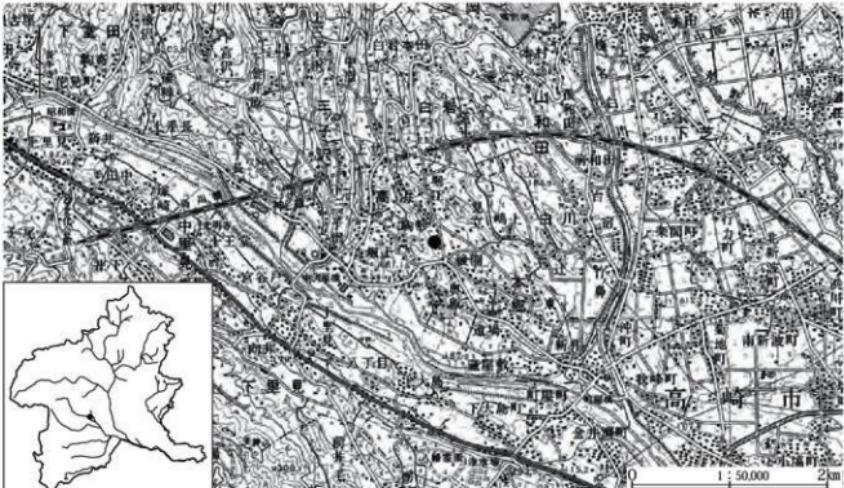
なお、遺跡名称に関しては高崎市教育委員会と保護課の協議の結果、「高浜天狗原遺跡」とした。

このように、高浜天狗原遺跡は保護課の試掘確認調査を受け、令和元年10月、高崎土木からの委託を受け、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下事業団)が発掘調査を実施することになり、調査期間は令和元年12月1日より令和元年12月31日の1ヶ月間、面積761.8m²を対象に行うことになった。

2 調査の経過

発掘調査は、事業団からは調査担当者2名が担当し、現場代理人及び発掘作業員が遺跡掘削工事を行った。

調査着手にあたって、排土置き場を調査区内に設定す



第1図 遺跡位置図(国土地理院1/50,000地形図「榛名山」を加工)

そのため、調査区を南北に2分割して調査を開始した。安全対策としては、ロープスティックとトラロープを使用して調査区を囲い、看板や旗を使った危険個所を明示した。

調査は、表土掘削にあたり掘削重機を使用して、ローム漸移層及び上層の黒褐色土上面まで掘り下げ、遺構確認を行った。前述のように、調査区を南北に分けた分割調査を行い、先に南側から着手した。その結果、縄文時代の竪穴建物4棟、古墳～古代の竪穴建物8棟、土坑15基、溝1条、ピット44基が調査された。また、旧石器時代の遺構・遺物の確認調査を2箇所の調査坑を設定して行ったが、遺物の出土は見られなかった。

遺構の記録化に関しては、遺構の測量に関しては主に測量会社に委託してデジタル化した。縮尺については全ての遺構の平・断面図を1/20で、竪穴建物カマド詳細図を1/10で、さらに全体図を1/150で作成した。

遺構の個別写真は発掘調査担当者によるもので、主に一眼レフのデジタルカメラと中判カメラによる6×7判モノクロームフィルムを用いた。

以下調査日誌抄を掲載する。

令和元年	
12月2日(月)	事務所設営・器材など搬入 重機による表土掘削、南半より。
12月3日(火)	南半表土掘削終了 安全対策・囲いなど設置。 遺構確認着手
12月4日(水)	遺構調査継続(土坑・ピットなど) 安全対策
12月5日(木)	1号竪穴建物着手 南半全景写真撮影
12月9日(水)	1～5号竪穴建物調査 北半耕土移動及び表土掘削
12月16日(月)	南半調査終了。北半遺構確認 6・8号竪穴建物調査着手
12月18日(水)	北半遺構確認 6・8～10号竪穴建物調査
12月20日(木)	北半全景写真 6・8・10号竪穴建物調査
12月24日(火)	11・12号竪穴建物調査 旧石器試掘調査着手～26日
12月27日(金)	調査終了。埋め戻し及び撤収作業 調査区周辺整備

第2節 整理作業の経過と方法

高浜天狗原遺跡の整理作業は、高崎土木の委託を受け、事業団が令和3年6月1日から令和3年9月30日にかけて実施した。

出土遺物は、整理担当者が全ての遺物の選別を行った。土器・石器などの種別の分類、時代・時期毎の分類作業、さらに遺構別の帰属を図った。縄文土器や土師器・須恵器は遺構毎に接合作業を進めて、さらに遺構間・遺構外遺物との接合の有無も確認した。その上で時代・時期毎の報告書掲載遺物の選別を行い、補強・復元作業を経て、写真撮影、実測、ト雷斯作業を加えた。石器や金属器も写真撮影・実測作業・トレス作業を行っている。

同時に報告書掲載遺物の観察表を作成し、各遺物の属性を資料化した。報告書非掲載遺物に関しても、土器は器種・型式などの分類項目で数量一覧を作成し、石器も器種・石材などを勘査した一覧表を作成した。

遺構写真は発掘調査時で撮影されたデジタル写真から掲載写真を選択し、サイズの調整や補正を加えて報告書写真図版を作成した。

発掘調査で得られた遺構も台帳を作成し、遺構規模を計測して計測表を作成した。遺構図の修正を経て土層断面図と注記の整合を果たし、デジタル化を果たしている。

上記の遺物図・遺構図・写真図版作成と平行して、本文原稿を作成しそれらを併せてデジタル組版及びデジタル複集を行った。このデジタルデータを指名競争入札などで決定した業者に印刷・製本を委託している。

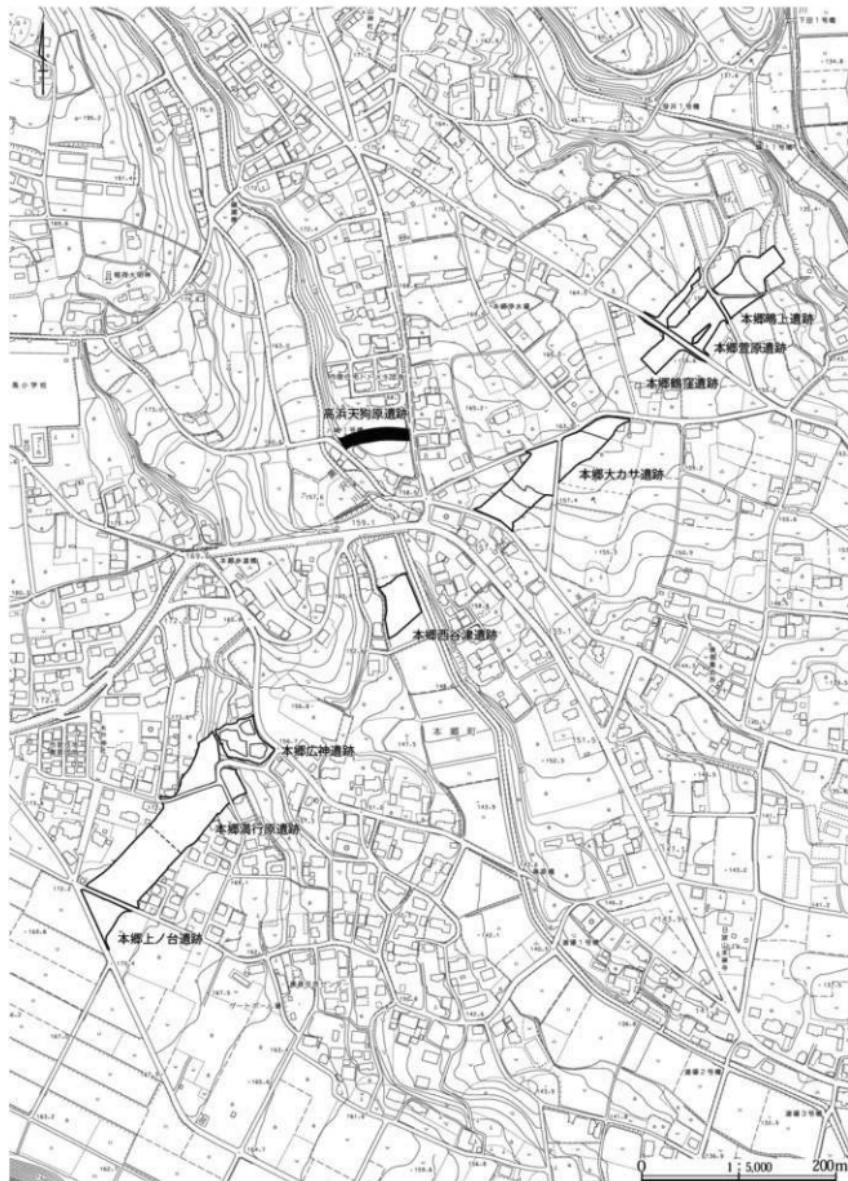
納品された報告書は、検品・完了検査の後、活用に資するため関係各機関に発送する。

なお、発掘調査、整理作業の過程で作成された各種図面や写真及び出土遺物などの資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管している。

第3節 遺跡の立地と環境

高浜天狗原遺跡は高崎市高浜地内にあり、烏川左岸に立地し榛名山南麓部を形成する樹枝状に横列する洪積台地の一端にある。周辺は閑静な住宅街で、高崎市立久留馬小学校の東に谷を挟んで約350mに位置する。

本節では、高浜天狗原遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境について概観する。



第2図 遺跡配置図(高崎市発行の都市計画図を加工)

1 地理的環境

本遺跡のある高崎市高浜町は、旧群馬郡棟名町に所在する。旧棟名町は平成18年に高崎市と合併し、旧町名を付せていない。旧棟名町は棟名山頂にある火口原湖の棟名湖を北境とし、棟名山南麓域を旧箕郷町と分け、さらに烏川右岸の秋間丘陵を含めた地域である。

上毛三山の一つである棟名山は県中央に位置する火山である。約5万年前とされる噴火では棟名一八崎軽石を噴出し大規模な白川(室田)火砕流が発生した。この時のマグマ噴出による山頂の凹地が「棟名カルデラ」と呼ばれる。このカルデラ内に生じた火口原湖が棟名湖である。白川火砕流は、棟名山南麓を覆いさらば烏川を超えて対岸の秋間丘陵まで達する。この白川火砕流などによって形成された台地に室田台地、十文字台地、本郷台地、里見台地がある。この地域はその後に起こった棟名山や浅間山などの活発な火山活動によって、さらに厚く火山噴出物が覆うことになる。棟名山は6世紀に2度に渡り大規模噴火を起こしており、この痕跡が様々な遺構として各遺跡で検出されている。

さて、烏川は長野県境に位置する鼻曲山に源を発し、下流で碓冰川や鍋川、神流川などと合流し、埼玉県境にある坂東大橋付近で利根川へと注ぐ。烏川は西毛地域の大半を流域に持ち、その谷筋は当地域の重要な交通路となつており、地域社会の形成などに重要な役割を担つてきた。旧棟名町はこの烏川の上流～中流域にあたり、右岸の旧里見村一秋間丘陵には河岸段丘が形成され、左岸は前述の室田台地、十文字台地、本郷台地が多くの中川河川の開析によって樹枝状に連なる地形を呈す。

本遺跡が立地する十文字台地は西に黒沢川が流れ、本遺跡はこの黒沢川の左岸にあたる。調査区内の標高163.0m前後で、黒沢川との比高は7m程である。

2 歴史的環境

本遺跡が所在する旧棟名町は多くの埋蔵文化財を包蔵する地域として知られる。特に古墳に関しては、昭和45年に発掘調査された本郷大塚古墳やしどめ塚古墳など墳丘形態や出土遺物が極めて良好な資料として位置付けられていた。その後当地域の開発事業により棟名町教育委員会による発掘調査が行われ、数多くの遺跡が明らかに

なった。さらに、北陸新幹線関連の発掘調査が平成3年に始まり、旧群馬町や旧箕郷町、旧棟名町内でも多くの遺跡が発掘調査されるようになった。最近では、棟名町誌編纂事業により、上記の遺跡の資料化や学術調査が行われ、当地域の考古資料は充実を果たしたといつてよい。

ここでは、高浜天狗原遺跡で検出された縄文時代や古墳時代、古代に比定される遺跡を中心に、特に棟名白川と烏川に挟まれた間を対象とし主な遺跡の概要を述べていきたい。

(縄文時代) 本遺跡から近距離にある、本郷鶴楽遺跡(2)は白川火砕流が形成した台地に立地しており、縄文時代中期後葉の遺構遺物を中心に後期資料も調査されている。本郷溝行原遺跡(4)、子安遺跡(29)、日輪遺跡(30)では前期集落が台地上に立地する。子安遺跡・日輪遺跡ともに竪穴建物からの出土で前期中葉期に比定される。また中尾根遺跡(28)は遺構出土ではないが燃系文系土器や押型文土器など早期中葉の土器が少数ながら出土している。

北陸新幹線関連の調査では多くの縄文時代遺跡が調査されている。当地域を東西に横列する台地を貫く形で調査されており、概ね前期と中期集落が主体となっている。本遺跡や本郷溝行原遺跡に比して標高が高い地点でやや広い台地に選地する傾向が見られる。以下概要を記す。

和田山天神前遺跡(17)は旧群馬町に所在する遺跡である。前期中葉と中期後葉の竪穴建物や土坑多数が調査されている。白川傘松遺跡(18)は旧箕郷町に所在する遺跡で、中期後半の大型集落として知られる。前期竪穴建物と多数の中期竪穴建物が調査されている。また土坑より翡翠製大珠が出土している。白川笹塚遺跡(19)は旧箕郷町と旧棟名町を跨ぐ遺跡である。前期中葉の竪穴建物と中期中葉及び後葉の竪穴建物が検出されている。他の中期集落に比して若干古い時期の遺構・遺物が見られる。白岩浦久保遺跡(20)は旧棟名町に所在する。早期後葉と前期後葉に比定される土坑がある。白岩民部遺跡(21)は遺構外出土遺物として、前期後葉から中期後葉にあたる土器片が出土するが希薄な出土量である。旧石器時代遺跡として著名である。高浜広神遺跡(22)は本遺跡と同一字名にあり、黒沢川の沢筋にあたる共通性を持つ。中期末葉の敷石住居や土坑が調査されている。高浜向原遺跡(23)も高浜町にあるが、本遺跡とは別の沢筋に立地する。

前期初頭の竪穴建物3棟が調査されている。三ッ子沢中遺跡(24)は当地域で白川傘松遺跡と並ぶ大型集落遺跡である。竪穴建物は前期9棟、中期8棟、後期2棟で土坑は100基以上が群在する。75号土坑からは玉斧が出土している。この他では神戸宮山遺跡(25)で前期後葉、神戸岩下遺跡(26)で中期～後期の土器片が出土しているが希薄である。

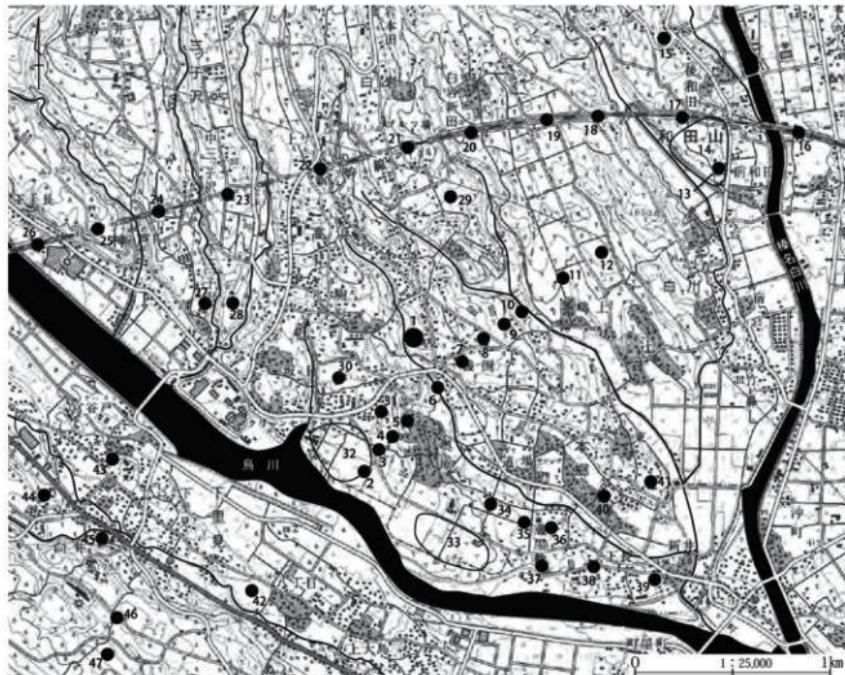
烏川対岸にある中通遺跡(45)で晚期前葉の資料、下里見上ノ原・中原遺跡(46)で前期竪穴建物が調査されている。

(古墳時代) 前述のように当地域は著名な古墳、古墳群が調査されてきた地域である。和田山古墳群(14)は終末期古墳で構成される。同じ地点の和田山天神前2遺跡(13)では埴輪片が報告されている。さらに和田山天神前遺跡では方形周溝墓1基、古墳26基、竪穴建物5棟が調査されている。古墳は6世紀後半から7世紀中頃、竪穴建物は6世紀中頃から後半に比定されている。

旧榛名町内の古墳は榛名町誌(文献24・25)に詳しい。旧榛名町内で中核的な古墳の在り方を示す地域として、「久留馬地区I群一本郷I古墳群」と位置付けられている。このI群の中には、本郷奥原古墳群(32)、本郷的場古墳群(33)、しどめ塚古墳(35)などがあり、さらに古墳時代居館として道場II遺跡(34)や蔵屋敷遺跡(36)で調査された「本郷・蔵屋敷環溝居館跡」は極めて重要な位置を占める遺構である。他に石櫛墓を検出した寺内遺跡(38)、稻荷森遺跡(39)などが包括されるエリアである。

本郷奥原古墳群は終末期古墳、本郷的場古墳群には内行花文鏡を出土した本郷大塚古墳(4世紀)や帆立貝形古墳である本郷福荷塚古墳(6世紀前半)がある。しどめ塚古墳は7世紀前半の円墳で金銅製耳飾や勾玉、切子玉、ガラス製小玉、金銅製透彫飾金具、大刀、鉄鎌、鎧、鉄地金銅装透彫花弁形杏葉など充実した出土量を誇る。

この他では、権現稟古墳(40)が5世紀代の古墳と目され、三ッ子沢中遺跡では終末期古墳1基が調査されてい



第3図 周辺遺跡位置図(国土地理院1/25,000 地形図「下室田」を加工)

第1章 調査経過と周辺の環境

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	繩文	弥生	古墳	奈良	平安	主な文献
1	高浜天狗原遺跡	○	○	○	○	○	本道跡
2	木郷鶴峯遺跡	○	○	○	○	○	13・14
3	木郷上ノ台遺跡				○		
4	木郷下ノ原遺跡	○	○	○	○		
5	木郷広砂遺跡					○	
6	木郷内谷津遺跡				○		
7	木郷大子サ遺跡		○	○			
8	木郷深澤遺跡			○			
9	木郷菅原遺跡	○	○	○			
10	木郷朝日遺跡	○	○	○			
11	朝日I遺跡	○	○	○	○	1	
12	茅畠遺跡	○	○	○	○	1	
13	和田山天神前2遺跡		○		○	2	
14	和田山古墳群		○			17	
15	高岡竹ノ原・ 和田山寺久保遺跡		○			3	
16	下芝上田原遺跡			○	○	10	
17	和田山天神前遺跡	○	○	○	○	9	
18	白川韋松遺跡	○	○			8	
19	白川猿塚遺跡	○	○	○	○	7	
20	白岩浦・保遺跡	○	○		○	7	
21	白呂民部遺跡	○	○		○	7	
22	高浜広神遺跡	○	○	○	○	6	
23	高浜向原遺跡	○	○	○	○	4	
24	三ヶ子井戸遺跡	○	○	○	○	5	
25	神戸宮下遺跡				○	4	
26	神戸岩下遺跡				○	4	
27	(伊勢)鷲山古墳			○		24・25	
28	中尾根遺跡	○	○	○	○	24・25	
29	子安遺跡	○	○			24・25	
30	日輪遺跡	○	○	○	○	18・24・25	
31	木郷奥原遺跡		○		○	11・24・25	
32	木郷奥原古墳群		○		○	11・24・25	
33	木郷の古墳群		○		○	12・24・25	
33	木郷稲荷古墳 (の場 E古墳)		○		○	12・24・25	
34	木郷大吉古墳		○		○	24・25	
34	道場遺跡				○	23～25	
34	道場Ⅱ遺跡	○	○		○	24・25	
34	道場Ⅲ遺跡	○	○		○	24・25	
35	しじめ古墳				○	24・25	
36	疏屋敷遺跡	○	○	○	○	24・25	
36	疏屋敷古遺跡	○	○	○	○	24・25	
37	小白塚古墳				○	24・25	
38	供養塚遺跡	○	○	○	○	24・25	
38	寺内遺跡	○	○	○	○	24・25	
39	稲荷森遺跡	○	○	○	○	24・25	
40	椎覗積古墳				○	24・25	
41	麻干原遺跡				○	24・25	
42	下里見宮原前遺跡		○	○	○	15・16	
43	下里見宮谷口遺跡	○	○	○	○	19～22	
44	下里見瀬跡古墳			○		24・25	
45	中通遺跡	○				○	24・25
46	下里見上ノ原・ 中原遺跡	○	○	○	○	○	24・25
47	堂尾根2号墳		○			○	24・25

文献

- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017「茅畠遺跡・鳴上I遺跡」
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2019「下芝内出畠遺跡・和田山天神前2遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006「高岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000「高浜向原遺跡・神戸宮山・神戸岩下」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000「三ッ子沢中遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999「高浜広神遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000「白川猿塚遺跡・白岩浦久保遺跡・白岩氏部遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1995「白川韋松遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999「和田山天神前遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998「下芝天神遺跡・下芝上田原遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983「奥原古墳群」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990「木郷の場古墳群」
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2018「年報37」
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2019「年報38」
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2020「年報39」
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2021「年報40」
- 高崎市教育委員会2008「和田山古墳群」
- 高崎市教育委員会2016「高浜日輪遺跡」
- 高崎市教育委員会2013「下里見宮谷口遺跡第一次」
- 高崎市教育委員会2014「下里見宮谷口遺跡2」
- 高崎市教育委員会2014「下里見宮谷口遺跡3」
- 高崎市教育委員会2019「下里見宮谷口遺跡4」
- 榛名町教育委員会1986「道場遺跡」
- 榛名町誌編さん委員会2010「榛名町誌 資料編1 原始・古代」
- 榛名町誌編さん委員会2011「榛名町誌 通史編上巻原始古代・中世」

る。伊勢殿山古墳(27)は7世紀代の円墳である。また、鳥川対岸には6世紀の円墳が調査された下里見天神前遺跡(42)、6世紀前半の帆立貝形古墳とされる下里見諏訪山古墳(44)、7世紀末に比定される堂尾根2号墳(47)が選地している。

(古墳時代～平安時代集落) 古墳時代の集落遺跡も多い。多くが平安時代の集落と立地条件が類似する。厳密な継続性は観察されていないが、集落立地条件は近いものがあるようだ。ここでは、古墳時代から平安時代にかけての集落を例にして、特徴的な事例を挙げる。また、古代の水田・畠などの生産跡も同時に記載したい。

本遺跡南には近年事業団が調査した本郷鶴楽遺跡から茅畠遺跡(12)が連なるが、多くの遺跡で古墳時代～平安時代の集落が調査されている。未報告であるが本郷鶴楽遺跡と本郷溝行原遺跡は大規模な集落遺跡であり、本郷溝行原遺跡は古代寺院も調査されている。生産跡では本郷広神遺跡(5)、本郷西谷津遺跡(6)でAs-B下水田が見られている。旧群馬町部分になるが、富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡では古墳時代集落、下芝上田屋遺跡では古代の畠や水田が調査・報告されている。

一連の北陸新幹線調査でも古墳時代～古代の集落や生産跡は各遺跡で調査されている。特に本遺跡と同じ沢筋にある高浜広神遺跡では古墳時代終末期の7世紀から平安時代にかけた集落が調査され、竪穴建物、掘立柱建物、柵、水田が検出されている。出土遺物として金銅製丸瓶、鉄製鍵、焼印、錫子(せっしー)ビンセット・毛抜き)、鎌先、鎌など金属製品が豊富である。焼印は牛馬への刻印を意味し、丸瓶や鉄製鍵の存在は集落の特殊性を箇先や鎌などは当地域の鉄製品生産を示唆している。極めて重要な集落遺跡である。一連の調査では白岩浦久保遺跡や三ッ子沢中遺跡などでも古墳時代～平安時代の集落が報告されている。三ッ子沢中遺跡では石製丸瓶を出土する10世紀代の竪穴建物を調査している。

本遺跡から西南西の近距離にある日輪遺跡では古墳時代後期から奈良時代にかけての集落が調査されている。平安時代の竪穴建物は検出されておらず、限定的な時期に営まれ、本郷奥原古墳群の背景にある集落として位置付けられている。本郷溝行原遺跡西に接する本郷奥原遺跡(31)は古代寺院が想定されている遺跡である。県内最古段階とされる素弁四弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平

瓦が知られ、さらに権名町誌編纂事業により新たに個人所蔵の軒丸瓦などが加えられている。本郷溝行原遺跡でも同様の瓦が出土しており、寺院としての位置付けなど、注目される遺跡群と遺物である。日輪遺跡と共に巨視的な分析が必要な遺跡群である。

道場遺跡は平安時代～9世紀前半代の集落遺跡で墨書き土器の出土が目立つ。道場Ⅱ遺跡で検出した1号溝は、藏屋敷遺跡の居館の方形環溝北辺と捉えられている。その他に古墳時代竪穴建物や平安時代竪穴建物がある。道場Ⅲ遺跡では古墳時代竪穴建物が充実する。中でも7号竪穴建物では豊富な土器組成に石製模造品(勾玉形・劍形、有孔円盤)が加わる中期後半の良好なセットである。

藏屋敷遺跡でも遺構密度が高く特に古墳時代中期後半から後期の竪穴建物出土資料が充実する。豊富な出土土器量に加え韓式系軟質土器が出土している。前述したが本遺跡で調査された2号溝一方形溝区画遺構は、道場Ⅱ遺跡で得られた1号溝と一体化した遺構であり、居館を形成する東辺の溝として位置付けられている。周辺古墳群などとの関連も注意を要しよう。なお、10世紀代の竪穴建物からは銅印が出土している。

供養塚遺跡(37)は古墳時代中期～5世紀後半代の竪穴建物7棟と平安時代の竪穴建物1棟を見る。麻干原遺跡(41)は古墳時代初頭から中期を最盛期として、平安時代まで継続する集落遺跡である。検出遺構及び出土遺物も極めて多い。同様に稻荷森遺跡や寺内遺跡も古墳時代～平安時代の充実した遺構・遺物量を誇る集落遺跡である。これらの集落遺跡と周辺の古墳や古墳群及び「本郷・藏屋敷環溝居館跡」との関連も今後の当地域の検討課題となっている。

対岸の鳥川左岸の古墳時代～平安時代集落としては、図示していないが中里見原遺跡で9～10世紀代を中心とした平安時代集落が充実する。中里見廢寺として推定される9世紀代の基壇状建物や掘立柱建物も含まれ、当地域の中心的な役割を担った集落と位置付けたい。また中里見根岸遺跡などで古墳時代初頭期(As-C下)の水田跡や平安時代(As-B下)の水田が調査されている。古墳時代集落としては下里見宮谷戸遺跡で4世紀後半から5世紀前半の竪穴建物が数棟調査されている。

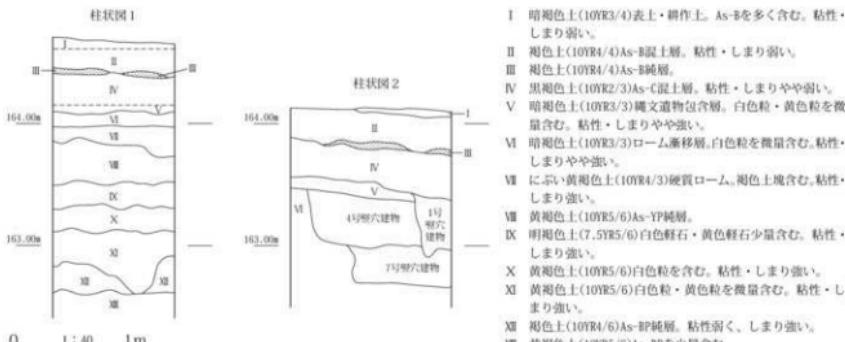
第4節 基本土層

ここでは、高浜天狗原遺跡の基本土層を述べる。先に述べたように、本遺跡は榛名山南麓を覆う白川火砕流によって形成された台地の一つである十文字台地にあり、西に黒沢川を望む台地上に占地する。前節で触れ得なかったが、周辺には白岩民部遺跡など旧石器時代の遺跡も点在しており、各遺跡の報告書で基本土層が詳細に述べられている。本節では本郷鶴楽遺跡や本郷溝行原遺跡などの基本土層との比較のため、概略を記しておく。

ローム漸移層までの柱状図は、調査区内各地点で資料化されている。ここでは、旧石器試掘が行われた調査区北側の台地頂部と3棟の竪穴建物が重複する遺構密度の高い調査区南西部を中心にした柱状図を示したい。

I層は表土層、耕作土層である。おそらく2層が攪拌を受けた層と判断できる。

II層は浅間Bテフラ(As-B)混土層。含有量は多くそのため砂質の感を受ける。層厚は20~40cmで比較的厚く調査区全体を覆う様相である。I層より明るい色調を示す。



中世～近世遺構はおそらく本層位から切り込むと思われるが、今回の調査では特定できなかった。

III層は浅間Bテフラ純層。1108年に降下したテフラである。調査区全域で観察されたが、北側の台地頂部付近は断続的に地點的な様相を示す。直下の層における畠・水田などの生産跡は検出されなかった。

IV層は浅間Cテフラ(As-C)混土層。3世紀末～4世紀初頭に降下とされる。該当する遺構は検出されなかった。古墳時代～平安時代の遺構はこの層を確認面としている。層厚は30~40cmである。

V層は調査区南側の一部で確認される。調査では縄文包含層とされている。層厚10cm前後で前期中葉を中心とした中期前葉、後期前葉の土器を含む。

VI層はローム漸移層で、縄文時代遺構はこの層で平面形を確定している。

VII層以下は旧石器調査坑で確認された層位である。石器の出土をみないため、詳細は避けるがAs-YP純層やAs-BP純層を検出している。

- I 暗褐色土(10YR3/4)表土・耕作土。As-Bを多く含む。粘性・しまり弱い。
- II 褐色土(10YR4/4)As-B混土層。粘性・しまり弱い。
- III 褐色土(10YR4/4)As-B純層。
- IV 黒褐色土(10YR2/3)As-C混土層。粘性・しまりやや弱い。
- V 明褐色土(10YR3/3)縄文遺物包含層。白色粒・黄色粒を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- VI 明褐色土(10YR3/3)ローム漸移層。白色粒を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- VII にぶい黃褐色土(10YR4/3)硬質ローム。褐色土塊含む。粘性・しまり強い。
- VIII 黄褐色土(10YR5/6)As-YP純層。
- IX 明褐色土(7.5YR5/6)白色軽石・黄色軽石少量含む。粘性・しまり強い。
- X 黄褐色土(10YR5/6)白色粒を含む。粘性・しまり強い。
- XI 黄褐色土(10YR5/6)白色粒・黄色粒を微量含む。粘性・しまり強い。
- XII 褐色土(10YR4/6)As-BP純層。粘性弱く・しまり強い。
- XIII 黄褐色土(10YR5/6)As-BPを少量含む。

第4図 旧石器試掘坑配置図(1/400)及び土層柱状図(1/40)

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

(旧石器時代)

本遺跡の周辺には旧石器時代の石器群を検出した遺跡が多い。すべて十文字台地に立地する遺跡で、本遺跡と共に通する要素である。本遺跡の旧石器時代調査は、調査面積が狭小なこともあり、調査区北側の台地頂部を中心 2×4 mの確認トレンチを2箇所設けて、As-BP下まで掘り下げ、石器の検出に努めた。しかしながら、石器の出土を見ることは適わず、本遺跡の調査範囲には旧石器時代の文化層は存在しないと判断し、各確認トレンチのローム層の堆積状況を柱状図として記録化した。この柱状図や確認坑の配置については、第4図を参考にしていただきたい。

(縄文時代)

縄文時代前期中葉に比定される竪穴建物3棟と中期前葉とみられる竪穴建物1棟を検出した。いずれも、周辺遺構との重複もありかや柱穴を確認できなかった。多くが不整形を平面形とし、12号竪穴建物のみが不整円形を呈す。分布傾向は4・7号竪穴建物、11号竪穴建物が調査区西側の竪穴建物群にあり、12号竪穴建物が東側に分布する。西側竪穴建物群が優勢な感があるが、台地縁辺を竪穴建物群が弧状に配される様相も予想され、確定的な分布状況は判断できない。前期中葉の竪穴建物は7号、11号、12号竪穴建物で3棟とも古墳～古代の竪穴建物と重複する。中期前葉段階の竪穴建物として4号竪穴建物があるが、古代の1号竪穴建物が重なり、前期の7号竪穴建物に乗る重複状況を示す。

出土遺物は土器を中心とするが、完形土器の出土は見られず、各竪穴建物とも破片状態で出土している。この中で11号竪穴建物が豊富な出土量を示し、一括出土として位置付けられる出土状態だった。前期中葉の土器群は有尾式と黒浜式が伴出する出土だが、これは県内該期遺跡でも普遍的な在り方である。また、中期前葉の土器を出土した4号竪穴建物は阿玉台1b式と勝坂1式が伴出するが、阿玉台1b式がやや優勢な出土量を示していた。

土坑は調査区東側で15・16号土坑が重複した状態で調査された。両者とも前期中葉に比定され、近接する12号竪穴建物との関連性が窺われる。

縄文時代の遺構外出土遺物に関しては、多くが竪穴建物出土遺物と同様な様相を示すが、後期前葉の埴之内1式土器がある程度の量を示す。あるいは近接した調査区外に後期遺構の存在も予想されよう。

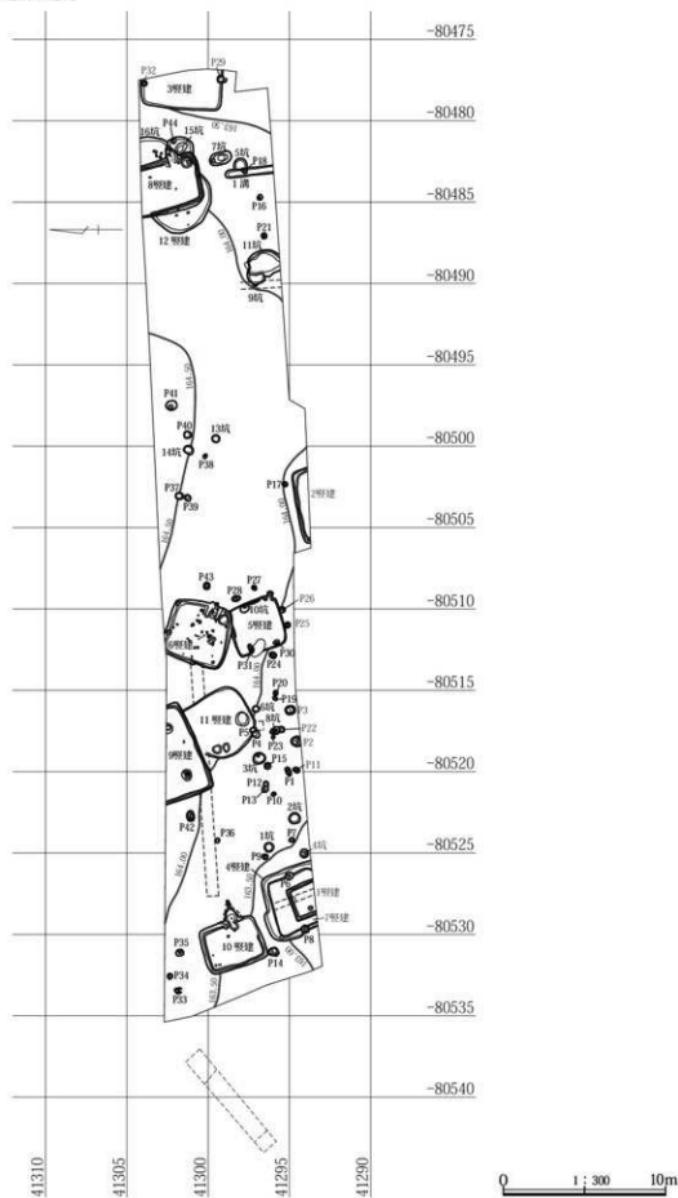
(古墳時代～古代)

竪穴建物8棟が調査された。そのうち2棟が古墳時代(6世紀後半)に、他はほぼ古代(8・9世紀代)に比定される。すべて方形を基調とした平面形で、カマドは東壁や南寄りや南東隅に設けられる。調査区外に平面形を延長する例が多く全容が把握されたのは5・6・10号竪穴建物のみである。分布状況は調査区西側に1・5・6・9・10号竪穴建物が、中央南端に2号竪穴建物、東側に3・8号竪穴建物が見られる。縄文時代の分布状況と似ており西側に偏る傾向が見られるが、調査区外の台地縁辺の分布状況も勘案すべきで確定はできない。古墳時代に比定した竪穴建物は5号と9号竪穴建物で、9号竪穴建物は軸長6m近い大型の例であろう。5号竪穴建物は東南隅に設けられたカマドがこの時期にして珍しいが、事例は皆無ではないので古墳時代に位置付けたい。白玉や菰網石の出土にも注意したい。

古代に比定したその他の竪穴建物では6号竪穴建物が出土遺物も豊富で良好な遺存度を誇る。土師器杯、須恵器杯・蓋の出土が目立ち供膳具中心の土器組成を示す。

土坑・ピットでは、ピットが注意される。調査区西側中央南に集まるピットの多くは柱痕を有し、深さが50cmを超える例もあり、掘立柱建物の存在が予想された。掘立柱建物を示唆するピットとして位置付けた。また、竪穴建物壁外対辺でピットを設ける例も見られ、竪穴建物壁外柱穴を示唆するピットとして考えた。

5号土坑を切る1号溝が調査区東側に見るが、こちらは水利ではなく地割などの性格を充て、時期は不明としている。



第5図 造構配置図(1/300)

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 竪穴建物

竪穴建物は4棟を数える。調査区西側に3棟、東側に1棟が調査されている。おそらく地形全体に沿った配置で、調査区北を頂部とした台地縁辺に竪穴建物が分布するものと考えられ、調査区北側や南側への竪穴建物分布が予想されよう。

調査は古墳時代以降の遺構調査が終了した後に行われ、概ねローム漸移層で検出作業が行われた。

4・7号竪穴建物(第6～9図 PL. 3・18・19)

古代に比定される1号竪穴建物と重複関係にある縄文時代竪穴建物である。1号竪穴建物調査後に2棟同時に検出された。4号竪穴建物は上層で、7号竪穴建物は下層で調査された。

位置：調査区西側の竪穴建物群南西端にあたり調査区南壁にかかり検出された。周辺は南への傾斜地形が顕著な箇所であり、調査区内で最も標高の低い地点でもある。座標位置はX=290～295-Y=-525～-530である。

経過：前述のように1号竪穴建物と重複した状態で調査された。1号竪穴建物埋土は黒色土であり、4・7号竪穴建物は黒褐色土を埋土としていたため、確認は比較的容易だった。また平面形も4号竪穴建物は1号竪穴建物より大型のためその範囲を確定できた。以下、4号と7号竪穴建物を個別に説明する。

(4号竪穴建物)

規模：主軸を北北西に向けた不整方形を平面形とする。南辺を南壁調査外へ延ばすため、全容は判然としないが、軸長約4.2mが推定できる。また、深さは良好な東壁周辺では約1mを測る。北西部が大きく湾曲し、平面形の乱れを見るが、重複の痕跡は見られず一体化した平面形と判断した。なお、確認面は1号竪穴建物と同様に黒褐色土で把握された。

重複：上層に1号竪穴建物、下層に7号竪穴建物が重なる。新旧関係は1号竪穴建物に切られ、7号竪穴建物を切る重複状態を示していた。これは層位的にも出土遺物からも判断できた。

床面：中央部より南側は重複する1号竪穴建物のため、床面は判断できなかった。北側及び東西壁際の床面は軟質ローム上面を地床とし、僅かな凹凸を持つが傾斜は弱くほぼ平坦面に近い。硬化面は見られなかった。

施設：床面上に炉、柱穴、土坑の検出は果たせなかった。西壁にP8、東壁際下にP6があるが両者とも本竪穴建物への帰属が判然とせず、柱穴としての位置付けは果たせない。

遺物：北西部の湾曲部を中心に81点の出土遺物を見る。これは中央部が1号竪穴建物に壊されているためである。17点を図示した。阿玉台1b式や勝坂1式の土器片が主体であるが、埋土上～中層からの出土である。他に数点の前期中葉の資料が混在する。これは重複する7号竪穴建物の影響である。石器はスクレイパー(13)と台石(14)を図示した。台石は北西隅の床直で出土している。

所見：1号竪穴建物に大きく切れ、南側が調査区外に延びることから全容は判然としないが、不整方形を呈する縄文時代の竪穴建物である。下層に7号竪穴建物が重複するが、3棟とも時期差の隔たりが大きく、層位からも新旧関係は確定できる。炉跡や柱穴などが見られないが、帰属時期は出土土器から縄文時代中期前葉と判断したい。本遺跡唯一の縄文時代中期の遺構である。また、平面形主軸が7号竪穴建物と一致する現象は、7号竪穴建物埋没過程による凹みが大きく影響しているものと考えたい。

(7号竪穴建物)

規模：主軸を北北西に向けた不整方形を平面形とする。南辺を調査区外にあるため全体は把握できないが、軸長約3.3mの小型の竪穴建物である。ただ上層が4号竪穴建物に覆われるため、実際の平面規模は4m前後と推定されよう。深さは東側で約1.3mを測る。4号竪穴建物床面からの比高差は約30cm以上であり、また1号竪穴建物の床面は本竪穴建物の床面には達しておらず、遺存度は良好といえよう。

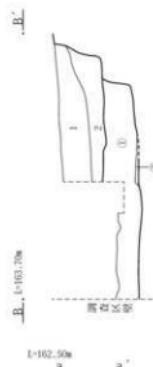
重複：1号竪穴建物、4号竪穴建物と重なるが、最も古い竪穴建物である。

床面：硬質ローム上面を地床とし、傾斜も無くほぼ平坦面を築く。顕著な硬化面は確認されなかった。

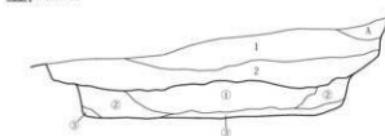
施設：床面よりピット1基(P1)を検出した。不整円形の平面形で約28×24×30cmを測る小規模はピットであ

第2章 発見された遺構と遺物

4号竪穴建物使用面



7号竪穴建物使用面



0 1 60 2m

- 4・7号竪穴建物上層
1 黒褐色土(10R2/3)暗褐色土塊を多く、白色粒・黄色粒を少量含む。粘性やや弱く、しまり強い。4号竪穴建物埋土上。

- 2 黒褐色土(10R2/3)少量の暗褐色土塊・白色粒・黄色粒・白色軽石を含む。粘性やや弱く、しまり強い。4号竪穴建物埋土上。

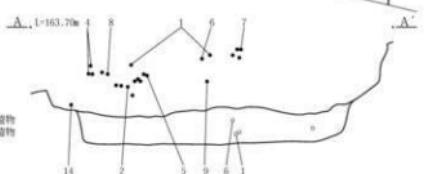
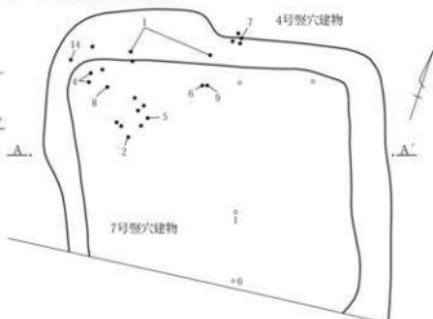
- ① 暗褐色土(10R2/3)暗褐色土塊質上大塊多く、白色粒・黄色粒・白色軽石を少量含む。粘性・しまりやや強い。7号竪穴建物埋土上。

- ② 黒褐色土(10R2/2)黄色粒・白色粒を少量含む。粘性やや強くしまり強い。7号竪穴建物埋土上。

- ③ 暗褐色土(10R3/4)褐色土大塊を多く含む。粘性やや強くしまりやや弱い。7号竪穴建物埋土上。

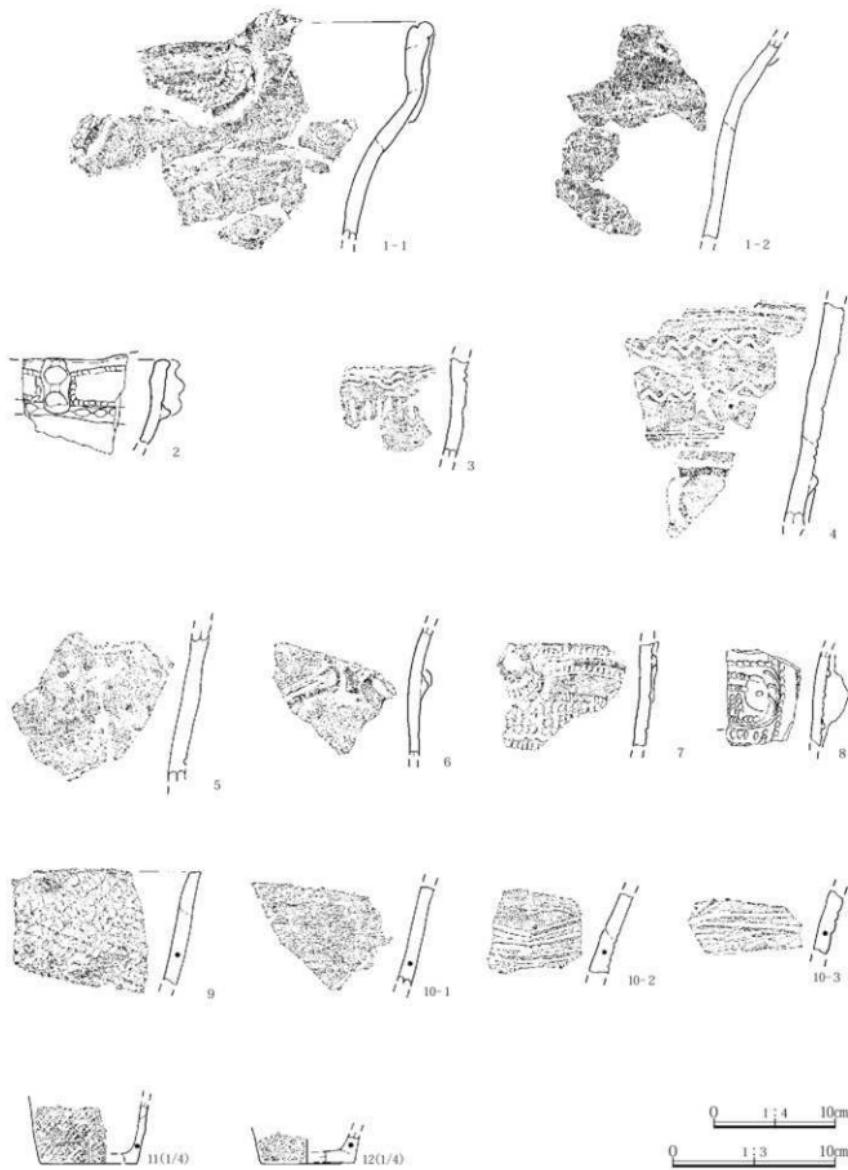
A 木の根の混在。

4・7号竪穴建物遺物分布

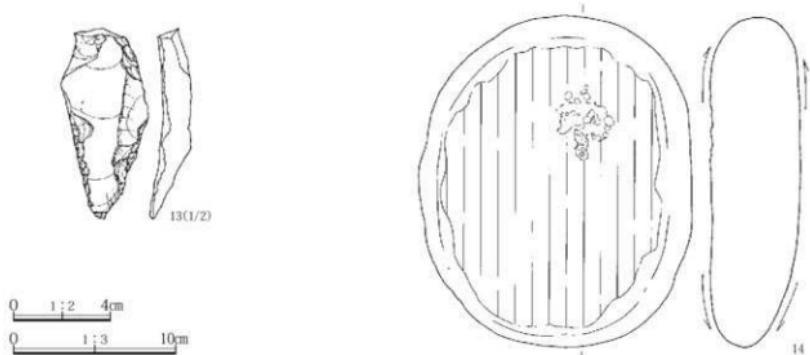


●=4号竪穴建物出土遺物
○=7号竪穴建物出土遺物

第6図 4・7号竪穴建物



第7図 4号竪穴建物出土遺物(1)



第8図 4号竖穴建物出土遺物(2)



第9図 7号竖穴建物出土遺物

る。対応するピットも無く、柱穴としては不適当な配置である。炉跡も見られなかった。

遺物：出土遺物は少なく、総数21点を数える。まとまつた出土状態を示す例ではなく、6点の図示に止まる。出土土器は全て破片状態で埋土中層よりの出土である。黒浜式に比定されよう。石錐(6)も埋土中の出土である。なお、北東隅に円錐と剥片の出土を見るが図化には至らなかった。

所見：不整形の平面形を呈する縄文時代の竖穴建物である。1号竖穴建物や4号竖穴建物に切られるが、全体像は把握され、床面の残存状態は良好である。残念ながら炉跡の検出に至らなかったが、床面の様相や遺構規模から竖穴建物として位置付けて良いだろう。時期は出土遺物から縄文時代前期中葉以降としたい。

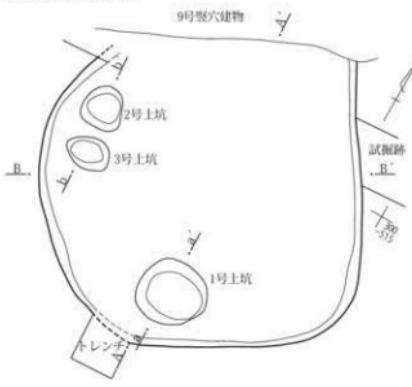
11号竖穴建物(第10～14図 PL. 4・19～21)

位置：調査区西側中央部で9号竖穴建物南に重複して調査された。座標位置はX=295～300-Y=-510～-515である。調査区中央の高標高部より南西への斜面地形にあり、竖穴建物周辺は緩斜面地形が広がりほぼ平坦面が保たれる地点である。南側には土坑群が東側には古代の竖穴建物が近接する遺構密度である。

経過：北側は9号竖穴建物と重複し、東側はローム漸移層で、西側から南側は黒褐色土中で平面形を確認した。埋土との色調差は比較的明瞭で識別は容易だったが西側から南側にかけては、黒褐色土中の確認のため、やや判然としない様相もあるが、暗褐色土による壁の検出により平面形を確定させた。

規模：東辺から南辺は方形を基調とするが、西辺が湾曲様相を示すため平面形は不整形となる。規模は9号竖

11号竪穴建物使用面

 $B-B'$ 

11号竪穴建物 1号土坑上層

- 1 黒褐色土(10YR2/2)白色粒・黄色粒を微量含む。粘性・しまりやや弱い。
- 2 喷褐色土(10YR3/3)粘質ローム塊・As-Ypを含む。粘性・しまりやや強い。



3号土坑・2号土坑

11号竪穴建物 2・3号土坑上層

- 1 喷褐色土(10YR3/4)ローム粒・As-Ypを少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。2坑埋土。
- 2 褐色土(10YR4/4)ローム粒・As-Ypを少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。2坑埋土。
- ① 喷褐色土(10YR3/3)ローム粒・As-Ypを少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。3坑埋土。
- ② にぶい喷褐色土(10YR4/3)ローム粒・As-Ypを含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。3坑埋土。

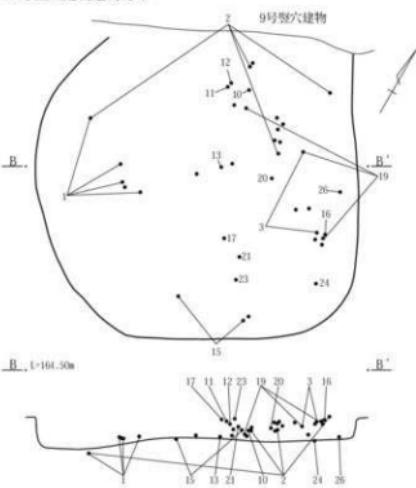
0 1:60 2m

 $A-A'$  $A-A'$

11号竪穴建物上層

- 1 黒褐色土(10YR2/3)白色粒・黄色粒を微量含む。粘性・しまりやや弱い。
- 2 喷褐色土(10YR3/3)褐色土小塊を含む。少量の白色粒・黄色粒を含む。粘性やや弱く、しまり強い。
- 3 黒褐色土(10YR2/3)白色粒・黄色粒を少量含む。粘性やや弱く、しまり強い。
- A 黒色土(10YR2/1)As-C微量混 粘性・しまり弱い。本根か?

11号竪穴建物遺物分布



第10図 11号竪穴建物

第2章 発見された遺構と遺物

穴建物との重複のため南北長が不明だが東西長は約4mを測る。深さは遺存の良好な東壁付近より床面までが約53cmを測る。比較的良好な遺存度である。

重複:古代の竪穴建物である9号竪穴建物に北側壁を切られる。南西壁で4号ピット・5号ピットと重なるが新旧関係は不明である。4号ピットにはAs-Cが含まれるために本竪穴建物よりは新しい所産と判断できよう。

床面:顯著な硬化面などは確認されなかったが、軟質ロームの地床である。大きな凹凸や傾斜もなくほぼ水平な平坦面が広がる。

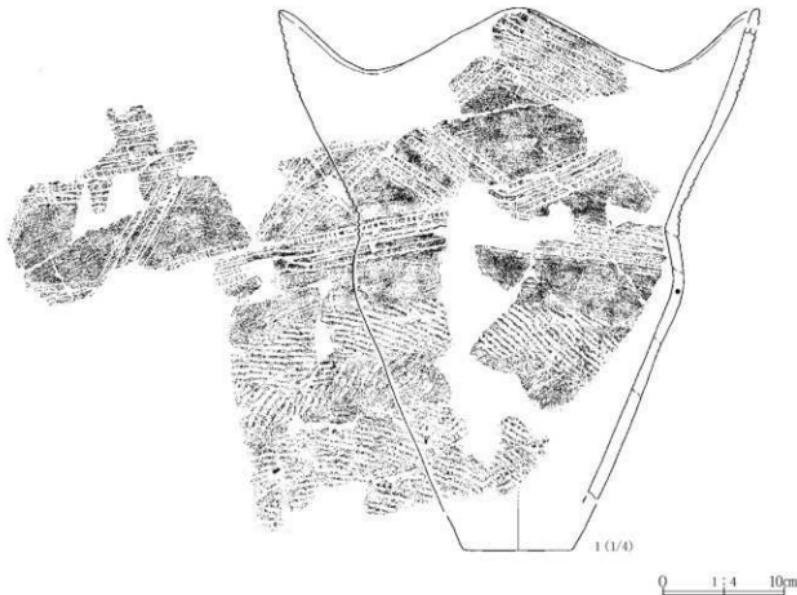
施設:土坑3基を検出した。いずれも径1m以下の不整円形を呈し、深さは30~40cmを測る土坑である。柱穴としての位置付けとしては、規模は良好で2坑・3坑は位置も適当であるが、対応するピット、土坑も見られないとため、不適当と思われる。

炉跡:炉跡も見られなかったが、床面中央に焼土の散布

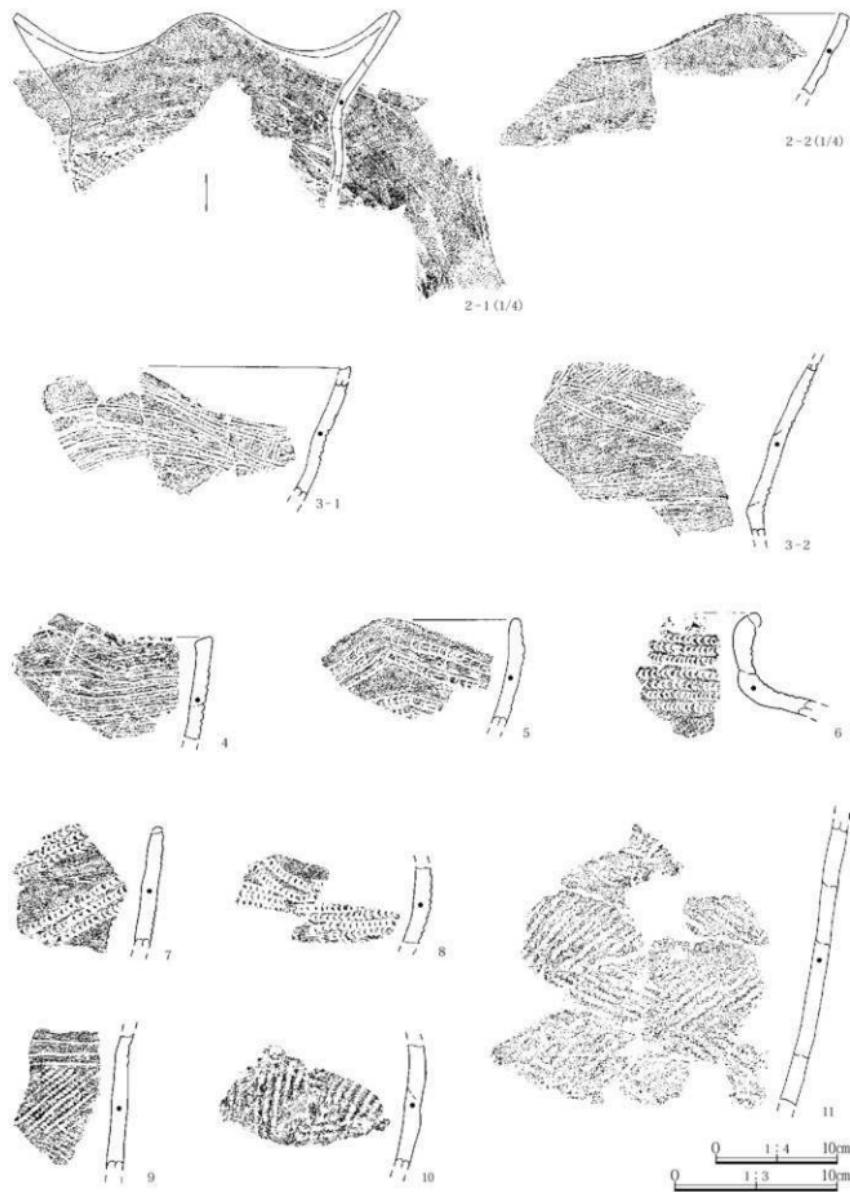
が見られ、やや焼土化した様相を示していたが、掘り込みも無く記録には至らなかった。しかしながら掘り込みを持たないか跡の痕跡としての可能性も指摘しておきたい。

遺物: 豊富な出土量を誇る。26点を図示した。半完形の深鉢(1)は床面の2坑・3坑上面より2坑中層にかけて出土している。おそらく土坑埋没過程での廃棄による所産と捉えられよう。その他の土器片も埋土上層より下層にかけた出土で傾斜に沿った出土状態を示す。出土土器の時期も時間幅は短く、一括廃棄の様相を示す。石器は24の乳棒状磨製石斧や25の磨石が東壁際の床直より出土している。

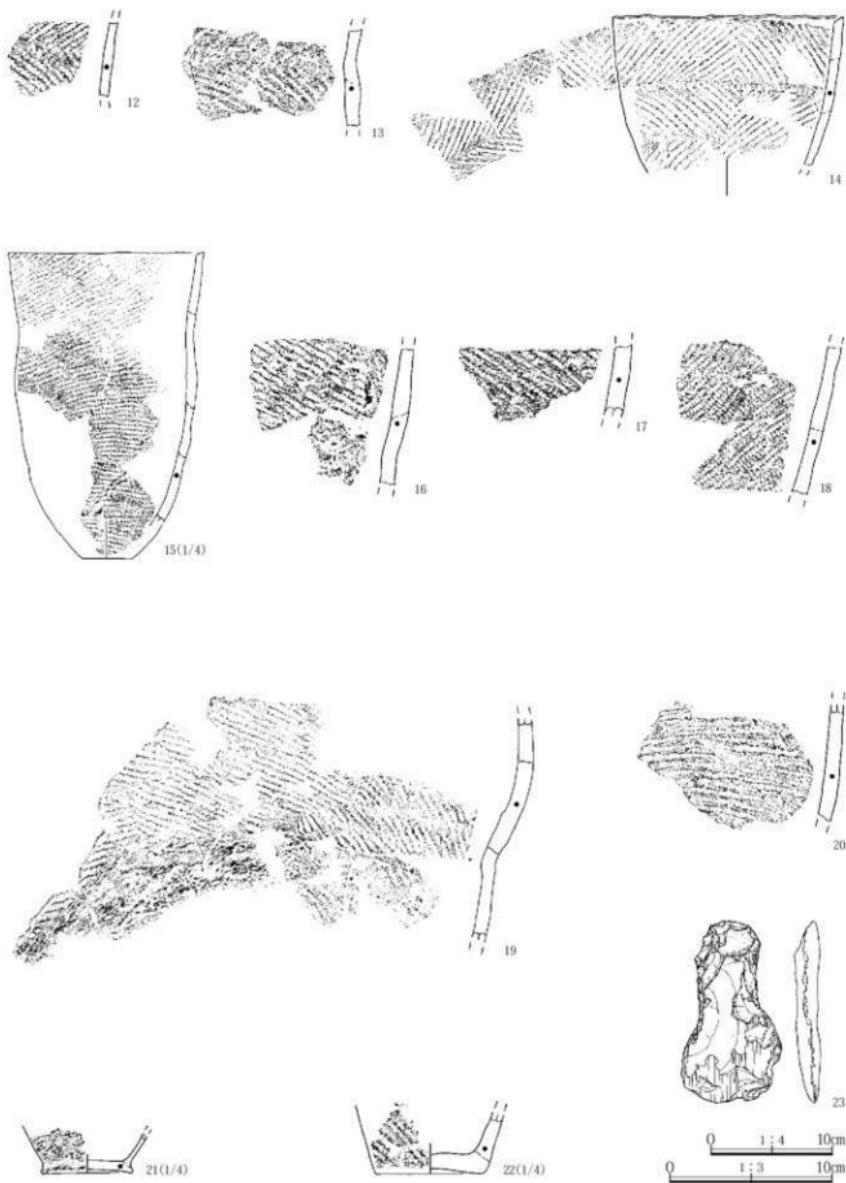
所見: 炉も顯著ではなく、柱穴の配置も確定性に乏しい竪穴建物である。しかしながら、出土遺物は豊富で時期差も少ないため一括性は極めて高いものと考えられる。時期は出土土器から縄文時代前期中葉以降としたい。



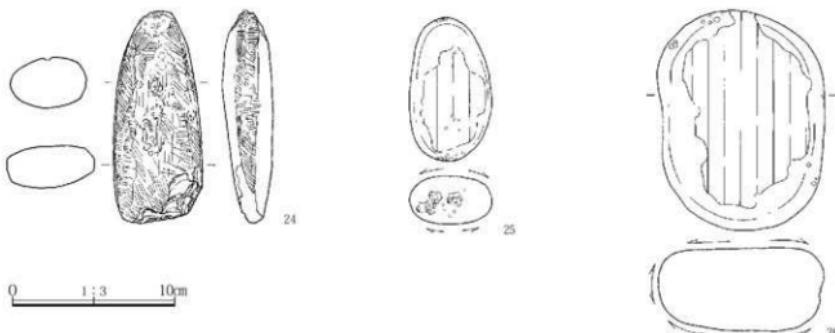
第11図 11号竪穴建物出土遺物(1)



第12図 11号竪穴建物出土遺物(2)



第13図 11号竪穴建物出土遺物(3)



第14図 11号竪穴建物出土遺物(4)

12号竪穴建物(第15図 PL. 5・21)

位置: 調査区東側の東斜面地形の中、8号竪穴建物と重複した位置にある。座標位置はX=295~300-Y=-480~-485である。周辺は南東への傾斜が強く、30cm程の比高差を見るが、8号竪穴建物を挟んで15・16坑が近接するように、縄文時代前期遺構が集中する箇所である。

経過: 黒褐色土中で検出された。8号竪穴建物調査中に、西壁にかかり本竪穴建物の存在が予想されたため、平面形の確認を試みた。その結果、8号竪穴建物西に円形の平面形と少量ながら縄文土器の出土が把握されたため、縄文時代の竪穴建物として調査を進めた。

規模: 8号竪穴建物との重複のため全容の把握は果たせないが径約4mの不整円形を推定平面形としたい。深さは約80cmを測るが、これは北西壁上の値と最も低い床面値との差である。壁の掘り込みは良好でローム層を掘り込む。

重複: 古代の竪穴建物である8号竪穴建物に東側を大きく切られる。また同時期の15・16坑が東に近接しており、本竪穴建物との関連性が想定される。

床面: 顯著な硬化面などは確認されなかったが、軟質ローム層の地床を構築する。中央部分が僅かに凹むが、大きな凹凸もなく水平な平坦面を築く。

施設: 炉跡、柱穴、土坑などの検出は果たせなかった。

遺物: 墓土中より少量の出土遺物を見る。8点を図示した。土器は有尾式や黒浜式で、2が西壁際床面から、4が床面中央埋土下位より出土する。5は壙之内1式で混

入と判断できる。石器では凹石(6)が北東隅の壁際より、磨石(7)・石片面(8)が床面中央埋土上位より出土する。おそらく流入による所産と思われるが、短時間の流入と判断したい。

所見: 古代の竪穴建物に切られるため判然としないが、近接する15坑や16坑との関連が注意されよう。おそらく北側の調査区域外等の周辺に同時期の遺構が分布すると思われる。出土遺物は少なく、一括性はやや低いと考えられるが、竪穴建物の時期としては出土土器から縄文前期中葉以降に比定したい。

2 土坑

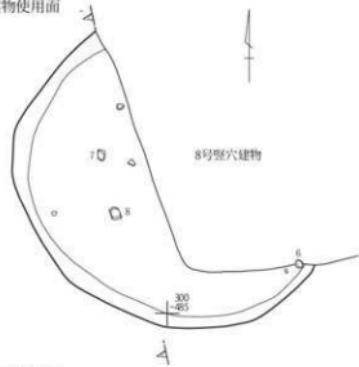
2基の土坑を調査した。前期中葉期の所産で竪穴建物の帰属時期に沿う在り方である。

15・16号土坑(第16図 PL. 5・21・22)

位置: 調査区東側で8号竪穴建物と重複して調査された。周辺は東側への緩傾斜地形が広がり、8号竪穴建物の他、3号竪穴建物が近接し古代の竪穴建物の遺構密度も高い地点である。おそらく、集落の東側縁辺に相当すると思われる。座標位置はX=300-Y=-480である。

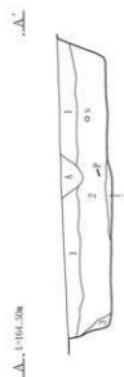
経過: 8号竪穴建物調査中より、カマド周辺の色調から別種の竪穴建物や土坑の存在が想定され、8号竪穴建物調査後に着手された。平面形の確認は黒褐色土で埋土との色調差は少ないため平面形や壁などの検出はやや手間取った。

12号竪穴建物使用面

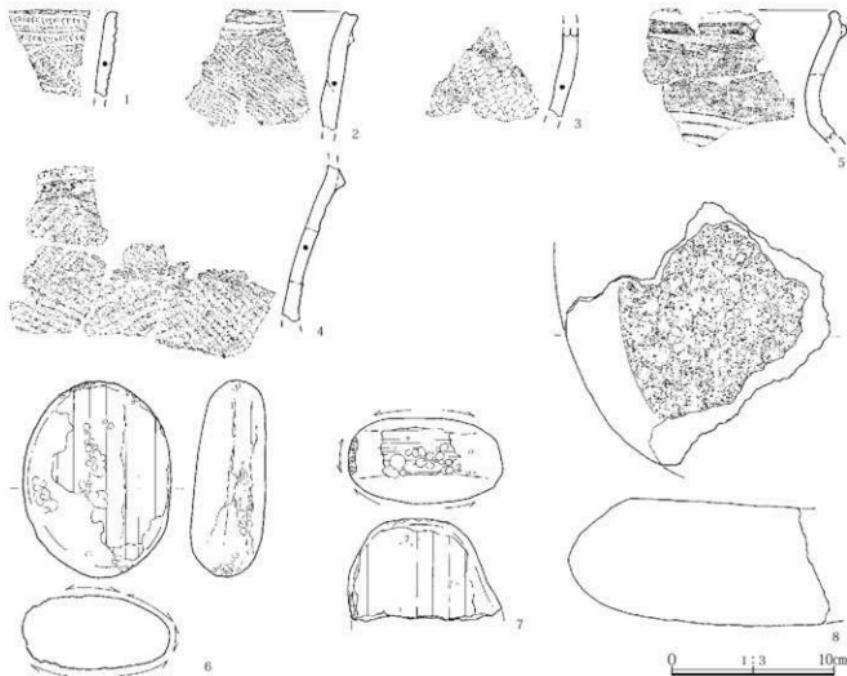


12号竪穴建物上層

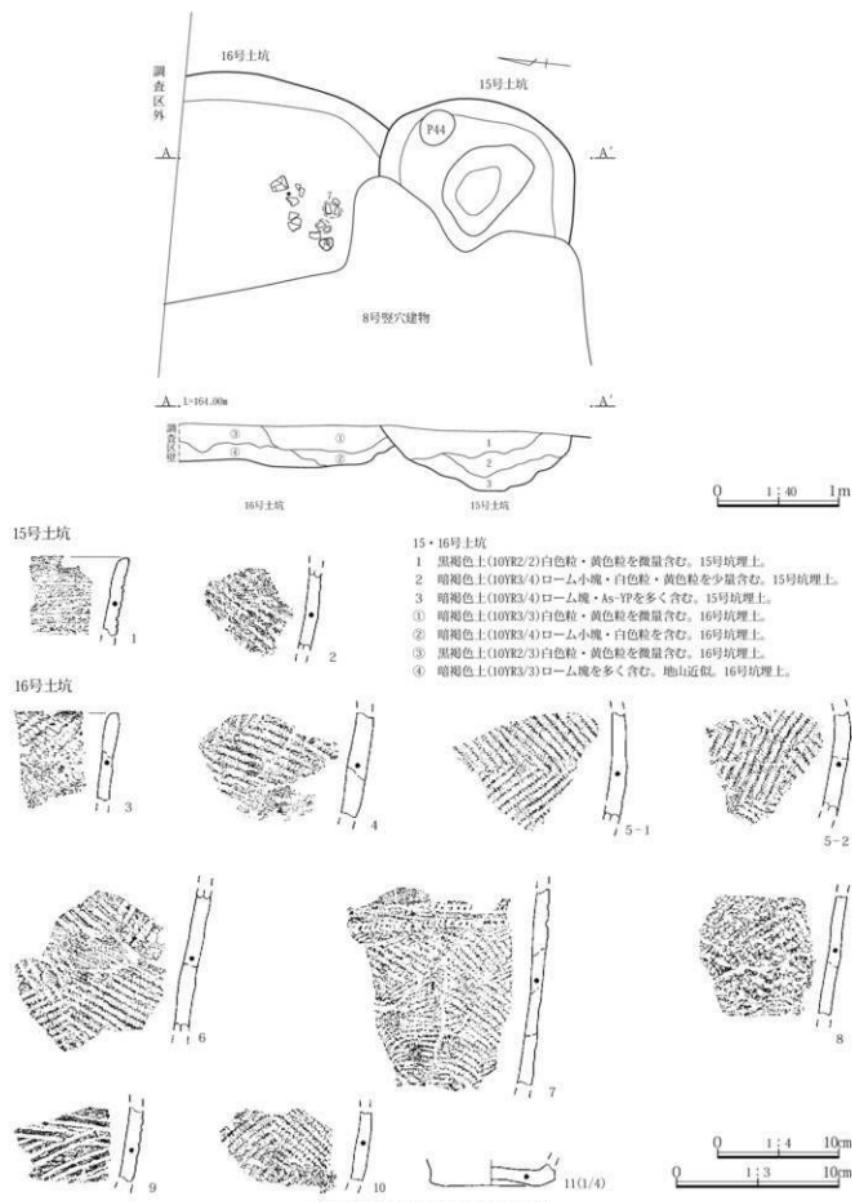
- A 黒褐色土(10YR2/2)白色粒・黄色粒を微量含む。粘性・しまりやや弱い。別遺構埋上。
- 1 黒褐色土(10YR2/2)白色粒・黄色粒を少量含む。粘性・しまりやや強い。
- 2 黒褐色土(10YR3/3)白色粒・黄色粒・黄色輕石を含む。ローム小塊を少量含む。粘性・しまりやや強い。
- 3 暗褐色土(10YR3/3)白色粒・黄色粒・ローム塊・褐色土塊を含む。粘性・しまりやや強い。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)白色粒・黄色粒を少量。ローム塊を含む。粘性やや強く、しまりは強い。



0 1:60 2m



第15図 12号竪穴建物及び出土遺物



第16図 15・16号土坑及び出土遺物

(15号土坑)

規模：8号竪穴建物カマド南で切られた状態で検出された不整円形土坑である。推定径約1.6m、深さ約50cmのやや大型の土坑で底面は不連続で鍋底状の断面形を示す。

重複：16号土坑との重複部分に8号竪穴建物カマドが重なるため、僅かな箇所で重複関係を判断した。本土坑が16号土坑を切る新旧である。

遺物：埋土中より数点の縄文土器片が出土した。2点を図示した。いずれも黒浜式であろう。

所見：不整円形を呈し、断面形も不連続な印象を受ける土坑である。形状から有機的な所産と考えられないが、重複する16号土坑や8号竪穴建物西にある12号竪穴建物との関連も想定されよう。時期は出土土器から縄文前期中葉以降である。

(16号土坑)

規模：8号竪穴建物カマド北に位置し、土坑北側を調査区域外に延ばす状態で調査された。東壁の様相から平面形はやや大型の不整円形が予想されるが、詳細な平面形態や規模は不明である。深さは約30cmを測る。

重複：8号竪穴建物と15号土坑に切られる。

遺物：埋土上層に土器片が集中する。個体の出土ではな

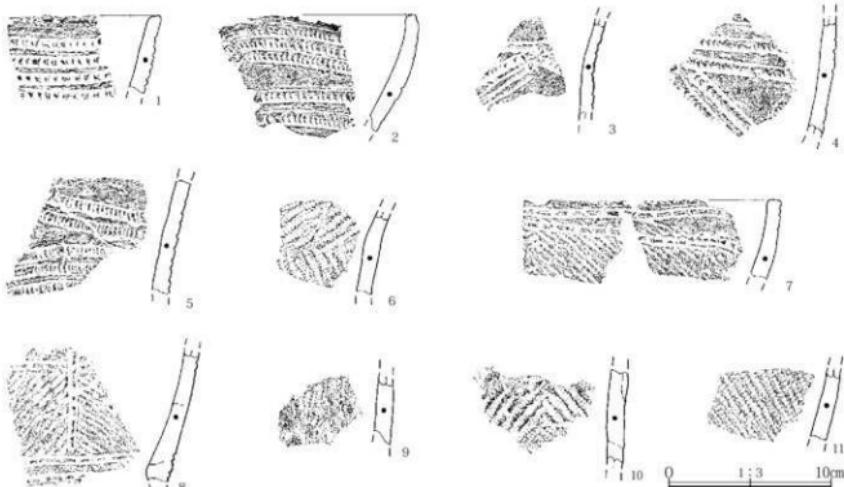
いが一箇所に集中することから一括廃棄の所産と考えた。黒浜式や有尾式を主体とする。

所見：15号土坑に比して坑底面が比較的平坦であり、出土遺物もまとまるところから、有機的な性格が想定されよう。12号竪穴建物や15号土坑との関係性も念頭に置きたい。時期は出土土器から縄文前期中葉以降である。

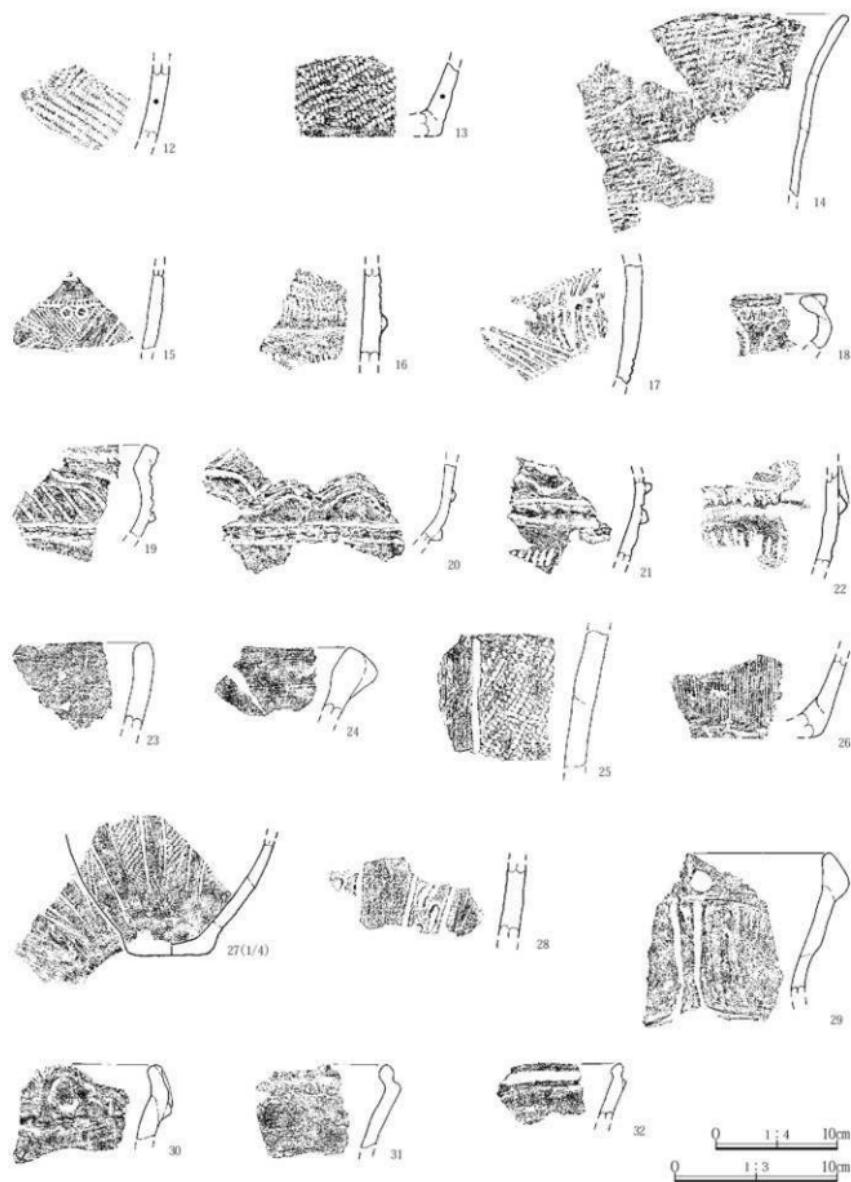
3 遺構外出土遺物

縄文時代の遺構外出土遺物の多くは、縄文時代遺構と重複する古代の遺構から出土した例や遺構確認時の出土、さらに包含層の出土である。出土遺物の極端な集中は見られず、低地部にかけての捨て場遺構などは見られなかった。

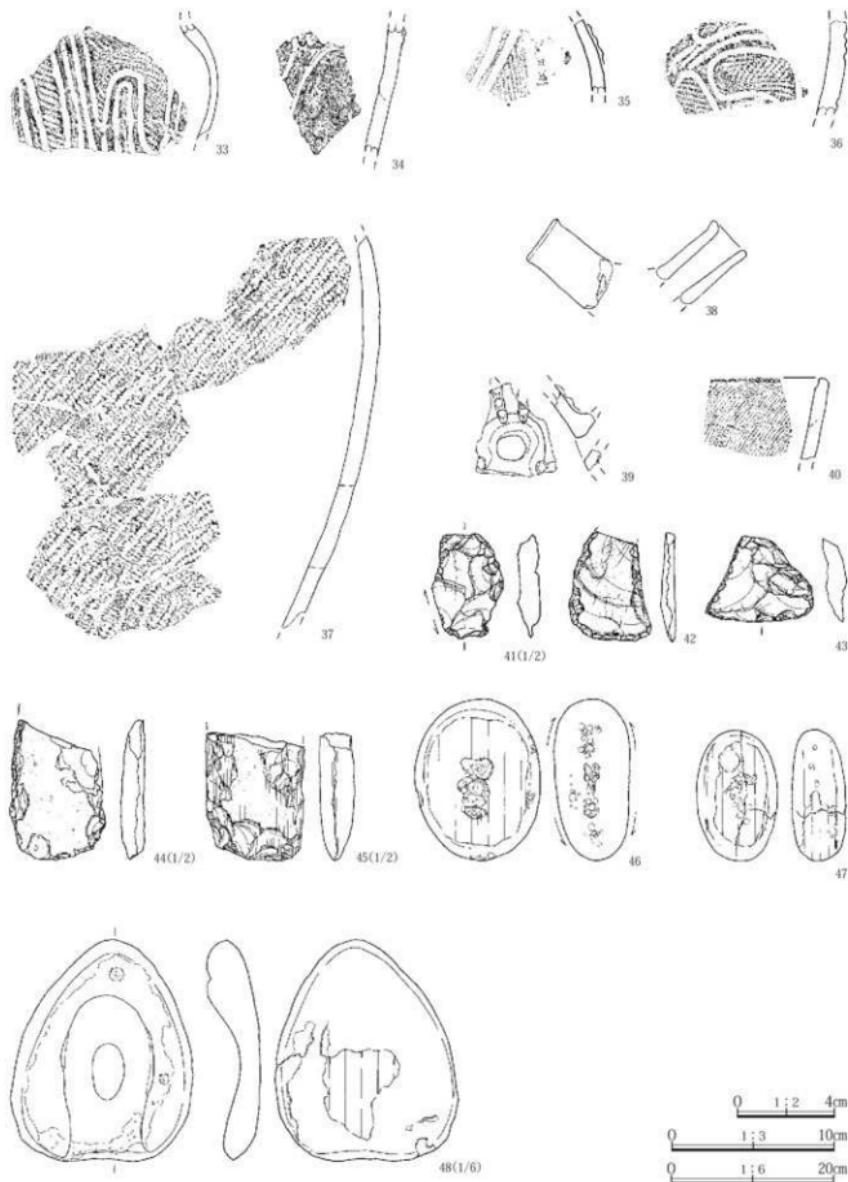
検出された遺構の主たる時期は、前期中葉段階に比定されるように遺構外出土遺物も、黒浜式や有尾式が圧倒的に多かった(1～13)。次に4号竪穴建物にみる阿玉台1b式土器が少なからず出土している。特筆すべきは堀之内1式の出土が目立った(29～39)。後期の遺構は未検出だが、おそらく調査区域外に該期遺構の存在が予想されよう。石器も前期～中期に特徴的なスクレイバーや打製石斧、礫石器類が出土している。表土出土であるが、完形の石皿が出土している。



第17図 遺構外出土遺物(縄文)(1)



第18図 遺構外出土遺物(縄文)(2)



第19図 遺構外出土遺物(縄文)(3)

第3節 古墳時代～古代の遺構と遺物

1 竪穴建物

竪穴建物は8棟が調査された。調査区西側に6棟、東側に2棟が検出された。縄文時代の竪穴建物配置と類似しており、調査区北を頂部とした台地縁辺に竪穴建物が分布するものと考えられよう。集落の範囲は調査区外に延長するものと予想される。

1号竪穴建物(第20図 PL. 6・24)

位置：前節で述べた縄文時代竪穴建物である4号・7号竪穴建物と重複して検出された。周辺は南への傾斜が顕著な箇所で、調査区内で標高の最も低い地点である。竪穴建物南側に調査区外に延長する。座標位置はX=290～295-Y=-525である。

経過：黒褐色土中で確認された。遺構埋土は黒味が強く軟質のため、平面形や壁の検出は比較的容易だった。

規模：おそらく整った方形を平面形とする。規模は輪長約2.1mで小型である。深さは65cmを測り、壁は直立気味でしっかりした掘り込みを示す。

重複：縄文時代に比定される4・7号竪穴建物と重なるが本竪穴建物が上層で最も新しい新旧関係を示す。

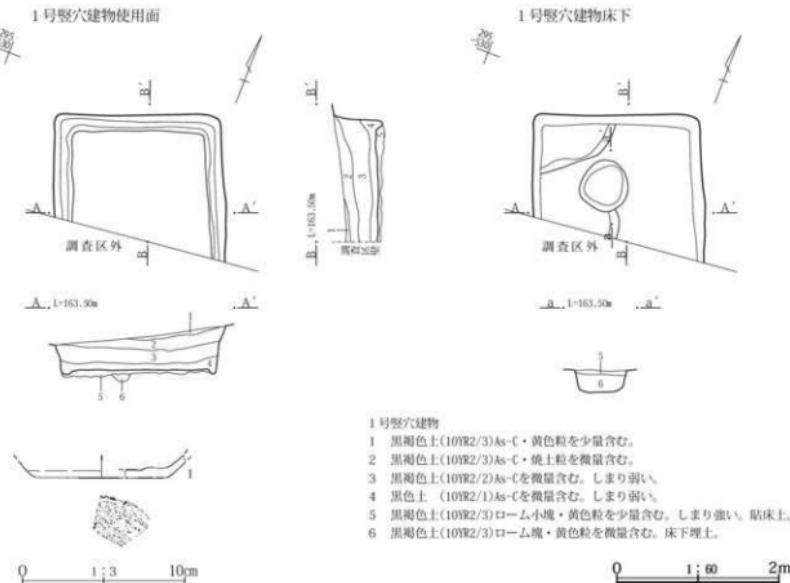
床面：顕著な硬化面などは確認されなかったが、ローム漸移層の地床と判断できた。大きな凹凸もなく水平な平坦面が広がる。

施設：壁周溝及び床下土坑1基を検出した。壁周溝は壁下に沿って幅20～25cm、深さ5～9cmでほぼ全周する様相を示す。床下土坑は不整円形を呈し、規模は径約60cm深さ約35cmを測る。

カマド：未検出である。おそらく調査区外であろう。

遺物：出土遺物は極めて貧弱である。須恵器杯底部片1点図示できた。

所見：整った方形を呈する小型竪穴建物である。カマドが調査区外に存在すると推定されるため、詳細は不明であるが、出土遺物から8世紀前半に時期を求みたい。



第20図 1号竪穴建物及び出土遺物

第2章 発見された遺構と遺物

2号竪穴建物(第21・22図 PL. 6・24)

位置: 調査区中央南壁際で大半を調査区域外に延ばして検出された。南への緩傾斜地形にあるが、周辺は比較的遺構密度が低い。座標位置はX=290-Y=-500~-505である。

経過: ローム上面で検出した。埋土との色調差は明瞭で平面形や壁の把握は容易だった。しかしながら、北壁の一部のみの調査に止まったため、全容の把握にまでは至っていない。

規模: 軸長約4.5mの方形を推定平面形とする。深さは約76cmを測るよう深く、床面は硬質ロームにまで達しており、しっかりした掘り込みで壁の立ち上がりも直立する。

重複: 単独の検出となった。近接する竪穴建物は西北西6mに5号竪穴建物があるが時期差がある。

床面: にぶい黄褐色土を貼床土とする。凹凸を見るがほぼ平坦面を築く。

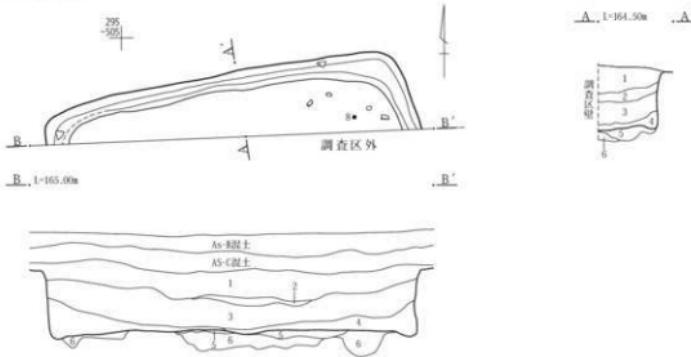
施設: 壁周溝が北壁から東西へ延びる様相を示す。幅18~25cm、深さ3~10cmを測る。床下土坑は2基を見るが、調査区域外に延びるため全容は判然としない。中央の床下土坑が大型で軸長約1.8m、深さ約20cm、東壁際の床下土坑は短軸長0.6m、深さ約30cmを測る。

カマド: 未検出である。おそらく調査区域外であろう。

遺物: 北東隅及び北西隅より土器を出土する。7点を図示した。また、北東隅からは鉄製品や鐵滓の出土を見る。暗文土師器(2)が埋土より出土するが8世紀代に求められ、おそらく混入であろう。

所見: カマドも未検出で様相は判然としないが、深く、残存度の良好な竪穴建物である。時期は出土土器から9世紀第3四半期であろう。

2号竪穴建物使用面



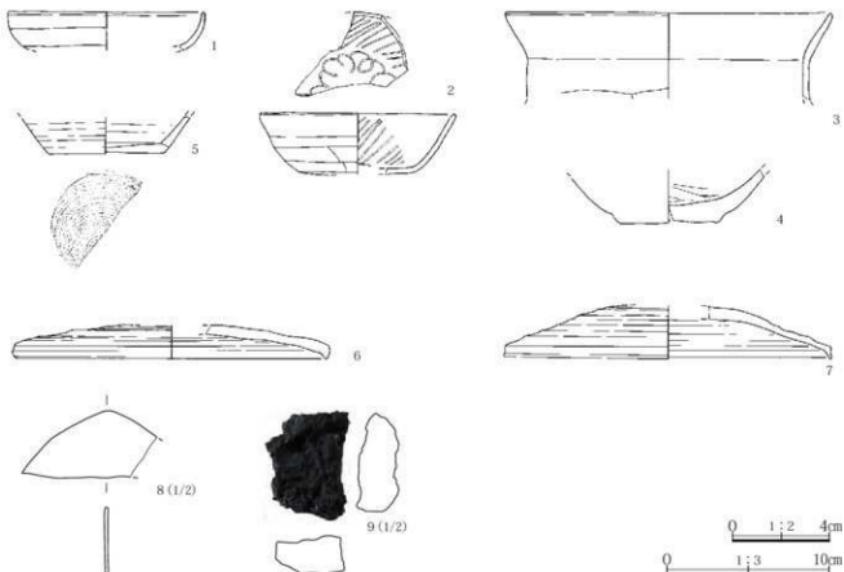
2号竪穴建物床下



2号竪穴建物

- 1 黒褐色土(10YR2/3)As-C 黄色粒・ローム粒を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。
- 2 黒褐色土(10YR2/3)As-C 黄色粒を微量含む。ローム小塊・ローム粒を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。
- 3 黑褐色土(10YR2/2)As-C 黄色粒を微量含む。粘性・しまりやや弱い。
- 4 黑褐色土(10YR2/2)As-C を極微量含む。粘性やや弱く、しまり弱い。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR4/3)ローム小塊・As-YPを多量に含む。上面に燒土粒を見る。粘性・しまりやや強い。貼床土。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/4)ローム小塊・As-YPを多量に含む。粘性・しまりやや強い。床下埋土。

第21図 2号竪穴建物



第22図 2号竖穴建物出土遺物

3号竖穴建物(第23・24図 PL. 7・25)

位置：調査区東端で調査された。東半を調査区域外に延ばすため、全容は把握できない。周辺は東側への緩斜面地形が広がり、西側に8号竖穴建物が接する地点である。おそらく調査区域外に集落は広がりを見せるものと推定されよう。座標位置はX=295～300-Y=-475である。

経過：ローム漸移層上位の暗褐色土で平面形が確認できた。埋土の黒褐色土との色調差は明瞭で平面形や壁の検出は比較的容易だった。

規模：方形を平面形とする。東西軸長は不明で、南北軸長は約5m、深さは約60cmを測る。床面はロームまで達しており、壁の立ち上がりはやや開き気味を呈す。

重複：竖穴建物としては単独の検出である。南壁にP29、北壁にP32が重なるが新旧は不明である。壁柱穴の可能性もある。

床面：ローム塊混じりの暗褐色土を基調とした貼り床である。僅かな凹凸を見るがほぼ平坦面を築く。硬化面は中央部を中心に広く認められた。

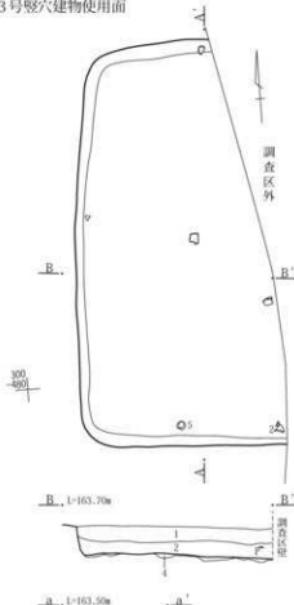
施設：床下調査で壁周溝、ピット1基、床下土坑2基を確認した。壁周溝は掘方と同化したので規模などは不明だが、西壁際と北壁の一部に設けられる。ピットは南壁際で開く。不整楕円形を呈し、平面規模は約40×30cmで深さは約40cmを測る。柱穴として規模は良好だが、対応するピットも見られず、柱穴配置としては不適当である。床下土坑1はやや北西寄り、床下土坑2は南西側に設けられる。いずれも径約1mの大型不整円形土坑で深さも60cmを超える。床下土坑2からは土師器壺(2)、須恵器壺口頭部破片(10)が出土している。

カマド：未検出である。おそらく調査区域外であろう。

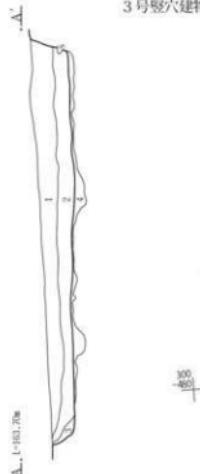
遺物：10点を図示した。南壁際の床直から、土師器壺口縁部破片(2)、須恵器杯底部破片(5)が出土している。その他は埋土出土である。

所見：比較的良好な遺存だがカマドが未検出のため、詳細は不明である。軸長5mのやや大型の方形竖穴建物で、床下土坑を設ける。時期は出土遺物から9世紀第3・4半世紀であろう。

3号竪穴建物使用面

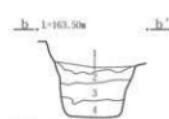


3号竪穴建物床下



3号竪穴建物

- 1 黒褐色土(10YR2/2) As-C・ローム塊を微量含む。粘性・しまりやや弱い。
- 2 黒褐色土(10YR2/1)微量のAs-C、少量のローム塊を含む。粘性・しまりやや弱い。
- 3 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒を微量含む。粘性・しまりやや弱い。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・As-YPを多く含む。粘性やや強く、しまり強い。粘土上。



3号竪穴建物 1号床下土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム塊を一部層状に多く含む。粘性・しまりやや弱い。
- 2 に示す黄褐色土(10YR5/4)ローム塊・As-YPを多く含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。
- 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・As-YPを多く含む。粘性・しまりやや弱い。

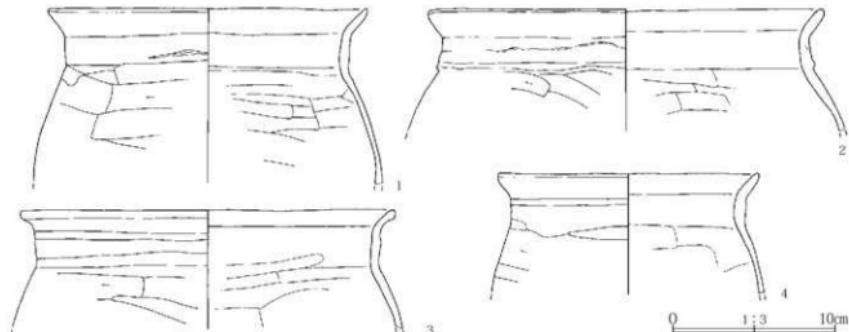
3号竪穴建物 2号床下土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)As-YP塊を多く含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム塊・As-YPを含む。粘性・しまりやや弱い。
- 3 黑褐色土(10YR2/3)多量のAs-YP、少量のローム塊を含む。粘性・しまりやや弱い。
- 4 黑褐色土(10YR2/3)ローム小塊・As-YPを少量含む。粘性・しまりやや弱い。

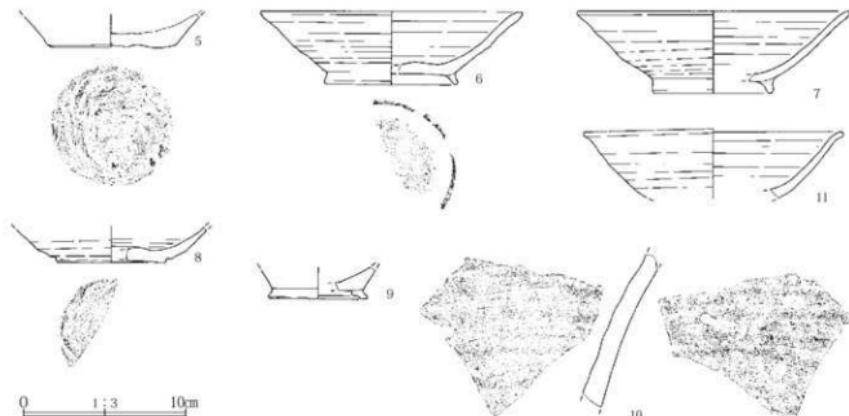
3号竪穴建物 1号ピット

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム小塊・ローム粒を含む。粘性や弱く、しまり弱い。

0 1:60 2m



第23図 3号竪穴建物及び出土遺物(1)



第24図 3号竪穴建物出土遺物(2)

5号竪穴建物(第25～27図 PL. 7・8・25・26)

位置：調査区中央のやや西寄りに位置する。西側竪穴建物群の東端にあたる。周辺は南側への緩傾斜地形が広がりほぼ平坦地形が保たれる地点である。西側にかけて竪穴建物が群在し、本竪穴建物には6号竪穴建物が北側で重なる。座標位置はX=295-Y=-505~-510である。

経過：平面形はローム漸移層で確認した。埋土は黒褐色土を基調とするため、平面形や壁の検出は容易だった。また北側で重複する6号竪穴建物に関しては、土層による把握を果たし、本竪穴建物が切られる新旧を得ている。

規模：竪穴建物主軸方位を北東に向けた正方形を平面形とする。平面規模は約3.2×3.1mで深さは約50cmである。床面はローム下層まで達し、壁は直立気味に良好に聞く。重複：6号竪穴建物と北壁で重複する。新旧は前述のように6号竪穴建物が本竪穴建物を切る。その他ではP30・P31が西壁際に重なり、P25・P26が南壁上に接する位置にある。2基のピットは竪穴建物壁走向に沿っており、あるいは本竪穴建物に伴う可能性もある。

床面：ローム塊を多く含む暗褐色土を基調とした貼り床である。周辺地形に影響されずほぼ平坦面を築き、硬化面も全面に広がる。

施設：カマドを南東隅に設ける。壁周溝が東壁と北壁際の一部に認められる。小規模な壁周溝である。土坑が東壁際にあるが、調査では竪穴内施設ではなく別個の土坑

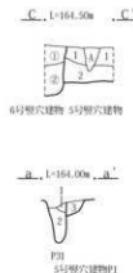
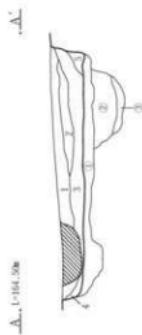
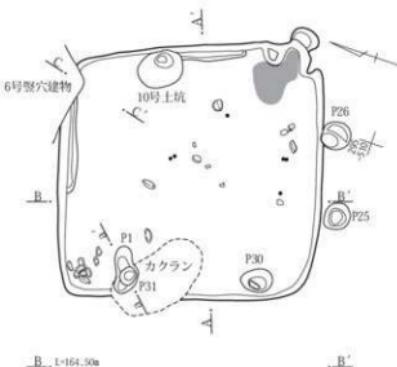
としている。同様に前述のP30・P31、P25・P26も本竪穴建物の帰属から外されているが、これらは検討を要する。床下調査ではP1～P3が得られている。うちP2とP3の2基とも柱穴として、その規模は良好である。P2が深さ約128cm、P3が深さ約96cmと1m前後のしっかりした深さを呈する。配置的には不適当な印象だが前述のP30・P31を考慮すると、柱穴としての妥当性が高まるだろう。その他では床下土坑が床面中央から東側にかけて連続する。

カマド：東南隅に主軸を東南東に向けて設けられる。平面規模は約75×20cmで小型の部類である。深さは約41cmを測る。煙道部分が有段でピット状になる。袖は小型だが黄褐色粘質土を構成材としていた。焼土の堆積も顕著で燃焼部から床面にかけて広く分布していた。カマド内の出土遺物は見られなかった。

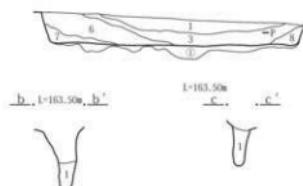
遺物：完形土器の出土は無く、多くが埋土より破片状態で出土した。土師器杯が多く模倣杯が目立つ。甕(7)や異形の鉢(6)も伴出している。その他では白玉(8・9)が埋土中より、菰網石(10～14)が北東隅でまとまる。

所見：古墳時代後期の竪穴建物である。東南隅にカマドを設ける特徴を有する。出土遺物は模倣杯や特殊な土師器鉢、白玉、菰網石など豊富な組成を示す。時期は出土土器から6世紀後半としたい。

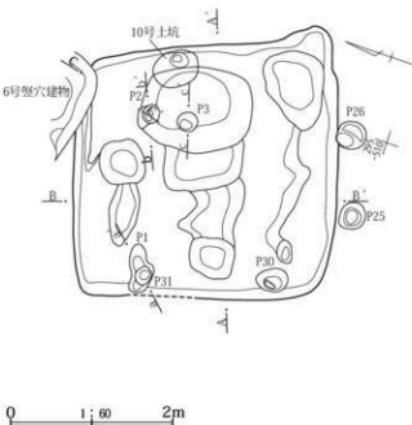
5号竪穴建物使用面



- 5号竪穴建物 1号ビット
- 黒褐色土(10YR2/2) 多量の黄褐色粒、少量のローム塊を含む。
 - 黒褐色土(10YR2/2) 多量のAs-YP、少量のローム塊を含む。
 - 黒褐色土(10YR2/2) 多量の黄褐色粒・ローム塊を含む。

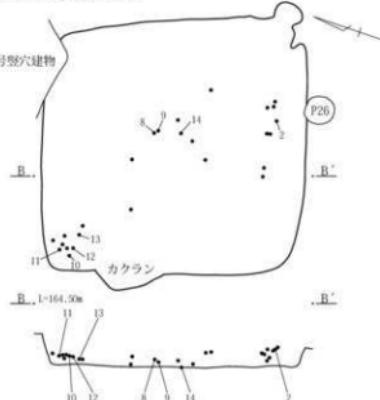


5号竪穴建物床下



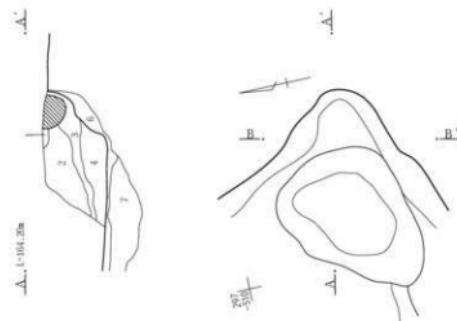
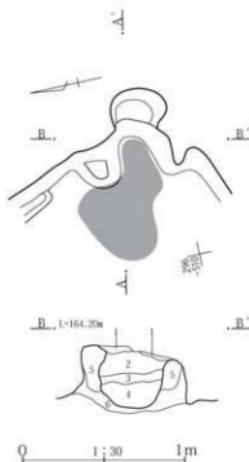
- 5号竪穴建物
- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒、黄褐色粒・炭化物粒を少量含む。しまり・粘性やや強い。
 - 黒褐色土(10YR2/1) 少量の黄褐色粒、微量の焼土粒・炭化物粒を含む。しまり・粘性やや強い。
 - 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム塊・黄褐色粒、微量の炭化物粒を含む。しまり・粘性やや強い。
 - 暗褐色土(10YR3/3) ローム塊・黄褐色粒を微量含む。しまり・粘性やや強い。
 - 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色粒を微量含む。しまり・粘性やや強い。
 - 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム塊・微量の炭化物粒を含む。しまり・粘性やや強い。
 - 黒褐色土(10YR2/2) ローム塊・黄褐色粒・炭化物粒を少量含む。しまり・粘性やや強い。
 - 暗褐色土(10YR3/3) ローム塊・黄褐色粒を微量含む。しまり・粘性やや強い。
 - 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム塊・少量の白色粒・As-YPを含む。しまり・粘性強い。
 - 暗褐色土(10YR3/3) 多量のAs-YP、少量のローム塊を含む。しまり・粘性弱い。
 - 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム塊・As-YPを含む。しまり・粘性弱い。
- A 木の根の発達。

5号竪穴建物遺物分布



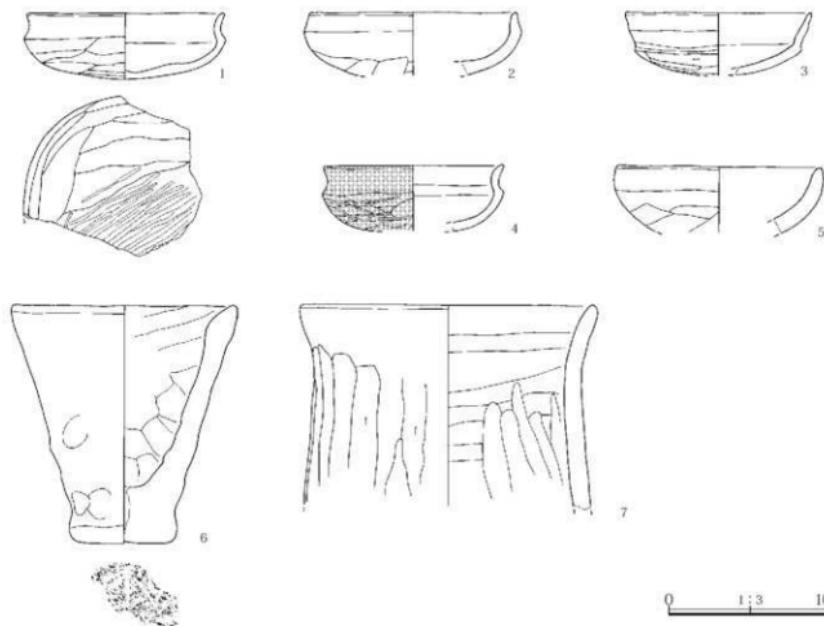
第25図 5号竪穴建物(1)

5号竪穴建物カマド使用面

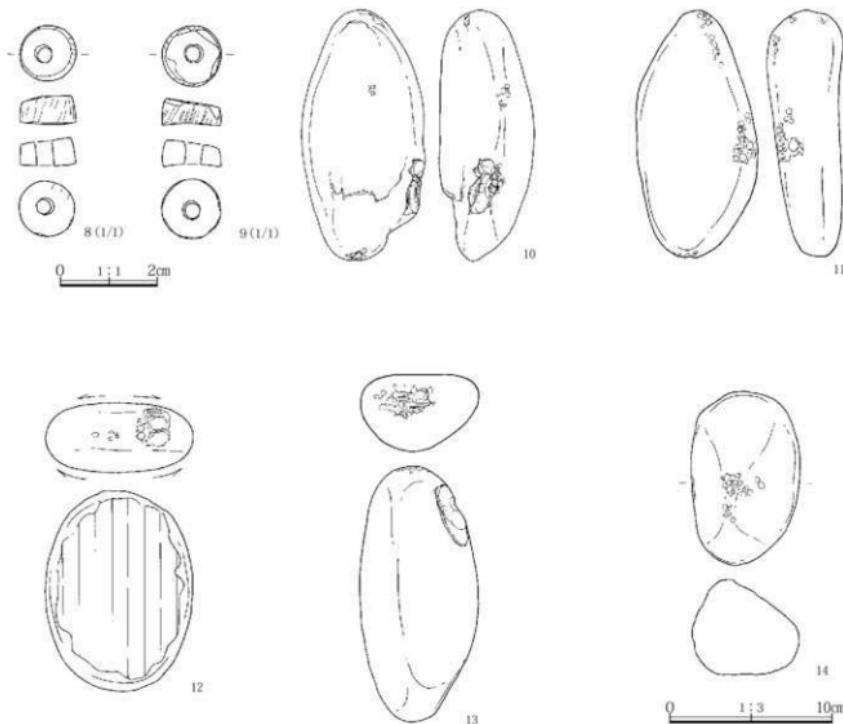


5号竪穴建物カマド

- 1 黒褐色土(10YR2/2)少量のローム粒、微量の炭化物含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム大塊含む。炭化物微量含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム粒、少量の焼土粒・炭化物含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2)多量の焼土粒、ローム大塊、少量のローム粒含む。
- 5 黄褐色土(10YR5/6)しまり、粘性強い。As-Ypを少量含む。
- 6 黒褐色土(10YR3/2)多量の焼土粒・炭化物、少量のローム粒を含む。
- 7 黑褐色土(10YR2/2)多量のローム塊を含む。



第26図 5号竪穴建物(2)及び出土遺物(1)



第27図 5号竪穴建物出土遺物(2)

6号竪穴建物(第28～31図 PL. 9・10・27・28)

位置：調査区中央北西寄りに5号竪穴建物と重複して調査された。西側竪穴建物群の東端にあたる。周辺は南へ

の緩傾斜地形が広がり、北東に台地頂部を望む地点である。座標位置はX=295～300-Y=-505～-510である。

経過：ローム漸移層下位で遺構確認を果たした。埋土は黒褐色土のため明瞭な色調差を示す。平面形、壁の検出は容易だった。南側で重複する5号竪穴建物との新旧も土層で確認した。

規模：主軸を南東に設けた整った正方形を平面形とする。平面規模は4.0×3.9mで深さは90cmを測る。北西隅を調査区域外に延ばすがほぼ全容が把握され、深く壁の立ち上がりもしっかりしており遺存度も良好である。

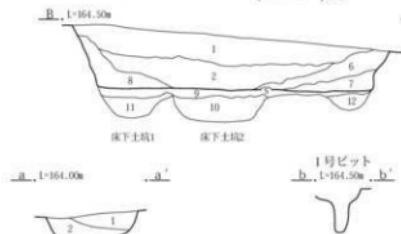
重複：5号竪穴建物と南東隅が重なる。土層の観察では本竪穴建物が新しい。他には9号竪穴建物が西約4mに近接する。

床面：床面は硬質ローム層下位まで達す。ローム塊を含む灰黄褐色土を基調とした貼り床をなす。周辺地形の影響もなくほぼ平坦面を築く。硬化面は全面に広がるが床面中央部とカマド西側に顕著だった。

施設：カマドは東壁南寄りに設けられる。貯蔵穴はカマド南にあり、径約60cmの不整円形を呈し、深さ20cmを測る。カマド南袖の下層より検出されており、カマド使用時には埋没していた可能性もある。

ピットは北壁に係るP1・P2が確認された。深さも良好で配置からも柱穴として位置付けられよう。同様に

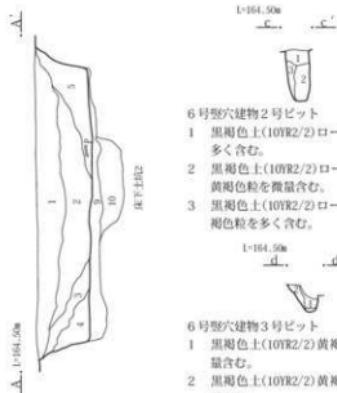
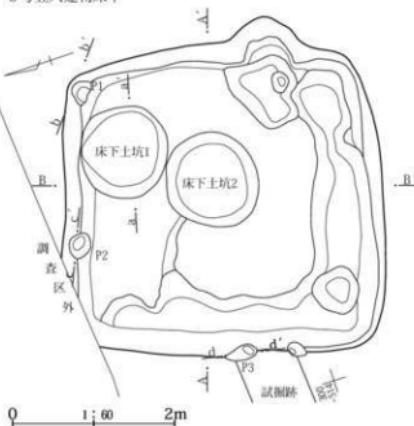
6号竪穴建物使用面



6号竪穴建物 1号床下土坑

- 1 咳褐色土(10YR3/3)ローム塊・As-Ypを少量、鉄土粒を微量含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊・As-Ypを少量含む。

6号竪穴建物床下



6号竪穴建物 2号ビット

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム小塊を多く含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム塊・黄褐色色粒を微量含む。
- 3 黒褐色土(10YR2/2)ローム塊・黄褐色色粒を多く含む。

I-164.50m



6号竪穴建物 3号ビット

- 1 黒褐色土(10YR2/2)黄褐色色粒を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)黄褐色色粒を少量化する。

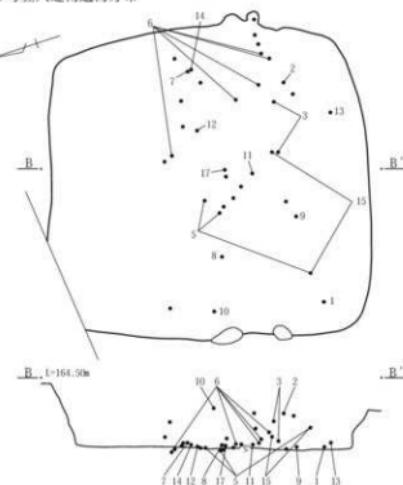
I-164.50m



6号竪穴建物

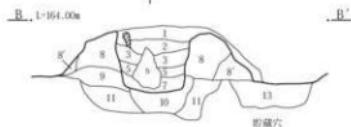
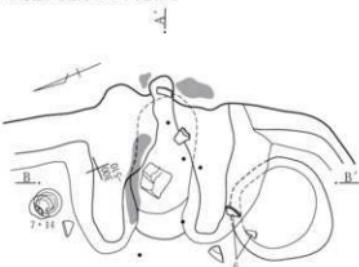
- 1 黒褐色土(10YR2/2)多量の白色粒、少量の黄褐色色粒・炭化物を含む。
- 2 黒色土(10YR2/1)ローム塊・黄褐色色粒・炭化物を少量化する。
- 3 黑褐色土(10YR2/3)As-Ypを少量化する。
- 4 黑褐色土(10YR2/1)As-Ypを少量、ローム塊を微量含む。
- 5 黑褐色土(10YR2/3)ローム塊・黄褐色色粒を少量化する。
- 6 黑褐色土(10YR2/3)As-Ypを少量化する。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2)As-Ypを多く含む。
- 8 黑褐色土(10YR2/3)ローム塊・As-Ypを微量含む。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のAs-Yp、少量のローム塊を含む。
- 10 に付い黄褐色土(10YR5/4)ローム塊・As-Ypを少量化する。
- 11 に付い黄褐色土(10YR5/4)ローム塊・As-Ypを少量化する。
- 12 に付い黄褐色土(10YR5/4)多量のローム塊、少量のAs-Ypを含む。

6号竪穴建物遺物分布

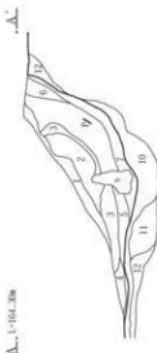
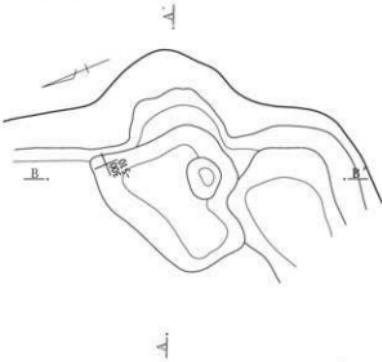


第28図 6号竪穴建物(1)

6号竪穴建物カマド使用面



6号竪穴建物カマド掘方



6号竪穴建物カマド

- 1 黄褐色土(10YR4/2) As-Ypを少量、黄褐色土上塊・炭化物を微量含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/6) As-Ypを少量、焼土粒を微量含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/6) 多量の焼土粒、微量の炭化物を含む。
- 4 黑褐色土(10YR2/3) ローム塊・As-Ypを多く、焼土粒を少量含む。
- 5 褐灰色土(7.5YR4/1) 焼土粒を多く、黄褐色土を少量含む。粘性弱い。
- 6 灰黒褐色土(10YR4/2) 黑褐色土粒・As-Ypを少量、ローム塊を微量含む。
- 7 灰褐色土(7.5YR5/2) 多量の焼土粒、少量の黄褐色土粒・白粉を含む。
- 8 黄褐色土(10YR5/6) 内縫が焼土化。少量の白色粒を含む。
- 9 黄褐色土(10YR5/6) As-Ypを少量、炭化物を微量含む。
- 10 褐灰色土(10YR4/2) ローム塊・As-Ypを少量含む。
- 11 黑褐色土(10YR2/2) ローム塊・As-Ypを少量含む。
- 12 灰黒褐色土(10YR4/2) 黄褐色土粒を少量、炭化物を微量含む。粘性弱い。
- 13 黄褐色土(10YR2/2) 多量のAs-Yp、少量のローム塊を含む。

0 1:30 1m

第29図 6号竪穴建物(2)

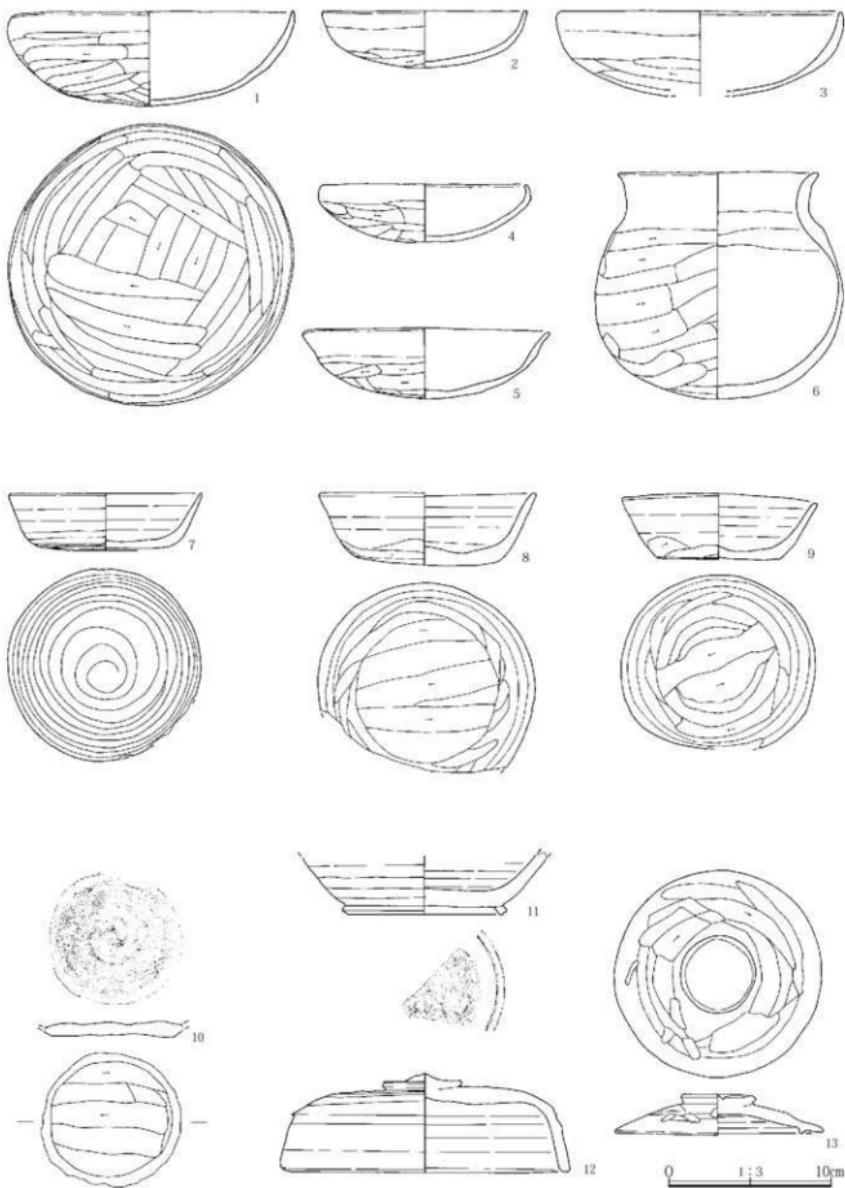
P 3が西壁上で検出されており、若干浅いが50cm南に開く小ビットと対をなすものと捉えられる。配置から柱穴として捉えたい。

床下調査では床下土坑が2基検出されている。いずれも径1m以上の大型不整円形を呈し、深さは約30cmを測る。また掘方として床面南側から西側にかけて浅い溝状の凹みを得ている。竪穴建物外縁を確定する掘方施設としたい。

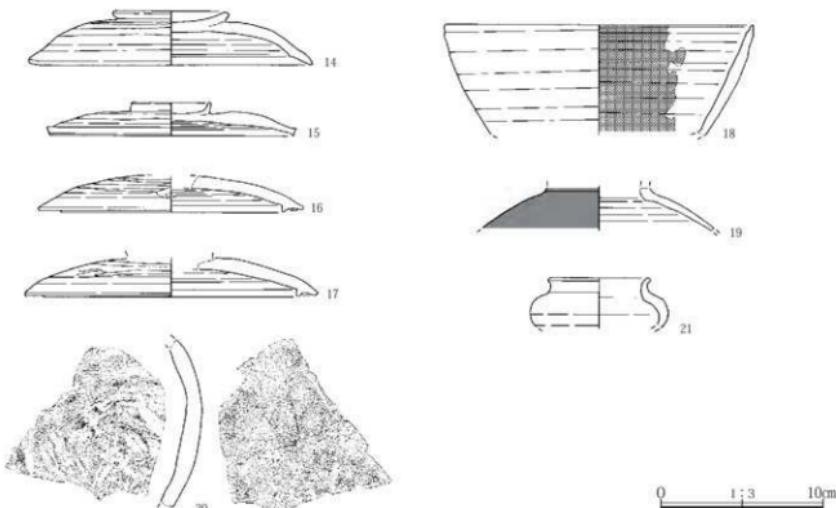
カマド：東壁南寄りに主軸を東南東に向けて設けられ

る。燃焼部の平面規模は約73×21cmで、深さは約40cmを測る。煙道は壁外に僅かに突出し、両袖とも幅広でローム塊を主体にして、燃焼部にかけてオーバーハング気味に検出された。燃焼部中央や北寄りに大型の角礫が置かれていた。支脚である。カマド内出土遺物としては壺(6)が使用面から破片状態で出土している。また、土師器杯(2・3)が上層ながらカマド南西部、須恵器杯(7)と杯蓋(14)がカマド北からセットで出土している。

遺物：出土遺物は豊富である。出土土器21点を図示した。



第30図 6号竖穴建物出土遺物(1)



第31図 6号竪穴建物出土遺物(2)

須恵器杯蓋の出土が目立つ(12～17)。土師器杯も併せて床直～床直上からの出土が多く、供膳具を中心とした一括廃棄として位置付けたい。また、大型亜角礫と角礫が床面中央南寄りの床直で出土しているが、性格は不明である。

所見：遺存度の良好な整った形状の竪穴建物である。貯蔵穴及び柱穴も特定でき、カマド内も支脚が残存しており良好な状態で調査が果たせた。出土遺物も須恵器杯蓋、土師器杯など供膳具を中心にまとまった量が出土した。時期は土師器杯と須恵器に時間差が見られるが、須恵器杯・蓋から8世紀前半に求めておきたい。

8号竪穴建物(第32・33図 PL.11・28)

位置：調査区東側で西に縄文前期に比定される12号竪穴建物と重複して調査された。東に15・16号土坑が重なるが、本竪穴建物が切る。周辺は南東への傾斜が強く、30cm程の比高差を見る。座標位置はX=300-Y=-480~-485である。

経過：黒褐色土中で平面形を確認した。埋土も黒褐色土のため色調差は少ないが、埋土は黒味が強く軟質のため、観察を重ねて平面形や壁の検出に努めた。なお、竪穴建

物北側は調査区域外になるため未調査である。

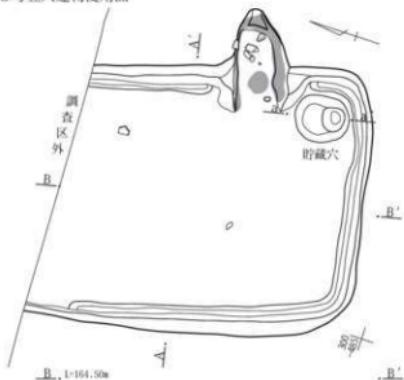
規模：東北東に竪穴建物主軸を設けた横長長方形の平面形を呈す。平面規模は主軸長約3.3mで南北長は3.8m以上である。深さは約40cmで壁の立ち上がりは下半がロームでしっかりとしていた。

重複：前述の縄文前期の12号竪穴建物や15・16号土坑と重複する。古代の竪穴建物としては3号竪穴建物が東約4mに近接する。

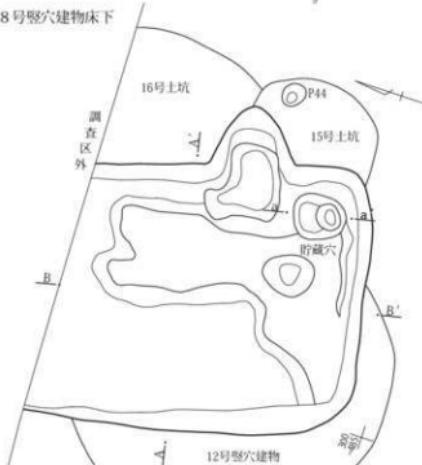
床面：ローム層まで掘り込み、ローム塊を含む暗褐色土を基調とする貼り床をなす。周辺地形の影響を受け僅かに南東に傾くが、全体的には平坦面が築かれる。硬化面は全面に広がるが中央部分に顕著だった。

施設：カマドは東壁や南寄りに設けられる。壁周溝が東壁から南壁、西壁の一部に認められた。西壁の北端で途切れるが延長は不明である。幅20cm前後で深さは3~6cmと浅い。柱穴に相当するピットは見られず、貯蔵穴がカマド南で確認できた。不整円形を平面形とし、径約70×55cm、深さ約40cmを測る。床下土坑も見られないが床下調査で中央部南寄りに小型の土坑を見る。不整円形で径約60×52cm、深さ約26cmを測る。掘方はカマド西から床面中央を残し周囲を広く凹ませていた。

8号竪穴建物使用面



8号竪穴建物床下



第32図 8号竪穴建物(1)

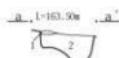
カマド：東壁やや南寄りに主軸方位を東北東に向けて設けられる。燃焼部の平面規模は約120×40cm、深さは50cmである。煙道が壁外へ130cm程突出し、両袖ともやや小型で黄褐色粘土を主体に構築されていた。

遺物：埋土中より200点あまりの出土遺物を見た。土器を4点、石器を1点図示した。カマドからの出土としては土師器底部(1)、石製研磨具(5)が挙げられる



8号竪穴建物

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム塊・As-C・As-YPを少量含む。
- 2 黒色土(10YR2/1)As-C・ローム粒を微量含む。
- 3 黒褐色土(10YR2/2)多量の褐色土塊、少量のローム小塊を含む。
- 4 黑褐色土(10YR2/1)褐色土小塊・ローム粒を微量含む。
- 5 黑褐色土(10YR2/3)ローム小塊を含む。
- 6 黑褐色土(10YR2/1)ローム小塊を微量含む。
- 7 黑褐色土(10YR2/2)きめ細かい。ローム粒・燒土粒を微量含む。
- 8 褐色土(10YR4/6)粘土上体。燒土粒・暗褐色土塊を少量含む。
- 9 黑褐色土(10YR2/2)ローム小塊を少量含む。
- 10 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を少量含む。
- 11 に赤い黃褐色土(10YR4/3)暗褐色土大塊を多く含む。

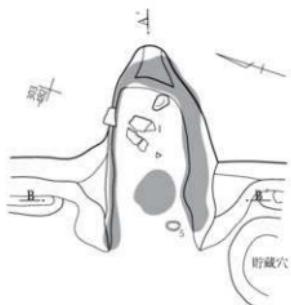


8号竪穴建物 貯藏穴

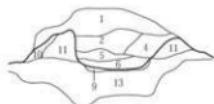
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)燒土粒・黃褐色粒を多く含む。黒褐色土塊を少量含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊・As-YPを多く含む。黒褐色土塊を少す量含む。

所見：東側の竪穴建物群に属する。北側を調査区域外に延ばすが、横長方形の平面形と推定される。カマドは東壁に設定され、貯藏穴を持たせる。壁周溝も設けられるが柱穴は無かった。カマド内より出土した土師器底部から8世紀後半代が想定されよう。

8号竪穴建物カマド使用面

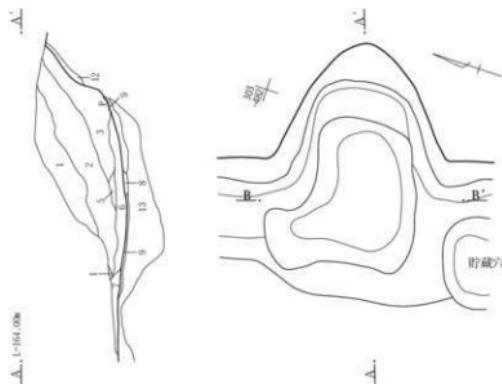


B. l=164.00m



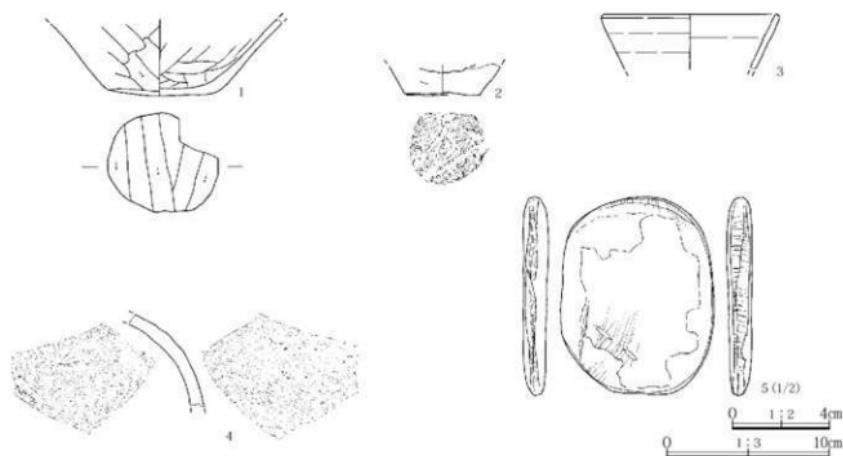
0 1:30 1m

8号竪穴建物カマド掘方



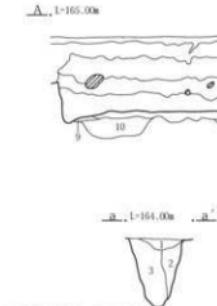
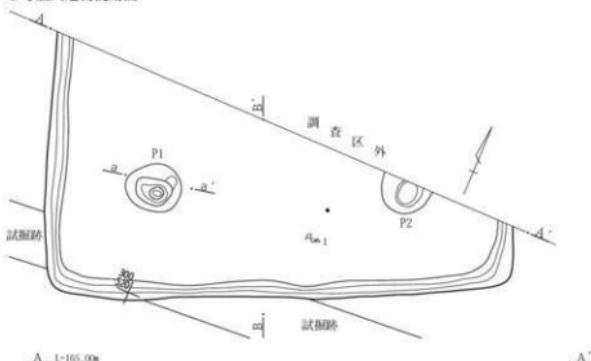
8号竪穴建物カマド

- 1 黒褐色土(10YR2/2)粘土塊、少量の燒土粒・ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/3)燒土塊を多く含む。粘土粒を含む。
- 3 黑褐色土(7.5YR4/4)粘土塊・燒土塊を少量含む。
- 4 黑褐色土(7.5YR4/4)粘土主体。暗褐色土塊・燒土塊を含む。
- 5 黑褐色土(7.5YR4/3)燒土塊を多く含む。
- 6 暗褐色土(10YR3/3)灰を多く含む。燒土粒を微量含む。
- 7 黑褐色土(7.5YR4/4)粘土主体。燒土粒を含む。
- 8 黑褐色土(7.5YR4/4)燒土層、粘性、しまり弱い。
- 9 黑褐色土(10YR2/3)多量の灰、少量の燒土粒・粘土粒を含む。
- 10 暗褐色土(10YR3/3)燒土粒・粘土粒を少量含む。
- 11 黑褐色土(10YR4/4)粘土主体。燒土粒を少量含む。
- 12 黑褐色土(10YR2/3)燒土粒を微量含む。
- 13 黑褐色土(10YR2/2)ローム塊を含む。



第33図 8号竪穴建物(2)及び出土遺物

9号竪穴建物使用面

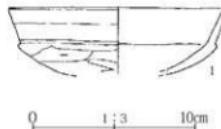
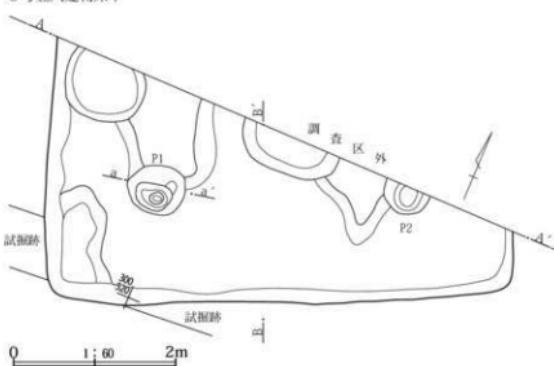


- 9号竪穴建物 1号ピット
 1 黒褐色土(10YR3/2)少量の黄褐色土塊・As-YP、微量の炭化物を含む。
 2 灰黄褐色土(10YR4/2)多量の黒褐色土塊・As-YPを含む
 3 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のAs-YP、少量のローム塊を含む

9号竪穴建物

- 1 表上。
- 2 As-YP上層。
- 3 As-YP下層。
- 4 黒褐色土(10YR3/2)多量のローム塊、少量のAs-YPを含む。
- 5 黒褐色土(10YR3/2)少量のAs-YP、微量のローム塊を含む。
- 6 黑褐色土(10YR2/2)多量のローム塊、少量のAs-YPを含む。
- 7 黒褐色土(10YR2/2)少量のAs-YPを含む。
- 8 にぶい黄褐色土(10YR4/3)多量のAs-YP、少量のローム塊を含む。
- 9 にぶい黄褐色土(10YR4/3)少量のローム塊・As-YPを含む。
- 10 黒褐色土(10YR3/2)多量のAs-YP、少量のローム塊を含む。2号ピット埋土。
- 11 黒褐色土(10YR2/2)多量のAs-YP、微量の炭化物を含む。2号ピット埋土。

9号竪穴建物床下



第34図 9号竪穴建物及び出土遺物

9号竪穴建物(第34図 PL.11・28)

位置:調査区西側中央部で北側を調査区域外に延ばして検出された。南に縄文前期に比定される11号竪穴建物が重複する。座標位置はX=295～300-Y=-515～-520である。周辺は南西への緩斜面地形ではほぼ平坦面が広がる地点である。

経過:ローム漸移層で平面形を確認した。埋土は黒褐色土を主体とするため、平面形や壁の検出は比較的容易だった。

規模:北側を大きく調査区域外に延ばすため全容は把握できないが、おそらく長軸を北東に向かって、軸長約5.7mの大型方形を平面形とする。深さは約50cmを測り、壁の立ち上がりも垂直気味でしっかりした掘り込みを呈す。

重複:前述の縄文前期の11号竪穴建物を南側で切る。南西側に5号竪穴建物と6号竪穴建物が近接する。

床面:床面は軟質ローム面まで達す。ローム塊を含むにぶい黄褐色土を基調とした貼り床で、周辺地形の影響もなくほぼ平坦面を築く。硬化面は床面全面に見られるが中央部に顕著だった。

施設:カマドは未検出である。壁周溝と柱穴2基を検出できた。壁周溝は検出した壁際すべてで確認した。あるいは全周する様相を示す。幅約12～25cm、深さ約5～10cmを測る。柱穴としたP1、P2は南側壁に沿って、南壁からの距離は約1.0～1.1mで、規則性を窺わせるように配置される。P1・P2間の距離も約3.1mを測る。各ピットの径も64～69cm、深さも78～92cmで、配置、規模ともに柱穴として相応しい。おそらく、4本主柱穴の配置となると予想される。

床下土坑として調査検出された土坑は無かったが、床下平面図に土坑2基が記載されているため、これを床下土坑とする。西側壁際の土坑を床下土坑1、床面中央の土坑を床下土坑2とする。床下土坑1は径約1mの不整円形を呈し深さは約30cmを測る。床下土坑2の平面形軸長1.3m程の梢円形を推定した。深さは約32cmである。

遺物:出土遺物は少量で土師器1点を図示した。南壁際の床直より出土している。

所見:竪穴建物北半やカマドが調査区域外にあるため、詳細は不明である。残存度も良く大型で整った平面形状の竪穴建物である。時期は出土土器1点で確定性に乏し

いが、6世紀後半に求めておきたい。5号竪穴建物と近接した時期である。

10号竪穴建物(第35～37図 PL.12・28)

位置:西側の竪穴建物群の西端にあたる。南西への傾斜地形がやや強い地点で、傾斜角度は約6.5°を測る。座標位置はX=295～300-Y=-525～-530である。

経過:黒褐色土中での平面形確認である。埋土との色調差は少ないが、カマド構築材の遺存が良く、東壁に突出した状態で検出されたため、黒褐色土中であるが竪穴建物の存在が容易に判断され、慎重な調査の結果、平面形や壁の検出が果たせた。

規模:主軸を北東東に設けた横長長方形を平面形とする。平面規模は、約3.8×3.0mでやや小型である。深さは約85cmを測る。しっかりした掘り込みで直立気味に開く壁である。

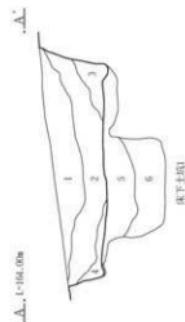
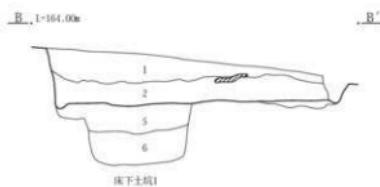
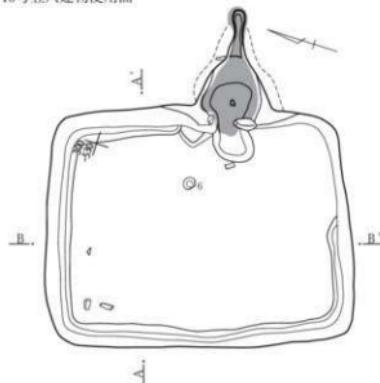
重複:単独の検出である。縄文前期の7号竪穴建物が南約75cmに接する。古代に比定される1号竪穴建物は約3m南東に近接する。

床面:硬質ローム上面にまで達する。ローム塊を多量に含む黒褐色土を貼り床構成土とする。周辺地形の影響もなく、ほぼ平坦面が築かれる。硬化面は床面ほぼ全面に認められた。

施設:カマドが東壁のやや南寄りに設けられる。貯蔵穴や柱穴は見られず、壁周溝が検出された。壁周溝は南東隅を除いて他の壁下に設けられる。幅約20～30cm、深さ約3～9cmを測る。床下土坑は4基を調査した。床下土坑1・2が北西側、床下土坑3が南西隅、床下土坑4が南東隅に設けられる。各床下土坑とも、軸長1mを超え、特に床下土坑1～3は70cm以上の深さで掘り込みがしっかりしていた。また床下土坑4の深さは約30cmだが、位置的には貯蔵穴に相応する箇所である。

カマド:竪穴建物主軸とほぼ一致して北東東に向か東壁やや南寄りに設ける。燃焼部の平面規模は約130×50cm、深さ70cmを測る。燃焼部～煙道が約120cmと大きく突出しており、反面両袖の突出は燃焼部内に収まる。両袖から梢円状の円錐が出土しているが、おそらく袖の心材と判断した。また袖及び燃焼部内縁はローム塊主体の黄褐色土を構築材として充てていた。竪穴建物本体の規模に比して大型のカマドである。

10号竪穴建物使用面



10号竪穴建物

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム塊が多く、黄褐色粒・炭化物・焼土粒を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム塊・黄褐色粒・炭化物を少量含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/2)ローム塊を微量。黄褐色粒を少量含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2)ローム塊を少量。黄褐色土塊を微量含む。
- 5 黒褐色土(10YR3/2)黒褐色土塊・As-YPを多く含む。
- 6 黒褐色土(10YR3/2)ローム塊を少量。As-YPを多く含む。

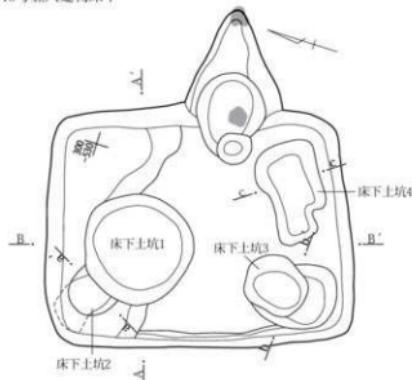
—B—, l=163.50m —B'—



10号竪穴建物 2号床下土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2) As-YPを多く、ローム塊を少量含む。

10号竪穴建物床下



—B—, l=163.50m —B'—



10号竪穴建物 3号床下土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒・As-YPを少量、ローム塊を微量含む。
- 2 にぶい 黃褐色土(10YR5/4) ローム塊・As-YPを少量含む。

—C—, l=163.50m —C'—



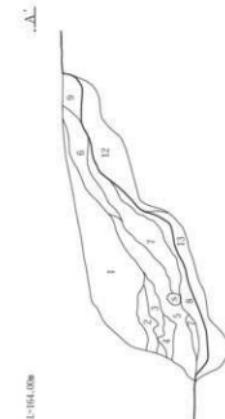
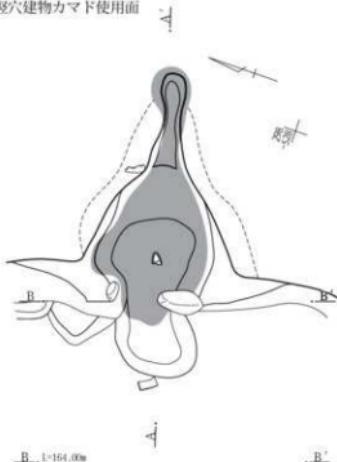
10号竪穴建物 4号床下土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) ローム塊・As-YPを少量含む。

0 1:60 2m

第35図 10号竪穴建物(1)

10号竪穴建物カマド使用面

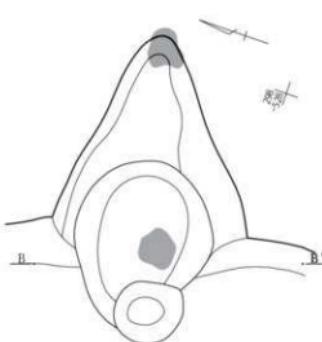


10号竪穴建物カマド掘方



10号竪穴建物カマド

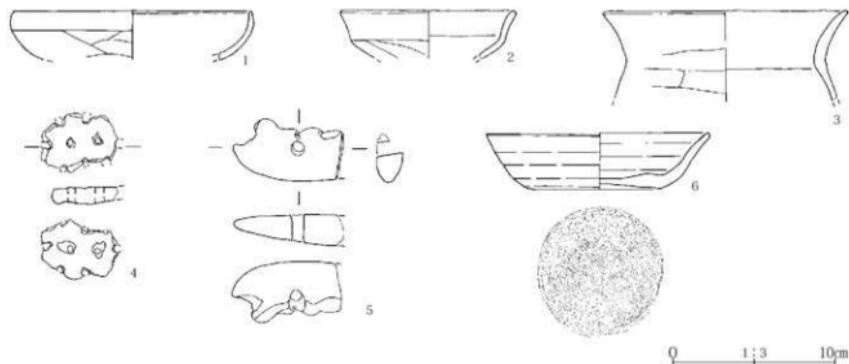
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)黄褐色土塊を多く、燒上粒を微量含む。
- 2 黄褐色土(10YR6/8)As-YPを微量含む。粘性・しまり強い。
- 3 黒褐色土(10YR2/2)ローム塊・黄褐色粒を少量、燒上粒を微量含む。
- 4 黄褐色土(10YR6/8)As-YPを微量含む。粘性・しまり強い。
- 5 黑褐色土(10YR2/2)ローム塊・黄褐色粒を少量、燒上粒を微量含む。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2)黄褐色土小塊を多く、炭化物を少量含む。
- 7 黄褐色土(10YR6/8)As-YPを微量含む。下層に焼上化を見る。
- 8 黑褐色土(10YR2/2)燒上層。灰を多く含む。粘性・しまり弱い。
- 9 灰褐色土(SYR4/2)As-YPを少量、炭化物を微量含む。
- 10 黄褐色土(10YR6/8)燒上粒。微量の白色粒を含む。
- 11 黄褐色土(10YR5/6)ローム塊を主体とする。粘性・しまり強い。
- 12 黑褐色土(10YR2/2)燒上粒・黄褐色粒を少量含む。
- 13 黑褐色土(10YR2/2)灰層。青灰色の灰・黄褐色粒を多く、炭化物を少量含む。



第36図 10号竪穴建物(2)

遺物：竪穴建物本体、カマドとも良好な遺存状態ながら、出土遺物として6点を図示した。土師器杯(1・2)は埋土中の出土である。甕(3)は床下土坑3理土から出土した。また須恵器杯(6)はカマド北西の埋土中層より出土している。特筆すべきは、瓶底部に装着した可能性のある多孔円盤(4・5)が破片状態ながら埋土より出土している。

所見：本遺跡で最も遺存状態の良好な竪穴建物である。しかしながら、柱穴や貯蔵穴も無く、細片を主としており竪穴建物の時期特定にも苦慮する。ここでは、埋土より出土した須恵器杯を参考に8世紀の第4四半期を充てたい。また、多孔円盤は周辺遺跡でも例が少なく、類例資料の一助となるだろう。



第37図 10号竪穴建物出土遺物

2 土坑・溝

本遺跡では15基の土坑と溝1条を調査した。このうち、縄文時代前期に比定される15・16号土坑は前節で述べた。

ここでは、それ以外の土坑と溝を古墳時代以降の所産として報告したい。本遺跡の土坑に関しては、貯蔵穴、墓壙、転用墓壙などの性格が想定されるが、遺物の出土も主体的ではなく特定まで至る例は無かった。土坑の分布も竪穴建物と同調するように、西側と東側に偏る傾向が見られた。

土坑全てを対象として説明を加えるが、掘り込みが浅く不整形な平面形を呈する有機的ではない土坑に関しては説明を簡略化する。巻末の計測表などを参考にしていただきたい。なお、12号土坑は欠番である。

1号土坑(第38図 PL.13)

位置：調査区南西部で検出した。1・4・7号竪穴建物の東に近接する。座標位置はX=295-Y=-520である。
経過：ローム漸移層で確認された。埋土が暗褐色土と黒褐色土のため、色調差は明瞭だった。埋土にはAs-Cを含む。

規模：径約56cmの円形を平面形とし、深さは約30cmを測る。鍋底状の断面形である。

重複・遺物：単独の検出で出土遺物は無い。

所見：小型の土坑である。整った円形だがやや浅い。時期・性格は不明だが、埋土にAs-Cを含むことから古墳時

代以降の所産と判断した。

2号土坑(第38図 PL.13)

位置：調査区南西部で検出された。1号土坑の南東に近接する。座標位置はX=290～295-Y=-520である。

経過：ローム漸移層で確認された。黒褐色を呈する埋土との色調差は明瞭だった。埋土にはAs-Cを含む。

規模：径約67cmの円形を呈し、深さは15cmと浅く皿状の断面形を示す。

重複・遺物：単独の検出で、出土遺物も見られなかった。

所見：小型の円形土坑だが、極めて浅い。時期・性格は不明だが、埋土にAs-Cを含むことから古墳時代以降の所産と判断した。

3号土坑(第38図 PL.13)

位置：調査区西側中央部の11号竪穴建物南西に近接する。座標位置はX=295-Y=-515である。

経過：ローム漸移層で確認された。埋土は黒褐色のため、色調差は明瞭だった。埋土にはAs-Cを含む。

規模：平面形は不整円形で径約80×75cm、深さは約35cmを測る。断面形は鍋底状である。

重複・遺物：重複遺構は無いが、周辺にはピットが群在する。出土遺物は見られなかった。

所見：小型の不整円形土坑でやや浅い。時期・性格は不明だが、埋土にAs-Cを含むことから古墳時代以降の所産と判断した。

第2章 発見された遺構と遺物

4号土坑(第38図 PL.13)

位置：調査区南西部の1・4・7号竪穴建物東に近接する。座標位置はX=290-Y=-520~-525である。

経過：ローム漸移層で調査された。黒褐色土の埋土との色調差は明瞭だった。比較的均質な埋土である。

規模：径約50cmの小型円形を平面形とする。深さは約30cmで鍋底状の断面形を示す。

重複：単独の検出である。

遺物：埋土中より土器類等部破片が出土したが、図化には至らなかった。

所見：ピット状の土坑である。浅く柱穴ではない。出土遺物も主体的な状態ではなく、埋土に特徴も無いことから、時期・性格は特定できない。

5号土坑(第38図 PL.13)

位置：調査区南東部に位置する。1号溝と重複して調査された。座標位置はX=295-Y=-480である。

経過：ローム漸移層下位で確認された。黒褐色土の埋土との色調差は明瞭だった。1号溝、18号ピットと同時に調査した。

規模：平面形は楕円形か。短軸長約80cm、深さは約25cmを測る。浅く皿状の断面形である。

重複：土層の観察では1号溝に切られる新旧関係である。おそらく18号ピットとの新旧は不明である。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：1号溝に切られる浅い土坑である。埋土の特徴も乏しく、時期・性格は特定できない。

6号土坑(第38図 PL.13)

位置：調査区西側中央部の11号竪穴建物南に近接する。座標位置はX=295-Y=-515である。

経過：ローム漸移層で確認された。埋土は黒褐色を呈し、色調差は明瞭だった。

規模：径約40cmの小型不整円形を平面形とする。深さは約22cmを測る。鍋底状の断面形を示す。

重複・遺物：単独の検出で、出土遺物も見られなかった。

所見：ピット状の土坑であるが浅く柱穴ではない。出土遺物は無く埋土に特徴も無いことから、時期・性格は特定できない。

7号土坑(第38図 PL.13)

位置：調査区東側中央部で8号竪穴建物、12号竪穴建物の南に近接する。南には5号土坑、1号溝がある。座標位置はX=295-Y=-480である。

経過：ローム漸移層下位で確認された。埋土の色調は黒褐色のため明瞭に確認できた。

規模：不整楕円形を平面形とする。規模は約140×80cmで深さは約90cmを測る。底面は硬質ローム上面にまで達していたが中央部が凹み、壁も共に不連続な印象が強い。壁下半は直立し、上半は強く開く断面形である。

重複・遺物：単独の検出で出土遺物も無い。

所見：形状から陥穴状土坑が想定できるが、底面形状や埋土の様相から性格は不明としたい。時期も詳細は不明だが、埋土にAs-Cを含むことから、古墳時代以降の所産と考えたい。

8号土坑(第38図 PL.13)

位置：調査区西側中央部の11号竪穴建物南に近接する。座標位置はX=295-Y=-515である。

経過：ローム漸移層で確認された。黒褐色土の埋土との色調差は明瞭だった。重複・近接するP22・P23と同時に調査した。

規模：不整楕円形を呈す平面形で規模は約62×40cm、深さは約75cmを測る。断面形はピット状である。

重複：南側にP22が重なる。新旧は不明である。またP23が北西に近接することから、本土坑も周辺ピットと同様と考えている。

遺物：出土遺物は見られなかった。

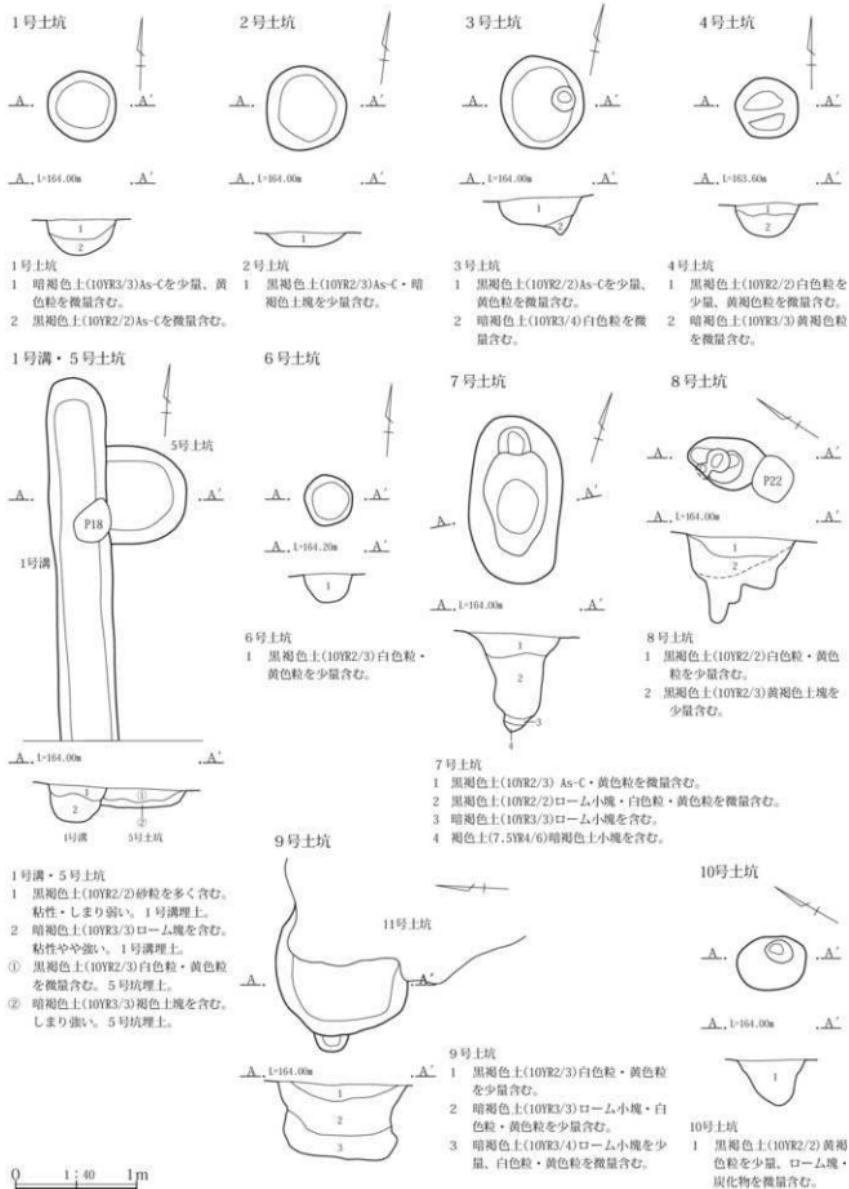
所見：小規模なピット状の土坑である。柱穴としての確証は得られないが、南に柱穴と思われるP2・P3が近接する要素から、関係性は考慮したい。時期は埋土の特徴も無いため不明である。

9号土坑(第38図 PL.14)

位置：調査区南東で11号土坑と重複して検出された。座標位置はX=295-Y=-485~-490である。

経過：ローム漸移層上位で調査された。埋土は黒褐色を呈するため色調差は明瞭だった。11号土坑と同時に調査された。

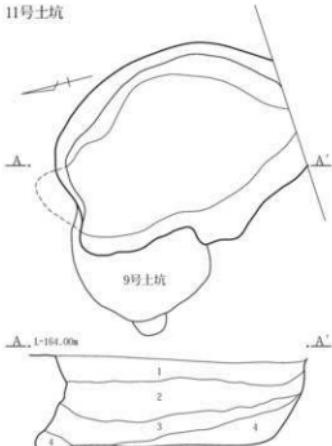
規模：東側を11号土坑が重なるため全容は判然としな



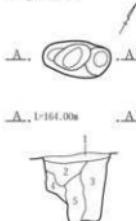
第38図 土坑(1)・溝

第2章 発見された遺構と遺物

11号土坑



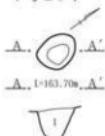
1号ピット



2号ピット

1 黒褐色土(10YR2/2)白色粒・黃色粒を少量含む。
2 黒褐色土(10YR2/3)白色粒・黃色粒を少量含む。
3 黑褐色土(10YR2/2)黃褐色粒を微量含む。しまり弱い。
4 にぶい 黃褐色土(10YR5/4)黃褐色粒・白色粒を微量含む。
5 黑褐色土(10YR2/3)黒褐色土塊・黃褐色粒を少量含む。

7号ピット

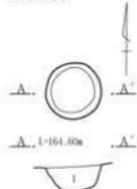


7号ピット

1 黑褐色土(10YR2/3)白色粒・黃色粒を少量含む。
2 黑褐色土(10YR2/2)黃褐色粒を微量含む。
3 にぶい 黄褐色土(10YR5/4)ローム塊を微量含む。

0 1:40 1m

13号土坑



13号土坑

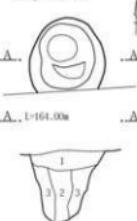
1 黑褐色土(10YR2/3)白色粒を多く、
統土粒・黃色粒を微量含む。

14号土坑



1 黑褐色土(10YR2/2)黄褐色土塊を
少量、黃褐色粒を微量含む。

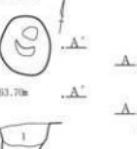
2号ピット



2号ピット

1 黑褐色土(10YR2/3)ローム塊・As-C・黃色粒を少量含む。
2 黑褐色土(10YR2/3)黃色粒を少量含む。しまり弱い。
3 黑褐色土(10YR2/3)ローム塊・As-Cを微量含む。

6号ピット



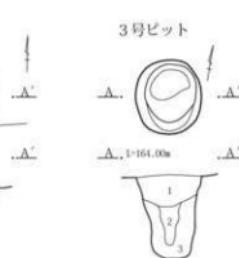
6号ピット

1 黑褐色土(10YR2/3)白色粒を
少量、黃褐色粒を微量含む。
2 黑褐色土(10YR2/2)黃褐色粒
を微量含む。
3 にぶい 黄褐色土(10YR5/4)
ローム塊を微量含む。

11号土坑

1 黑褐色土(10YR2/3)ローム粒・白色粒・黃色粒を少量含む。
2 噴褐色土(10YR3/3)ローム小塊・白色粒・黃色粒を含む。
3 噴褐色土(10YR3/3)白色粒・黃色粒を多く、ローム塊を少量含む。
4 噴褐色土(10YR3/3)ローム塊を多く含む。

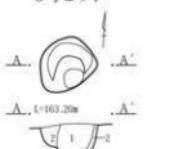
3号ピット



3号ピット

1 黑褐色土(10YR2/3)ローム塊・As-C・黃色粒を少量含む。
2 黑褐色土(10YR2/2)As-Cを微量含む。しまり弱い。
3 黑褐色土(10YR2/3)ローム粒・As-Cを微量含む。

8号ピット



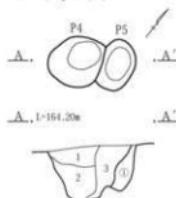
8号ピット

1 黑褐色土(10YR2/2)As-Cを
少量、黃褐色粒を微量含む。
しまり弱い。

2 黑褐色土(10YR2/3)黃褐色粒
を微量含む。

3 にぶい 黄褐色土(10YR5/4)
ローム塊を微量含む。

4・5号ピット



4・5号ピット

1 黑褐色土(10YR2/3)As-C・黃
色粒を微量含む。4号ピット
埋土。
2 黑褐色土(10YR2/2)As-Cを
微量含む。しまり弱い。4号
ピット埋土。
3 黑褐色土(10YR2/3)As-Cを少
量、黃褐色粒を微量含む。4号
ピット埋土。
① 黑褐色土(10YR2/3)黃褐色粒
を微量含む。5号ピット埋土。

9号ピット



9号ピット

1 黑褐色土(10YR2/3)白色粒・
黃褐色粒を少量含む。

2 黑褐色土(10YR2/3)黃褐色粒
を微量含む。

3 にぶい 黄褐色土(10YR5/4)
ローム塊を微量含む。

10号ピット



10号ピット

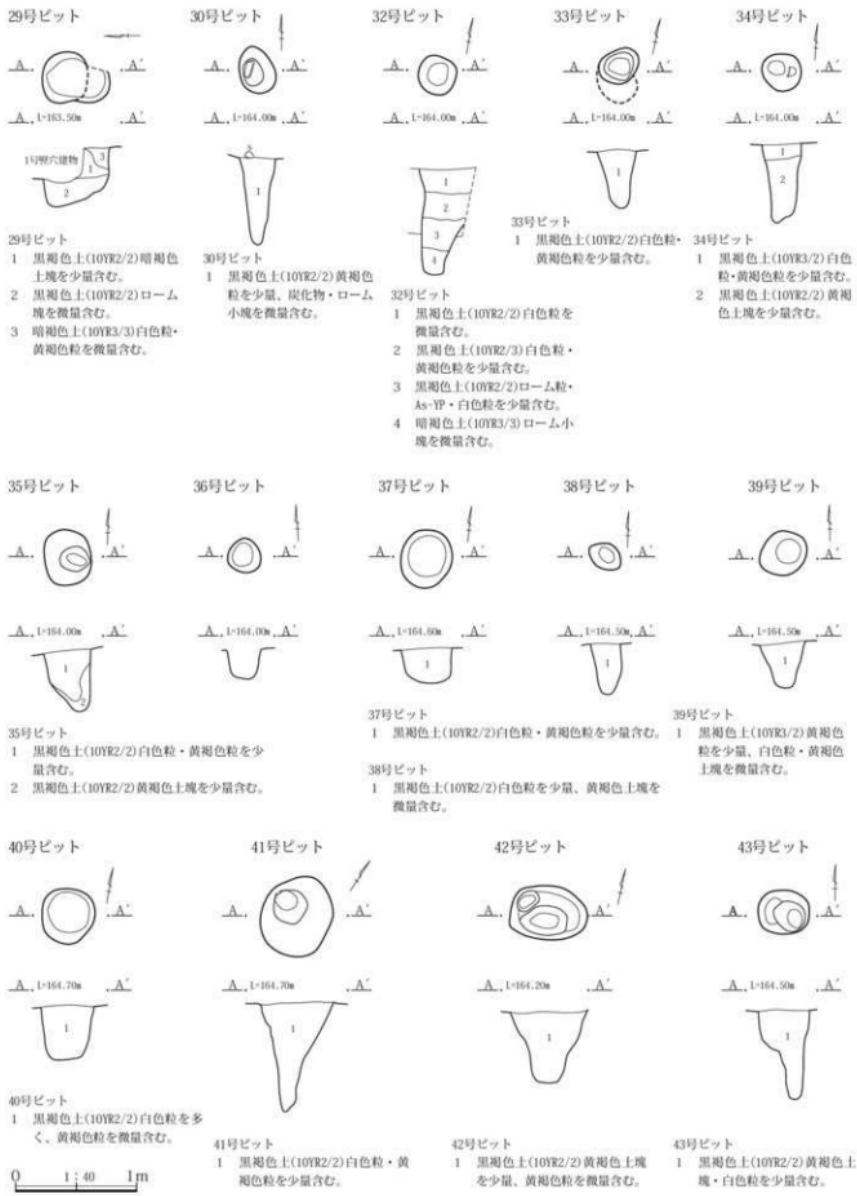
1 黑褐色土(10YR2/3)黃褐色
土塊を含む。
しまり弱い。

第39図 土坑(2)・ピット(1)



第40図 ピット(2)

第2章 発見された遺構と遺物



第41図 ピット(3)

い。おそらく径70cm前後の不整円形を平面形が推定される。深さは約65cmで袋状の断面形を示す。

重複：11号土坑が切る状態で調査されているが、土層による観察は果たしていない。新旧は不明である。

遺物：埋土中より、縄文前期土器片や土師器甕口縁部細片が出土するが、図化には至らなかった。

所見：断面形状から縄文時代の所産と考えたが、埋土の特徴も無く、出土遺物も混入と思われるため時期、性格は不明としたい。

10号土坑(第38図 PL.14)

位置：調査区西側の5号竪穴建物東壁際で調査された。座標位置はX=295-Y=-505~-510である。

経過：5号竪穴建物床面で確認された。当初は竪穴建物柱穴として調査を進めたが、規模も不適当なため土坑として位置付けた。

規模：平面形は不整楕円形で、規模は約60×45×(40)cmである。遺構確認面からの深さは1mを超えるが、本土坑の切込み面が不明なため、竪穴建物床面からの深さを記した。

重複：10号竪穴建物と重複するが、新旧関係は不明である。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：竪穴建物床面で検出された土坑である。新旧関係も不明で、時期、性格も特定できない。

11号土坑(第39図 PL.14)

位置：調査区南東で9号土坑と重複して検出された。座標位置はX=295-Y=-485である。

経過：ローム漸移層上位で平面形を確認した。埋土は黒褐色を呈するため色調差は明瞭だった。9号土坑と同時に調査された。

規模：長軸を南北に持つ大型の不整形土坑である。平面規模は約(221)×180cmで、深さは75cmを測る。北壁が大きくオーバーハングする。

重複：9号土坑との新旧は不明である。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：大型の不整形土坑で、出土遺物も無く埋土の特徴に乏しいことから、時期、性格は不明としたい。近世以降のムロ状土坑の可能性もある。

13号土坑(第39図 PL.14)

位置：調査区中央で検出された。座標位置はX=295-Y=-495である。

経過：ローム漸移層で確認された。埋土は黒褐色土を呈するため色調差は明瞭だった。

規模：径約45cmの小型の円形を呈する。深さは約25cmを測る。浅く鍋底状の断面形である。

重複・遺物：単独の検出で出土遺物も見ない。

所見：遺物の出土が無く、埋土の特徴に乏しいことから、時期・性格は不明としたい。

14号土坑(第39図 PL.14)

位置：調査区中央で検出された。座標位置はX=300-Y=-495~-500である。

経過：ローム漸移層で確認された。黒褐色の埋土との色調差は明瞭だった。

規模：不整円形を平面形とし、規模は約60×50cm、深さは約50cmを測る。断面形は鍋底状を呈す。

重複：単独の検出である。

遺物：埋土中より土師器甕部細片が出土したが、図化には至らなかった。

所見：小型の土坑で出土遺物も細片で、時期も特定できない。性格も不明である。

1号溝(第38図 PL.17)

位置：調査区東側で5号土坑やP18と重複して調査された。座標位置はX=295-Y=-480である。

経過：ローム漸移層下位で確認された。埋土との質感、色調差は明瞭だった。

規模：等高線に沿って南北の走向を示す。北側から南側への比高差は約10cmあり、北から南へ緩やかに下る様相を示す。規模は幅約48cm、深さ約38cmを測る。

重複：5号土坑を切る新旧関係である。P18との重複関係は不明である。

遺物：埋土中より土師器甕底部細片、須恵器甕口縁部細片が出土したが、図化には至らなかった。混入であろう。

所見：等高線に沿った直線状の走向から、水利などの性格は想定できない。おそらく地割などの用地境を窺わせる様相である。時期は出土遺物が混入と思われ特定できない。

3 ピット(第39~41図 PL.14~17)

本遺跡の調査では、43基のピットを得た。掘立柱建物柱穴に相当するピットは確認できなかったが、幾つかのピットは柱穴として相応しい規模、土層を観察できた。また、前々節で述べた竪穴建物に関わるピット—壁外柱穴の存在を示唆する例もあるため、ここでは全てのピットではなく、幾つか特徴的な例を選んで述べたい。各ピットの位置や規模は遺構計測表を参考にしていただきたい。

(1)掘立柱建物を示唆するピット

調査区西側の中央南寄りで11号竪穴建物南に群在するピットの幾つかは、径40cm以上で深さも50cmを超える良好な例がある(P 1・2・3・11・13・15・22)。中には良好な柱痕を残すピットもある。この地点において、掘立柱建物の存在を予測して、調査段階から各ピットの走向や規模を考慮してピットの配置から掘立柱建物の抽出を試みたが、良好な形状にはならなかった。

(2)竪穴建物壁外柱穴を示唆する例

竪穴建物の説明で、壁に重なるピットや壁外のピットを壁外柱穴として可能性を求めた。ここでは、それらのピットを再検討して、その可能性を高めておきたい。

縄文時代前期中葉と中期前葉に比定した4号・7号竪穴建物東壁(壁際)に6号ピットと西壁に8号ピットが重なる。6号ピットは深さ約55cm、8号ピットは約70cmで柱穴規模としては良好である。重複竪穴建物のため帰属が判然としないが、中期前葉の4号竪穴建物に妥当性を求めておきたい。

古墳時代の竪穴建物とした5号竪穴建物の説明では西壁の30・31号ピット、南壁の25・26号ピットを柱穴に可能性を求めた。その他に東壁壁外に27・28号ピットが対をなしており、深さも約45cmと57cmで柱穴に相応しい規模を呈す。また西壁壁外にも24号ピットがある。1基だけだが約55cmの深さを測り、壁外柱穴の可能性はある。

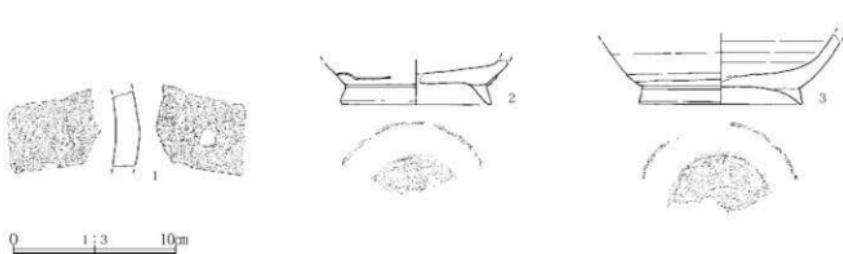
平安時代に比定した3号竪穴建物は西半のみの調査であるが、北壁と南壁にかかる32号ピットと29号ピットを壁柱穴として位置付けた。深さは32号ピットが約35cm、29号ピットが約50cmを測る。竪穴建物本体が西側だけの検出のため全体像は把握できないが、壁柱穴の可能性は高いと判断する。

竪穴建物や壁柱穴や壁外柱穴は、その竪穴建物との同時性をまず実証しなければならず、配置と規模のみでは判断できない。また、上屋の想定も念頭に置かねばならず問題点は多い。本遺跡では調査段階で、壁外柱穴の存在を念頭において、その検出に努めたが、上記の事由もあり確定には至らなかった。しかしながら本遺跡の事例が、今後の調査研究に良好な資料となり得るだろう。

4 遺構外出土遺物(第42図 PL.28)

古墳時代～古代の遺構外出土遺物は多くは無い。総数250点程でいずれも細片を主とする。出土位置も集中箇所は無く、遺構確認時に遺構から外れた箇所や表土からの出土である。3点を図示した(第42図)。いずれも須恵器で甕部破片(1)、杯体部～底部破片(2・3)である。

8世紀代と思われ、本遺跡の竪穴建物主体時期に重なる。



第42図 遺構外出土遺物(古代)

第3章 総括

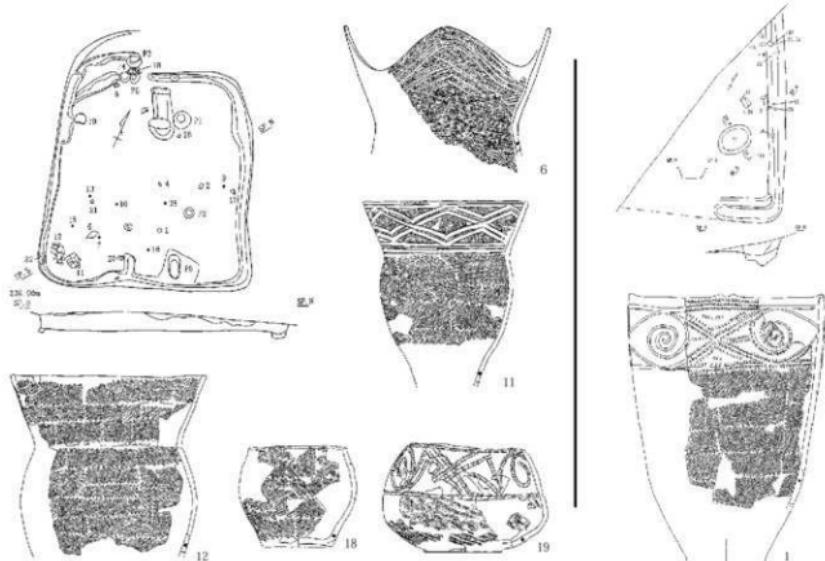
高浜天狗原遺跡は、榛名山南麓に位置し南北に延びる舌状台地に占地する集落遺跡である。調査区はこの台地を東西に横断する形で設けられ、調査区中央北側を最高標高地点として、南及び東西に下る地形を示す。検出された遺構は、この台地縁辺に分布する形態を示し縄文時代の竪穴建物4棟、古墳時代2棟、古代6棟というやや小規模な遺構数である。古代の竪穴建物同士で重複する例は無く、おそらく竪穴建物密度も低いものと考えられる。しかしながら、周辺遺跡は大規模な集落遺跡や著名な古墳、寺院推定地などがあり、本遺跡の調査はこれらの大規模集落などの外線とする位置づけをより鮮明にする資料を提供すると評価されよう。

ここでは、調査された各時代の竪穴建物や出土遺物の位置付けを再確認し、まとめのかわりとしたい。

1 縄文時代前期中葉の周辺遺跡

縄文時代の竪穴建物は4棟が調査された。前期中葉に

比定される7号、11号、12号竪穴建物と中期前葉に位置付けた4号竪穴建物である。残念ながらいずれの竪穴建物も炉の検出が適わず、また柱穴配置も良好ではなかったため、竪穴建物規模などの詳細に不明部分が多い。その中で、11号竪穴建物は出土遺物量も多く、前期中葉の黒浜式と有尾式からなる土器群として一括して高く評価できよう。周辺遺跡でも該期資料は多く報告され、11号竪穴建物は榛名山南麓域の前期土器様相を補強する資料となる。第3図に掲載した周辺遺跡の中で、主な前期中葉の集落遺跡としては、当事業団が調査・報告した和田山天神前遺跡、白川笹塚遺跡、三ッ子沢中遺跡が挙げられる。検出された竪穴建物は方形を基調としており、石囲い炉や壁柱穴を敷設する例も見られる。ここでは、本遺跡からやや距離を置くが中村遺跡2-45住と子安遺跡1住例を第43図に挙げ、当地域の該期土器様相とした。中村遺跡は本遺跡よりやや距離を置く、旧榛名町下室田町に所在する。前期中葉に比定される竪穴建物4棟



第43図 周辺遺跡における縄文時代前期中葉の事例(『榛名町誌』より転載)

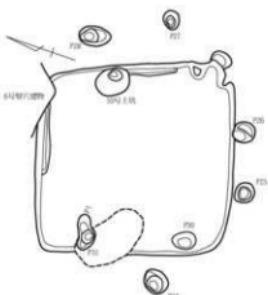
を調査しているが、奈良・平安時代の竪穴建物63棟が検出されており古代の大規模集落として位置付けられている。前期中葉の良好な土器組成を示す2-45住は有尾式の波状口縁(6)、平縁(11)の深鉢、黒浜式の深鉢(12)、鉢(18・19)が共存している。この他に連続爪型の有尾式口縁部破片や台付深鉢脚部などが出土している。他の遺跡が深鉢のみで構成する出土組成を示すが、鉢が加わっており、有尾式と黒浜式の共存と併せて良好な器種・型式組成といえよう。その他では子安遺跡1住出土土器が特筆されよう。竪穴建物は一部の調査に止まるが、特徴的な口縁部文様を配す土器(1)が出土する。口縁部文様帯は横位降線で画され、降線による菱形状区画が横位に連続し、区画内は降線による溝巻文が配される。側線に爪形文を施す。類例を見ない文様構成である。筆者自身が黒浜式としたが問題が残る。伴出する土器として有尾式が破片ながら伴出している。

このように、本遺跡11号竪穴建物や周辺遺跡の前期中葉土器群は有尾式や黒浜式の共伴事例が定着しており、これは県内の他地域とも大きな差はない。ただ異系統土器である大木2式の網目状撚糸文などは欠落するようだ。

最後に、榛名山南麓域においても、県内各地で報告されているような、前期中葉～後葉の大規模集落の存在も予想されよう。

2 5号竪穴建物について

古墳時代に比定される竪穴建物は2棟が調査された。5号、9号竪穴建物で、いずれも6世紀後半に時期を求めたが、出土遺物量も多くなく確定的ではない。特に5号



第44図 5号竪穴建物における壁外柱穴配置案

竪穴建物は東南隅にカマドが設けられており、当該期の竪穴建物形状としては違和感が残る。類例は多く無く、当地域では三ッ子沢中遺跡において7世紀代に比定された40号竪穴建物南東隅にカマドが設けており、さらに6世紀後半とされる和田山天神前遺跡17号住で南西隅のカマドが検出されている。東南隅のカマドは平安時代の所産と考えられているが、稀に何等かの理由で古墳時代後半でも設けられるようだ。要因は不明だが、和田山天神前17号住は「尾根に向かって煙道をつけ、畠の側に入り口を設けた構造」と指摘されている(女屋1999)。本遺跡5号竪穴建物の場合も、何らかの地形・地勢が原因し、変則的な南東隅へのカマド設置と考えておきたい。

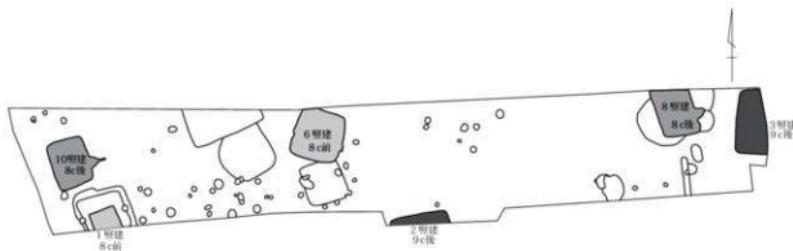
次に前章ピットの項で述べた5号竪穴建物や縄文時代竪穴建物である4号・7号竪穴建物、9世紀後半に比定した3号竪穴建物に壁外柱穴の可能性を述べてみたい。発掘調査時より、竪穴建物の外周に関しては壁外柱穴の存在を加味して精査を重ねた経緯があり、その成果が本遺跡の竪穴建物壁外柱穴の在り方となった。しかしながら、4号・7号竪穴建物は1号竪穴建物とも重複するため柱穴帰属の問題が残り、また3号竪穴建物は東半以上が調査区域外に延びるため全容が把握できない問題がある。そこで、全体像が窺われる5号竪穴建物に注意を払い、ピットの項で説明を加えたピット3基(P24・27・28)を加えた図が第44図である。ピットは北辺を除き、2基一対の形態で配され、西辺は床面に2基、壁外に1基が設けられている。深さも良好で配置・規模とともに柱穴として相応しいピットと位置付けられる。ただし、上屋構造を考えると壁外に柱穴を設けた場合、周堤帯や土屋根の在り方が課題となる。桁や梁の位置や長さからも、壁外柱穴を想定すると壁立の竪穴建物の可能性もあり、周堤帯や土屋根を除外する構造となり、古墳時代後期の竪穴建物としては問題が残る。今後検証を重ねるべきであろう。

3 古代の竪穴建物について

古代の竪穴建物6棟のうち全容が把握できた例が2例のみでカマドが調査できた建物が3例である。詳細な時期の把握は果たせないが、出土土器の様相から、8世紀前半代に比定した竪穴建物が1号、6号竪穴建物。8世紀後半代が8号、10号竪穴建物、9後半代が2号、3

号竪穴建物である。一時期2棟毎の検出となった。また9世紀前半代の遺構が見られないが、周辺遺跡では9～10世紀代の集落が増加する傾向にあり、本遺跡も近接した地点で当該期の遺構が存在するものと推測したい。一時期2棟の竪穴建物が同時併存しているとは確定できないが、2棟とも重複せず数十mの距離を保って位置する。おそらく数軒単位の竪穴建物が舌状台地縁間に間隔を持って古地していたのであろう。古代竪穴建物の中で、最も出土遺物の充実していた6号竪穴建物は、土師器杯、須恵器杯・椀・蓋などの供膳具に偏った出土状態を示す。また、土師器杯に関しては7世紀後半に比定されるが、須恵器杯・椀類は7世紀末～8世紀前半に時期が求められる。出土状態は、供膳具の一括廃棄の所産と思われるが、住居内あるいは集落内で供膳具のみを一定期間保持し、一括して竪穴内に廃棄したのであろうか。

前述のように、周辺では平安時代の集落が増加する傾向にある。それぞれの遺跡で特徴的なあり方を示し、当に本遺跡と同じ沢筋にある高浜広神遺跡では9世紀中葉の竪穴建物から金銅製丸柄や刀子が、10世紀前葉に比定される竪穴建物から鉄製の焼印、鋤先が出土し、また掘立柱建物も検出されている。焼印の存在から古代牧の存在と掘立柱建物からはその管理施設が想定されている。なお、桙名町教育委員会が調査した蔵屋敷遺跡でも10世紀代の竪穴建物から銅印が出土している。周辺にはその他にも、鍛冶施設を付帯する集落や寺院跡が想定される遺跡もあり、極めて多様性を含む地域である。有力な勢力の拠点となった可能性もある。その中で、本遺跡の遺構・遺物は小規模な様相を示すが、桙名山南麓域の古代集落様相を考える上で、周辺の遺跡群の資料と併せて考えるべきであろう。



第45図 古代竪穴建物時期別配置図

遺構計測表・遺物観察表

《遺構》

平面形：円形・不整円形・橢円形・不整橢円形・長方形・方形・不整方形・不整形から選んだ。推定形状は()あるいは?で表した。

断面形：本文中の記載を参考にしていただきたい。

計測値：長軸と短軸は直交位置で計測した。深さは床面・底面から確認面までの距離である。現存値は()で表した。

《遺物》

一縄文土器・石器一

出土位置：出土状態の良好な竪穴建物に限り、挿図に番号が記された遺物は平面位置と断面位置を記した。

胎土：土器の夾雜物を記した。混和材としての砂粒が2mm以上を粗砂粒。2mm以下は細砂粒とした。混和材中の特徴的な鉱物粒として、石英、輝石を基準とし片岩、チャートなどが含まれた場合も明記した。特定できない混和材は白色粒、褐色粒とした色調で表している。

焼成：良好な例を標準とし、焼成温度が低く土器胎土が弱い順に、軟質(脆弱)、やや軟質、良好と記した。

色調：土器の表面色調を優先し、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色調監修)に準拠したが、色調名のみを記し、マンセル値は併記していない。

石材：出土した石器・石製品の石材名を記した。

計測値：土器は口径・高さ・底径を基準に現存した部位を計測した。1/2以下の復元値は()で記した。破片資料の現存値は記していない。石器は長さ・幅・厚さ・重量を計測し現存値を()で記した。

文様の特徴：器形、文様構成を主とした記載で、文様要素や原体、内面整形などを併記した。

備考：土器が帰属する時期の目安として、縄文時代六期区分と区分内の大凡の段階を記した。型式名などの詳細は本文中で触れている。

掲載縮尺：土器は1/3、1/4で、石器は器種により1/1～1/6の縮尺で掲載している。挿図ごとにスケールを貼付し、遺物図に明示した。

一土師器・須恵器一

種類：文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器(奈良三彩、灰釉陶器、綠釉陶器)、土製品等に種別している。

なお、古墳時代に黒色処理を施された土器については、その成整形から土師器とした。その後の奈良時代中頃から出現する内面及び内外面を黒色処理された土器については、成整形から黒色土器として種別している。

器種：文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて杯、椀、高杯、盤、皿、鉢、壺、器台、壺・瓶(長頸壺、短頸壺、平瓶、横瓶、提瓶、巣)、甕、硯等の名称を使用している。なお、杯と椀の区分は、器高/口径比が大きいものを椀としているが、明確に数値化できていない。壺と甕との区分は、頸部/胴部最大径比によって区分しているが、例外として胴部最大径より頸部径の大きい形態である広口壺と呼称しているものも存在する。

残存率：概ね全体の比率で「完形」、「3/4」、「1/2」等で表示している。なお、1/4以下については、「口縁部片」、「底部片」等の部位片で表示している。

計測値：計測箇所は、以下のように省略している。

口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、摘：摘径、カ：杯蓋等のカエリ径、頸：頸部径、胴：胴部最大径、孔：懸・有孔鉢などの底部に設けられた孔径等である。この他の略称についてはそれぞれ備考等に表示した。なお、単位はcmである。

胎土：記載中の表現にある細砂粒は、径2mm以下、粗砂粒は2～5mmのものを表す。5mm以上は、蝶と表示した。

焼成：土師器は、比較的硬質に焼成されているものを「良好」、軟質や脆い状態のものを「軟質」、「不良」で表示してある。須恵器は、「還元焰」、「酸化焰」で表示してある。

色調：農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色調帖』に準拠している。

特徴：成形形を中心に記載している。

備考：灰釉陶器は、猿投古窯跡群と東濃古窯跡群とを区分し、可能な限り各窯式期を判断して記載している。綠釉陶器は、東海産、畿内産、近江産を区分し、可能な限り年代または窯式期を判断して記載している。

掲載縮尺：原則1/3で掲載している。大きさによっては、1/1～1/4の縮尺で掲載しているものがある。その場合は、それぞれの遺物図に明示してある。

遺構計測表

第2表 遺構計測表

縦文時代

遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
4号竪穴建物	—	420	104	N-16°-W	X=290 ~ 295 Y=525 ~ -530	不整形方 長方形	1号竪穴建物 7号 竪穴建物 P 6・8 石	深鉢片・器類・台 石	中期前葉
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
7号竪穴建物	—	334	126	N-19°-W	X=290 ~ 295 Y=-525 ~ -530	不整形方 長方形	1号竪穴建物 4号 竪穴建物 P 6・8	深鉢片・石器	前期中葉
施設名	長軸	短軸	深さ						
1号ピット	28	24	30						
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
11号竪穴建物	—	397	53	N-29°-W	X=295 ~ 300 Y=-510 ~ -515	不整形方 長方形	9号竪穴建物 P 4・5	深鉢・打製石斧・ 磨製石斧	前期中葉
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名		長軸	短軸	深さ	施設名
1号土坑	88	82	40	2号土坑		56	54	35	3号土坑
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
12号竪穴建物	—	(200)	79	—	X=295 ~ 300 Y=-480 ~ -485	不整形方 長方形	8号竪穴建物	深鉢片・円石・石皿	前期中葉
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
15号土坑	—	160	52	—	X=300 Y=-480	不整形方 長方形	8号竪穴建物 16号土坑 P 44	深鉢片	前期中葉
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
16号土坑	—	—	29	—	X=300 Y=-480	—	8号竪穴建物 15号土坑	深鉢片	前期中葉
古墳時代～古代									
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
1号竪穴建物	—	158	65	N-20°-W	X=290 ~ 295 Y=-525	長方形	4号竪穴建物 7号竪穴建物	須恵器杯片	8世紀前半
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名		長軸	短軸	深さ	施設名
上坑	62	58	35						
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
2号竪穴建物	448	—	76	N-101°-W	X=290 Y=-500 ~ -505	長方形？	—	土師器杯・甕・須 恵器杯・鐵製品	9世紀後半
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
3号竪穴建物	499	—	60	N-5°-E	X=295 ~ 300 Y=-475	方形	P 29・32	土師器甕・須恵器 杯・瓶	9世紀後半
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名		長軸	短軸	深さ	施設名
1号床下土坑	115	106	64	2号床下土坑		124	94	69	1号ピット
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
5号竪穴建物	324	313	48	N-71°-E	X=295 Y=-505 ~ -510	正方形	6号竪穴建物 10号 土坑 P 26・30・31	土師器杯・甕・須 恵器杯・白玉・荒削石	6世紀後半
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名		長軸	短軸	深さ	施設名
1号ピット	60	28	24	2号ピット		24	20	128	3号ピット
施設名	長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ	
5号竪穴建物カマド	74	21	41	N-101°-E					
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
6号竪穴建物	399	386	86	N-109°-E	X=295 ~ 300 Y=-505 ~ -510	正方形	5号竪穴建物	土師器杯・甕・須 恵器杯・蓋	8世紀前半
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名		長軸	短軸	深さ	施設名
貯藏穴	—	64	21	1号床下土坑		115	110	34	2号床下土坑
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名		長軸	短軸	施設名	長軸
1号ピット	30	—	58	2号ピット		32	27	47	3号ピット
施設名	長軸	短軸	深さ			長軸	短軸		長軸
6号竪穴建物カマド	72.5	33	73	N-114°-E					
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
8号竪穴建物	—	330	69	N-18°-W	X=300 Y=-480 ~ -485	長方形	12号竪穴建物 15・16号土坑	土師器甕・石製研 磨具	8世紀後半
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名		長軸	短軸	施設名	長軸
貯藏穴	68	56	38	8号竪穴建物カマド		122	42	52	N-109°-W
遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
9号竪穴建物	572	—	47	N-22°-W	X=295 ~ 300 Y=-515 ~ -520	方形	11号竪穴建物	土師器甕	6世紀後半
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名		長軸	短軸		
1号ピット	69	59	92	2号ピット		—	64	78	

遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	方位	位置	平面形状	重複遺構	出土遺物	時期
10号堅穴建物	380	294	85	N-19°-W	X=295 ~ 300 Y=525 ~ -530	長方形	—	上師酒杯・甕・須恵器杯・多孔円盤	8世紀後半
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	施設名	長軸	短軸
1号床下土坑	136	133	74	2号床下土坑	—	60	74	3号床下土坑	104
施設名	長軸	短軸	深さ	施設名	長軸	短軸	深さ	方位	80
4号床下土坑	122	78	30	10号堅穴建物カマド	129.5	47	73	S-107°-W	101

上坑

遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	平面形状
1号土坑	56	56	32	X=295 Y=520	円形
2号土坑	68	66	15	X=290 ~ 295 Y=520	円形
3号土坑	75	79	34	X=295 Y=515	不整円形
4号土坑	50	50	29	X=290 Y=520 ~ -525	円形
5号土坑	—	80	26	X=295 Y=480	楕円形か
6号土坑	41	38	22	X=295 Y=515	不整円形
7号土坑	138	76	87	X=295 Y=480	不整円形

溝

遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	平面形状
1号溝	—	48	38	X=295 Y=480	

ピット

遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	平面形状
1号ピット	56	30	6	X=290 ~ 295 Y=515 ~ -520	不整楕円形
2号ピット	—	62	67	X=290 Y=515	不整円形
3号ピット	60	54	79	X=290 ~ 295 Y=515	不整円形
4号ピット	90	42	44	X=295 Y=515	不整円形
5号ピット	42	—	35	X=295 Y=515	不整円形
6号ピット	50	42	55	X=290 ~ 295 Y=525	不整円形
7号ピット	33	24	31	X=290 ~ 295 Y=520	不整円形
8号ピット	48	40	68	X=290 Y=525	不整円形
9号ピット	33	30	44	X=295 Y=525	円形
10号ピット	28	20	34	X=295 Y=520	不整円形
11号ピット	42	30	74	X=290 Y=515 ~ -520	不整円形
12号ピット	—	28	29	X=295 Y=520	不整楕円形
13号ピット	41	34	61	X=295 Y=520	不整円形
14号ピット	61	52	78	X=295 Y=530	不整形
15号ピット	40	39	65	X=295 Y=515	不整円形
16号ピット	32	29	65	X=295 Y=480	不整円形
17号ピット	32	27	68	X=295 Y=500	不整円形
18号ピット	38	30	41	X=295 Y=480	不整楕円形
19号ピット	30	20	17	X=295 Y=515	不整円形
20号ピット	30	25	51	X=295 Y=515	不整楕円形
21号ピット	37	31	60	X=295 Y=485	不整円形
22号ピット	38	24	56	X=295 Y=515	不整円形

遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	平面形状
8号土坑	—	42	75	X=295 Y=515	不整円形
9号土坑	—	106	65	X=295 Y=485 ~ -490	不整円形
10号土坑	58	45	110	X=295 Y=505 ~ -510	不整楕円形
11号土坑	—	178	75	X=295 Y=485	不整形
13号土坑	46	45	25	X=295 Y=495	円形
14号土坑	60	42	45	X=300 Y=495 ~ -500	不整円形

遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	平面形状
23号ピット	19	19	41	X=295 Y=515	円形
24号ピット	42	22	55	X=295 Y=510	不整円形
25号ピット	34	32	46	X=295 Y=510	円形
26号ピット	38	34	19	X=295 Y=505 ~ -510	不整円形
27号ピット	32	26	45	X=295 Y=505	不整円形
28号ピット	52	32	57	X=295 Y=505	不整円形
29号ピット	55	42	50	X=295 Y=475	不整楕円形
30号ピット	40	28	71	X=295 Y=510	不整円形
31号ピット	22	20	55	X=295 Y=510	楕円形
32号ピット	20	20	35	X=300 Y=475	円形
33号ピット	34	27	48	X=300 Y=530	不整円形
34号ピット	33	30	64	X=300 Y=530	不整円形
35号ピット	46	38	52	X=300 Y=530	不整円形
36号ピット	28	28	27	X=295 Y=520	円形
37号ピット	48	42	30	X=300 Y=500	不整円形
38号ピット	29	21	37	X=300 Y=500	不整円形
39号ピット	41	36	39	X=300 Y=500	不整円形
40号ピット	46	44	44	X=300 Y=495	不整円形
41号ピット	78	46	89	X=300 Y=495	不整円形
42号ピット	64	44	60	X=300 Y=520	不整円形
43号ピット	42	38	32	X=300 Y=505	不整円形
44号ピット	32	24	47	X=300 Y=480	不整円形

遺物觀察表

第3表 4号堅穴建物出土遺物

種類 PL.No.	種類 No.	出土位置 残存率	計測値	胎土/填土/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第7図 PL.18	1	縄文土器 深鉢	理上位 口縁部破片 体部破片	粗;石英・片岩・雲母/良好/暗赤褐色	平底。頭部に握りを加えた突起を付し隆線による口縁部半横円状区画文を配す。区画内は三角連続刺突文3条が沿う。体部下半に附文付を付す。他は無文。内面平滑な横位撫で調整。	中期前葉	
第7図 PL.18	2	縄文土器 深鉢	理上位 口縁部破片	粗;石英・雲母/良好/にぶい・橙色	粗;石英・雲母/良好/にぶい・橙色	中期前葉	
第7図 PL.18	3	縄文土器 深鉢	理上・縄文包含 肩 体部破片	粗;石英・雲母/良好/黒褐色	体部上半か、横位平行沈線を設け体部は横位刻み目列	中期中葉	
第7図 PL.18	4	縄文土器 深鉢	理上位 体部破片	粗;石英・輝石・片岩/白色粒/良好/黒褐色	体部上半か、横位平行沈線を設けその間に横位隆線による横位波状文が配される。以下横位隆線と弧状隆線が設けられる。内面は横位撫で調整。	中期中葉	
第7図 PL.18	5	縄文土器 深鉢	理上位 体部破片	粗;石英・雲母/良好/黒褐色	複列の結節沈線が横位・弧状に施される。内面平滑な撫で調整。	中期中葉	
第7図 PL.18	6	縄文土器 深鉢	理上位 体部破片	粗;石英・雲母/良好/黒褐色	u字状小突起両端より横位弧状隆線が発生する。複列の結節沈線が沿う。内面平滑な撫で調整。	中期中葉	
第7図 PL.18	7	縄文土器 深鉢	理上位 体部破片	粗;石英・雲母/良好/明黄褐色	横位直刺文を軸に横位隆線や弧状隆線が発生する。横位帶文構成。連続刺突文と側縫とし、三角連続刺突文を横位・縱位に施す。内面平滑な撫で調整。	中期前葉	
第7図 PL.18	8	縄文土器 深鉢	理上位 体部破片	粗;石英・雲母/良好/黄褐色	片振り状の小突起より隆線が横位・縦位に派生する。側縫に連続刺突文を施す。内面平滑な撫で。煤付着。	中期前葉	
第7図 PL.18	9	縄文土器 深鉢	理上位 口縁部破片	粗;織維・石英・チャート/白色粒/良好/明黄褐色	横位無縫LとRによる羽状縄文構成。内面弱い横位研磨を施す。	前中期中葉	
第7図 PL.18	10	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片3点	粗;織維・石英・白色粒/良好/明黄褐色	横位・斜位内皮平行沈線。菱形状意匠か。頭部は無文。内面は丁寧な研磨を見える。	前中期中葉	
第7図 PL.18	11	縄文土器 深鉢	理上 底部破片	底 (8.0)	織維・織・石英/良好/明黄褐色	やや渋手の器厚を呈し、直立気味の体部下半。横位無縫LとRによる羽状研磨を加える。	前中期中葉
第7図 PL.18	12	縄文土器 深鉢	理上 底部破片	底 (7.6)	織維・石英/良好/にぶい・黄褐色	底面は僅かに上昇傾向。体部は横位R Lを施す。内面平滑な撫で調整。	前中期中葉
第8図 PL.18	13	削片石器 容器	理上 完形	長 7.8 厚 3.6 重 29.9	黑色頁岩	刃面部疊上を打撃して割られた縦長の三角形状剝片を用いる。左側面を削り右側を削る形狀を整える。対部は右辺縫の直縫部分になり、剥片裏面側に微細な剝離痕が連続する。	前中期中葉
第8図 PL.18	14	礫石器 石器	北面横床直 完形	長 20.2 厚 5.9 重 3218.6	粗粒輝石安山岩	背面裏面側が弱く摩耗するほか、上端部側に打痕がある。摩耗部は裏面側に凹がっているが、地面等に接して削れたものか判断できない。裏面は保けているよう見える。	
	15	2次加工ある 削片	理上 2次加工ある 削片	長 - 厚 - 重 31.0	-		
	16	2次加工ある 削片	理上 2次加工ある 削片	長 - 厚 - 重 2.2	黒曜石		

第4表 7号堅穴建物出土遺物

第9図 PL.19	1	縄文土器 深鉢	理下位 体部破片		粗;織・石英・白色粒/良好/にぶい・黄褐色	L RとR Lによる羽状縄文構成。やや乱れた施文。内面横位撫で調整。	前中期中葉
第9図 PL.19	2	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		粗;織・石英・白色粒/良好/暗赤褐色	L RとR Lによる羽状縄文構成。内面平滑な撫で調整。	前中期中葉
第9図 PL.19	3	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		粗;織・白色粒/やや軟/明黄褐色	I本描き沈線が2条施される。内面平滑な撫で調整。	前中期中葉
第9図 PL.19	4	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		粗;織・白色粒/良好/暗灰黄色	縦位R Lが施される。内面平滑な撫で調整。	前中期中葉
第9図 PL.19	5	縄文土器 深鉢	理上 底部破片	底 (8.0)	粗;織・石英・白色粒/チャート/良好/相色	上げ底。L RとR Lを施す。羽状縄文構成。底面は平滑な撫で。内面煤付着。	前中期中葉
第9図 PL.19	6	削片石器 石器	理上位 一部欠	長 (1.6) 厚 1.2 重 0.6	黒曜石	裏面側は平坦な風切削面。加工はほく形状を整える程度で、表面裏とも素材の周辺に限られる。先端を欠損。凹基無茎。	

第5表 11号堅穴建物出土遺物

第11図 PL.19	1	縄文土器 深鉢	床直 口縁～体部下半 1/3残存	口 (39.0)	織・織・石英・白色粒/良好/にぶい・黄褐色	四重位波状縫。連續爪形文2条による菱形状意匠を口縁部に配す。頭部屈曲部に横位内皮平行沈線と連續爪形文を設ける。体部は横位直縫R Lとしによる羽状縄文構成。内面研磨。体部下半に保付着する。	前中期中葉
第12図 PL.19	2	縄文土器 深鉢	理上位 口縁～体部下半 1/3残存 口縁部破片	口 (18.0)	織・織・石英・輝石/良好/暗赤褐色	四重位波状縫。口縁部は横位L RとR Lを施す。乾燥が進んだ際の施文。体部はG段多条R L L Rの横位施文。おそらく羽状構成。強部屈曲部は横位撫で。内面平滑な研磨を加える。	前中期中葉
第12図 PL.19	3	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片2点		粗;織・石英・片岩/良好/にぶい・黄褐色	波状縫。薄手の器。幅狭の多戻竹管状工具による平行沈線を施す。おそらく羽状意匠か。波状縫に縦位直縫沈線を設ける。内面横位削り調整後弱い研磨を施す。	前中期中葉
第12図 PL.19	4	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		織・織・石英・角安/白色粒/良好/暗赤褐色	波状縫。内皮平行沈線が口縁部に施される。やや乱雑な施文。内面器面摩滅。	前中期中葉

種 団 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	成形・整形の特徴	備 考		
第12回 PL.19	5	縄文土器 深鉢	理上 口頭部破片		粗・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	波状縁頭部。幅広の連続爪形文2枚が口縁部に沿う。以下 菱形状の意匠か。内面丁寧に研磨を加える。	前期中葉	
第12回 PL.19	6	縄文土器 深鉢	理上 口頭部破片		粗・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	口唇部欠損。おそらく底底部か。頸部で強く屈曲する。幅 狭の連続爪形文が複数段に配される。	前期中葉	
第12回 PL.20	7	縄文土器 深鉢	理上 口頭部破片		粗・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	口唇部欠損。波状縁か。幅狭の連続爪形文が斜位に3条施 される。おそらく菱形状意匠。内面弱い研磨を加える。	前期中葉	
第12回 PL.20	8	縄文土器 深鉢	理上 口頭部破片		粗・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	幅狭の連続爪形文を横位に設け上位に弧状意匠を配す。お そらく菱形状意匠。内面弱い研磨を加える。	前期中葉	
第12回 PL.20	9	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		粗・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	体盤上半に弱い凹面を見る。縁部に横位平行浅線を設け、 以下L RとR Lの羽状縫構成。内面弱い研磨。	前期中葉	
第12回 PL.20	10	縄文土器 深鉢	理下位 体部破片		粗・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	O段多条L RとO段多条R Lによる羽状縫構成。おそら く菱形状構成を呈す。内面弱い横位研磨。	前期中葉	
第12回 PL.20	11	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		粗・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	横位で円筒状の体盤中位。横位L RとR Lによる羽状縫構 成で菱形状意匠が配される。外器面削減。内面平滑な推 で。	前期中葉	
第13回 PL.20	12	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		織・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	やや薄手の器底。L RとR Lの羽状縫構成。内面研磨を 加える。	前期中葉	
第13回 PL.20	13	縄文土器 深鉢	床直 体部破片		粗・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /にぶい焼	体盤中位で外反する。横位L RとR Lによる羽状縫構成、 内面撫で調整。	前期中葉	
第13回 PL.20	14	縄文土器 深鉢	理上 口縁～体部上半 1/3残存	口 (9.0)	織・織維・石英・片岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	平緩で内削型の口縁部端部。僅かな凹凸を見る。O段多条 L RとO段多条R Lの横位施文による羽状縫構成で菱形状 意匠が配される。内面撫で調整。	前期中葉	
第13回 PL.20	15	縄文土器 深鉢	床直 口縁～体部上半 1/3残存	口 (16.0)	織・織維・石英・白 色粒・良好・褐色	口縁部僅かに膨らむ。体盤中位が僅かに膨らむ円筒状の体 部端部。横位L Rが覆う。内面平滑な撫で。	前期中葉	
第13回 PL.20	16	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		織・織維・石英・片 岩粒・白色粒・良好 /明赤褐色	凹凸ある体部端面。横位無節しが複数。内面撫で調整。少 量の焼付着。	前期中葉	
第13回 PL.20	17	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		粗・織維・石英・片 岩・良好・褐色	横位R Lを施す。内面撫でで弱い横位研磨を加える。	前期中葉	
第13回 PL.20	18	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		織・織維・石英・白 色粒・良好・暗褐色	体盤中位か。小径で円筒状の凹面。横位L Rが覆う。内面 弱い研磨を加える。	前期中葉	
第13回 PL.20	19	縄文土器 深鉢	理下位 体部破片		粗・織維・石英・片 岩・白色粒・良好 /明赤褐色	体盤中位か。内削し中位で凹れる。横位無節Rが複数。内 面弱い撫で調整で内凹り凹凸が顕著。煤が付着する。	前期中葉	
第13回 PL.20	20	縄文土器 深鉢	理上 体部破片		粗・織維・石英・片 岩・良好・褐色	横位L Rが覆う。内面弱い横位研磨を加える。	前期中葉	
第13回 PL.20	21	縄文土器 深鉢	理下位 底部のみ残存	底	7.4	粗・織維・石英・白 色粒・良好・明赤褐色	やや上げ底。体部は薄手の器厚で内面青味に聞く。内面弱 い撫で調整。	前期中葉
第13回 PL.20	22	縄文土器 深鉢	理上 底部のみ残存	底	9.0	粗・織維・石英・白 色粒・良好・褐色	やや上げ底。体部下半は横位R LとL Rを施す羽状縫構 成。内面弱い撫で調整。	前期中葉
第13回 PL.20	23	剥片石器 打斧	理上 完形	長 幅 11.2 6.2 厚 重 1.6 103.2	黒色頁岩	器体は裏面側が反り気味だが、表面裏面とも刃部摩耗が 著しく、摩耗範囲は裏面側が広い。刃柄部の摩耗は裏面側 に非対称である。完全状態。		
第14回 PL.21	24	剥片石器 磨片	床直 完形	長 幅 13.0 5.4 厚 重 3.1 339.8	変玄武岩	器体の最大幅を刃部に有する磨製石斧。使用中刃部が破損、 再生中にこれを放置したものである。破損した刃部や石斧頭 部には敲打痕が残され、敲打として使用された可能性もある。 刃部研磨痕には精耕の別があり、器体周辺部を主体に 弱い研磨痕が広がっている。		
第14回 PL.21	25	剥片石器 磨片?	理上 完形	長 幅 8.8 5.1 厚 重 2.9 201.8	粗粒輝石安山岩	小口部内側に打痕が集中するほか、平坦な表面の裏面側が 弱く摩耗する。裏面形状は小形扁平盤の形態になる。		
第14回 PL.21	26	剥片石器 磨片	理上 完形	長 幅 13.4 10.3 厚 重 5.4 1232.9	粗粒輝石安山岩	裏面裏面とも摩耗痕が広がっているが、背面側の摩耗が特に 激しい。このほか、刃辺側面にも打痕、摩耗痕が見られる。		
	27	2次加工あ る剥片	理上	-	厚 重 131.6	黑色頁岩		
	28	2次加工あ る剥片	理上	-	厚 重 22.2	黑色頁岩		
	29	2次加工あ る剥片	理上	-	厚 重 80.1	黑色頁岩		
	30	2次加工あ る剥片	理上	-	厚 重 87.5	黑色頁岩		
	31	2次加工あ る剥片	理上	-	厚 重 4.3	黑色頁岩		

遺物觀察表

第6表 12号竪穴建物出土遺物

種類 PL.No.	種類 器種	出土位置 深跡	計測値	胎土/燒成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第15回 PL.21	1 瓷文土器 深跡	埋上 口縁部破片		織維・石英・輝 石・白色粒/良好/ にぶい黃褐色	平線。口縁部に連続爪形文2条が沿い以下同爪形文が横位 山形状に配される。内面横位撫で調整。	前期中葉
第15回 PL.21	2 瓷文土器 深跡	西床面 口縁部破片		織維・輝石・白 色粒/良好/明黃褐 色	口縁部に横位細陰線を設け以下横位無節Rが施される。一部無節Lも加わる。内面弱い撫で調整に止まる。	前期中葉
第15回 PL.21	3 瓷文土器 深跡	埋上 体部破片		織維・輝石・白 色粒/良好/灰黃 褐色	機位R Lが覆う。内面平滑な撫で調整ながら凹凸が顯著。	前期中葉
第15回 PL.21	4 瓷文土器 深跡	埋下位 頭部破片		織維・石英・輝 石・チャート/良好/ 灰黃褐色	口縁部に横位降線を設け連續爪形文が沿う。頭部は外反し O段多条LRとO段多条RLによる羽状構成。菱形状 頭部を配す。内面横位撫で調整。	前期中葉
第15回 PL.21	5 瓷文土器 深跡	埋上 口縁部破片		織維・石英・輝石・白 色粒/良好/にぶい 黃褐色	口縁部沈線を施し、頭部外反部に横位沈線3条を設ける。 内面は横位倒り調整後弱い横位研磨を加える。	後期前葉
第15回 PL.21	6 磨石器 凹石	北東壁際 完形	長 幅 12.1 厚 9.1 重 4.6 681.1	粗粒輝石安山岩	表面裏ともアバウトの打痕が集中するほか、裏面には摩 耗面が広がっている。背面側の摩耗面は右辺側が著しく、左 辺側が片減っている。裏面側は全面が保っている。	
第15回 PL.21	7 磨石器 石皿	埋上 1/2欠	長(6.4) 幅(9.5) 厚重 478.6	粗粒輝石安山岩	表面裏とも明瞭な打痕が広がるほか、小円柱および左辺 には打痕が集中し激しくいたんでいる。裏面側断面には 焼けが付着する。	
第15回 PL.21	8 磨石器 石皿	埋上 破片	長 幅 16.1 (16.2) 厚 重 (7.8) 2108.6	粗粒輝石安山岩	有組織の石面とするべきか悩ましいが、背面側裏面が平坦に なるほど圓錐形が变形しており、搔き出し口に近い石面の 破片を見た。裏面側も平坦で、打痕が広がっている。	

第7表 15・16号土坑出土遺物

第16回 PL.21	1 瓷文土器 深跡	埋上 口縁部破片		織維・輝石・白 色粒/良好/にぶい 褐色	機位平行沈線口縁部下に多段に配され、沈線間に突刺文が 垂直に埋められる。内面丁寧な研磨を加える。	前期中葉
第16回 PL.21	2 瓷文土器 深跡	埋上 体部破片		織維・石英粒・ 白色粒/良好/にぶい 褐色	機位無節Rが覆う。内面弱い撫で調整で凹凸顯著。	前期中葉
第16回 PL.21	3 瓷文土器 深跡	埋上 口縁部破片		織維・輝石・白 色粒/良好/オリー ブ黒色	口縁部にLRを施す。内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第16回 PL.21	4 瓷文土器 深跡	埋上 体部破片		粗・織維・輝石・片 岩・白色粒/良好/ にぶい褐色	L RとO段多条RLによる羽状構成。内面平滑な撫で 調整。	前期中葉
第16回 PL.21・ 22	5 瓷文土器 深跡	埋上 体部破片2点		織維・石英粒・ 白色粒/良好/にぶい 褐色	O段多条LRとO段多条RLによる羽状構成。おそらく 菱形状構成を呈す。内面横位撫で調整。	前期中葉
第16回 PL.22	6 瓷文土器 深跡	埋上 体部破片		織維・石英・片 岩/良好/にぶい褐色	横位LRとRLによる羽状構成。下半に無節Rも加わる。 内面平滑な横位撫で調整。	前期中葉
第16回 PL.22	7 瓷文土器 深跡	埋上 体部破片		粗・織維・石英 ・チャート・白色粒/ 良好/にぶい黃褐色	体部上半。圓筒状の器形を呈す。幅狭の横位連續爪形文を 2条配し以下RLを施す。内面平滑な撫で調整。下半に煤 付有。	前期中葉
第16回 PL.22	8 瓷文土器 深跡	埋上 体部破片		織維・白色粒/ 良好/褐色	やや薄手の擦痕を有す。LRとRLによる羽状構成。 内面丁寧な研磨を加える。煤付有。	前期中葉
第16回 PL.22	9 瓷文土器 深跡	埋上 口縁部破片		粗・織維・石英粒・ 白色粒/良好/灰褐 色	内面平行沈線を斜位に施す。おそらく菱形状意匠が配され る。内面丁寧な研磨を加える。	前期中葉
第16回 PL.22	10 瓷文土器 深跡	埋上 体部破片		粗・織維・白色粒/ 良好/赤褐色	小径で歪める体部器形。O段LRとRLによる羽状構成。 内面平滑な撫で調整。煤付有。	前期中葉
第16回 PL.22	11 瓷文土器 深跡	埋上 底部のみ残存	底 13.0	粗・織維・石英・輝 石・白色粒/良好/ にぶい黃褐色	大型深跡か。上げ底で凹凸有る底面。被熱のため器面磨滅。	前期中葉
第16回 PL.22	12 2次加工あ る剖片	埋上 長 幅	- -	厚 重 64.1	黒色頁岩	

第8表 遺構外出土遺物(繩文)

第17回 PL.22	1 瓷文土器 深跡	北北西 口縁部破片		織維・白色粒/ 良好/褐色	平線。口縁部に連続爪形文を横位多段に配す。内面平滑な 撫で調整。	前中期中葉
第17回 PL.22	2 瓷文土器 深跡	9号建 口縁部破片		織維・輝石・白 色粒・チャート/良 好/にぶい黃褐色	継続やかな波状線頂部。連続爪形文頂部に沿う。横 位連續爪形文が配され、おそらく菱形状意匠が配される。 内面弱い研磨を加える。	前中期中葉
第17回 PL.22	3 瓷文土器 深跡	8号建埋上 口縁部破片		織維・石英少 白色粒/良好/褐色	頭部面凹部。横位平行沈線を設け弱位連續爪形文と平行沈 線文を施す。おそらく菱形状構成。内面研磨。	前中期中葉
第17回 PL.22	4 瓷文土器 深跡	1号建埋上 口縁部破片		粗・織維・石英・片 岩/良好/褐色	連續爪形文による三角形あるいは菱形状意匠。内面平滑な 撫で調整。	前中期中葉
第17回 PL.22	5 瓷文土器 深跡	北北東 口縁部破片		粗・織維・石英・ チャート/良好/褐 色	頭部に横位連續爪形文3条を設け。口縁部は菱形状意匠を 配す。内面横位撫で調整に弱い研磨を加える。	前中期中葉

遺物觀察表

種 団 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎工(模成・色調 石材・素材等)	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第1784 PL.22	6	縄文土器 深鉢	北区東 体部破片		粗:織維・石英・ 片岩粒/良好/灰黃 褐色	外反気味の体部器形。O段多条R LとO段多条L Rによる 羽状構文構成。内面丁寧な研磨。	前期中葉
第1785 PL.22	7	縄文土器 深鉢	北区東包含層 口縁部破片		粗:織維・石英・白 色粒/良好/褐色	口縁部に幅狭の爪形文2条を設け、縦位爪形文が派生する。 地文は無筋しR Lによる羽状構文。内面弱い研磨を加える。	前期中葉
第1786 PL.22	8	縄文土器 深鉢	北区 頭部破片		粗:織維・石英・白 色粒/良好/褐色	頭部屈曲部及び上部に幅狭の爪形文2条を設け、縦位爪形文を加える。	前期中葉
第1787 PL.22	9	縄文土器 深鉢	1型建床下 体部破片		粗:織維・石英・輝 石/良好/明赤褐色	小径の体部下平か。縦位R Lを施す。外面上及び内面は縦位 研磨を加える。	前期中葉
第1788 PL.22	10	縄文土器 深鉢	北区 体部破片		粗:織維・石英・片 岩/良好/浅い褐色	O段多条L RとO段多条R Lによる羽状構文構成。破片上 端の口縁部削落箇所に追加整形施文の痕跡を見る。内面研磨、 焼付着。	前期中葉
第1789 PL.22	11	縄文土器 深鉢	1型建床下 体部破片		粗:織維・石英・輝 石/白色粒/良好/ にぶい褐色	横位R Lが覆う。内面弱い撫で調整に止まる。	前期中葉
第1800 PL.22	12	縄文土器 深鉢	北区東 体部破片		粗:織維・石英・輝 色粒/白色粒/良好/ にぶい褐色	O段多条L RとO段多条R Lによる羽状構文構成。横位撫 で調整に弱い横位磨が加わる。	前期中葉
第1801 PL.22	13	縄文土器 深鉢	北区中央 底部破片		縦:織維・石英・白 色粒/良好/褐色	横位R Lが覆う。内面横位撫で調整。	前期中葉
第1802 PL.22	14	縄文土器 深鉢	表上 口縁～体部中位 破片		縦:石英・白色粒/ 良好/にぶい黄褐色	口縫部が外反する小径の小型深鉢。斜位無筋しが覆う。内 面平滑な撫で調整。	前期後葉
第1803 PL.22	15	縄文土器 深鉢	北区西 体部破片		縦:石英・輝石・角 安/白色粒/良好/ 明赤褐色	幅狭の連続爪形文で画された区画文が配される。区画内は R Lと円錐形突起が施される。無文部及び内面は研磨を加 える。	前期後葉
第1804 PL.23	16	縄文土器 深鉢	北区 体部破片		縦:輝石多/白色粒/ 良好/明闇褐色	縦位隣線を設け輪郭の連続爪形文と三角連続突起文を施 す。内面平滑な撫で調整。	中期中葉
第1805 PL.23	17	縄文土器 深鉢	10型建理土 体部破片		縦:石英・白色粒/ 良好/黒褐色	浅い次輪線による区画文構成。沈側間に斜突文、区画内 縦に截痕列を施す。内面は横位撫で調整。	中期中葉
第1806 PL.23	18	縄文土器 深鉢	1型建 口縁部破片		粗:石英・片岩粒/ 白色粒/良好/にぶ い褐色	強く内溝する口縁部。隣線による区画文構成。「蓮華文」を 輪郭とし内皮次輪線を弦状に施す。内面平滑な撫で調整。	中期中葉
第1807 PL.23	19	縄文土器 深鉢	1型建 口縁部破片		粗:石英・雲母多/ 良好/黒褐色	隙破部で画された口縁部相当円状区画文構成。区内には單列の 結節沈線を輪郭とし斜位結節沈線を充填する。内面横位研 磨を加える。	中期前葉
第1808 PL.23	20	縄文土器 深鉢	西区包含層 口縁部破片		粗:石英・雲母/良 好/灰褐色	口縁部下位に頭部隣線を設け隣線による波状文を配す。側 縫は單列の結節沈線。区画上位には斜位結節沈線を施す。 内面丁寧な研磨。	中期前葉
第1809 PL.23	21	縄文土器 深鉢	5型建 頭部破片		粗:石英・雲母多/ 良好/黒褐色	頭部隣線を設け單列の結節沈線を側縫とする。口縁部は横 位蛇行隣線を施す。体部上半に横位斜次目列を施す。内面 平滑な撫で調整。	中期前葉
第1810 PL.23	22	縄文土器 深鉢	縄文包含層 頭部破片		粗:石英・長石・少 雲母/良好/暗褐色	頭部隣線に刻みを加える。口縁部は弧状隣線に画された区 画文構成。複列の扁頭沈線を側縫とする。体部は横位刻み 目列を施す。内面平滑な撫で調整。	中期中葉
第1811 PL.23	23	縄文土器 深鉢	6型建床下 口縁部破片		縦:石英・輝石・白 色粒/良好/にぶい 黃褐色	内済気味の口縁部。無文で内外面とも平滑な撫で調整を施 す。	中期後葉
第1812 PL.23	24	縄文土器 浅鉢	6型建 口縁部破片		粗:石英・白色粒/ 良好/明赤褐色	口縁部内外面肥厚する。丁寧な横位研磨を施し僅かに赤彩 が残る。内面に補修孔の痕跡を見る。	中期後葉
第1813 PL.23	25	縄文土器 深鉢	表上 体部破片		縦:石英・輝石・白 色粒/良好/にぶい 褐色	縦位沈線2条に画された消磨部懸垂文構成。施文部縦文は 縦位R L充填施文。磨耗部及び内面は研磨を施す。	中期後葉
第1814 PL.23	26	縄文土器 深鉢	縄文包含層 頭部破片		粗:輝石・白色粒/ 良好/赤褐色	縦位密接條線が施される。内面平滑な横位撫で調整。	中期後葉
第1815 PL.23	27	縄文土器 深鉢	北区包含層 頭部下平～底 部残存	底 6.8	粗:輝石・角安・白 色粒/良好/にぶい 褐色	内済気味に聞く体部下平。縦位細沈線に画された施文部と 頭部による懸垂文構成。施文部縦文は縦位R L充填施文。 内面は縦位研磨。	中期後葉
第1816 PL.23	28	縄文土器 深鉢	10型建理土 体部破片		粗:石英・輝石・片 岩/良好/赤褐色	2条の縦位沈線に画された施文部懸垂文構成。列点状突起 文を充填する。磨耗部及び内面は弱い研磨を施す。	後期前頭
第1817 PL.23	29	縄文土器 深鉢	表上 口縁部破片		粗:石英・輝石・白 色粒/良好/にぶい 褐色	尖状突起を付し円文や口縁部沈線を配す。突起直下より2 条の沈線が垂下。頭部横位沈線に派生する。内面横位削り 後撫で調整。	後期前葉
第1818 PL.23	30	縄文土器 深鉢	8型建 口縁部破片		粗:石英・角安・白 色粒/良好/にぶい 黃褐色	波状小突起を付し口縫状意匠を配す。口縫部は肥厚し頭部は 無文。内外面とも平滑な撫で調整を施す。	後期前葉
第1819 PL.23	31	縄文土器 深鉢	口縁部破片		粗:石英・輝石・片 岩多/良好/にぶい 黃褐色	小波状突起を付し口縫部沈線を設ける。頭部は無文。内外 面とも平滑な撫で調整。	後期前葉
第1820 PL.23	32	縄文土器 深鉢	8型建 口縁部破片		粗:石英・輝石・白 色粒/良好/赤褐色	口縫部沈線を設ける。内外面とも研磨を加える。	後期前葉
第1821 PL.23	33	縄文土器 深鉢	体部破片		粗:石英・白色粒/ 良好/褐灰色	内済する体部上平。4条の縦位沈線による懸垂文構成か。 同沈線による弧状意匠も配される。縦文は縦位R L充填施 文。内面研磨を施す。	後期前葉

遺物觀察表

種 図 PL.No.	No.	種 類	出土位置 残 存 率	計測値	胎工成形・色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第19回 PL.23	34	礪文土器 深鉢	北区中央 体部破片		胎:石英・輝石・白色 色粒/良好/黑褐色	体部上半の小突起より派生した低位斜線による懸垂文構成か。側縫は沈線。内面は横位撫で調整。	後期前葉
第19回 PL.23	35	礪文土器 深鉢	S型達理土 体部破片		胎:輝石・角閃・白色 色粒/良好/にぶい 黄褐色	切りをつけた部位降数2条による懸垂文構成か。斜位沈線3条が派生する。礪文はL.R充填施文。内面平滑な撫で調整。	後期前葉
第19回 PL.23	36	礪文土器 深鉢	北区 体部破片		胎:石英・輝石・白 色粒/良好/明褐色	3条の沈線に画された弧状区画文。区画内はL.R充填施文。内面は平滑な撫で調整。	後期前葉
第19回 PL.23	37	礪文土器 深鉢	9坑 体部破片		胎:石英・輝石・白 色粒/良好/にぶい黄褐色	大型深鉢。内湾気味の部器形。横位L.Rが復う。内面丁寧な研磨を加える。	後期前葉
第19回 PL.24	38	礪文土器 注口土器	注口部破片		胎:石英・輝石・白 色粒/良好/にぶい 黄褐色	口部径は3.0cmを測り端部は僅かに外反する。外面は無文で丁寧な研磨を加え内面は平滑な撫で調整を施す。	後期前葉
第19回 PL.24	39	礪文土器 注口土器	注口部破片		胎:輝石・白色 色粒/良好/にぶい黄褐色	基部破片。押圧を加えた垂下線2条が注口部上部に接続する。内面弱い撫で調整を施す。	後期前葉
第19回 PL.24	40	礪文土器 深鉢	北区東 口縫部破片		胎:石英粒・輝石・ 白色粒/良好/にぶい 黄褐色	横位無筋Lが施される。口縫部内面に横位沈線を設ける。内面丁寧な研磨を加える。	後期中葉
第19回 PL.24	41	剥片石器 痕あわし 剥片	完形	長 幅 4.3 厚 2.9 重 1.0 14.1	黑色安山岩	上地剥打面部の表面には同時に削離した小削離痕があり、内面剥離こそ見られないが、両側剥離により削離された小型剥片を素材に用いる。左辺側中央下部に微細な削離痕が連続している。	
第19回 PL.24	42	剥片石器 削器	一部欠損	長 幅 (6.7) 5.1 厚 0.9 重 34.0	黑色頁岩	側縫加工は表裏面に及んでいますが、刃部加工は裏面側から行われるのみである。刃部は弱く弧状を呈し、刃部側は薄い。	
第19回 PL.24	43	剥片石器 削器	完形	長 幅 5.3 厚 6.7 重 1.6 36.3	黑色頁岩	小形で幅広の台形状剥片を用いる。左側縫の加工は直線的で、剥片端部の加工は弧状に近い。裏面側剥片端部が弱く摩耗する。	
第19回 PL.24	44	剥片石器 打斧	上半欠損	長 幅 (5.8) 3.9 厚 1.0 重 24.6	粗粒輝石安山岩	背面側に大きく削面を残した短冊形の打製石斧刃部破片。背面側に被熱剝離痕が見られる。裏面側は被熱剝離痕が全面を覆う。	
第19回 PL.24	45	剥片石器 打斧	上半欠損	長 幅 (5.2) 4.1 厚 1.4 重 1.4	粗粒輝石安山岩	短冊状を呈する打製石斧の刃部破片。刃部および内側縫には若しい摩耗痕があり、激しく使い込まれている様子が見て取れる。	
第19回 PL.24	46	礪石器 凹石	完形	長 幅 8.0 厚 5.0 重 3.3 169.1	粗粒輝石安山岩	背面側裏面にアバタ状の打痕が集中するほか、礪の裏面裏側縫に摩耗痕が広がっている。被熱してヒビ割れている。	
第19回 PL.24	47	礪石器 凹石	完形	長 幅 9.9 厚 7.7 重 4.7 481.4	粗粒輝石安山岩	裏裏面とも済み部があるほか、裏面には摩耗痕が広がる。礪の小口部には打痕が見られないが、両側縫には打痕が目立つ。	
第19回 PL.24	48	礪石器 石皿	表土 完形	長 幅 40.6 厚 33.6 重 9.5 14400	粗粒輝石安山岩	機能部(皿部)は礪サイズに比べてやや狭く、深く窿んでいる。皿部周辺には打痕を集中させ、また、裏面剥石凹込にも剝離痕があり、剥形状を大きく変えていることが確実である。皿部上部には打斗状を呈する済み穴1個があるほか、右辺側にも同種跡が穴1個がある。左辺側の同位置に広がる打痕集中部には済み部に似た痕跡が認定できるかも知れないが確実ではない。	
	49	打製石斧		長 幅 (6.2) (5.2) 厚 重 (2.0) 96.1	粗粒輝石安山岩		
	50	石核		長 幅 - 厚 重 - 17.4	褐碧玉		
	51	2次加工あ る剥片		長 幅 - 厚 重 - 8.4	珪質頁岩		
	52	2次加工あ る剥片		長 幅 - 厚 重 - 21.0	黑色頁岩		
	53	2次加工あ る剥片		長 幅 - 厚 重 - 32.9	黑色頁岩		
	54	2次加工あ る剥片		長 幅 - 厚 重 - 3.9	黒曜石		
	55	2次加工あ る剥片		長 幅 - 厚 重 - 9.4	珪質頁岩		
	56	2次加工あ る剥片		長 幅 - 厚 重 - 17.9	黑色頁岩		
	57	2次加工あ る剥片		長 幅 - 厚 重 - 19.5	黑色頁岩		
	58	2次加工あ る剥片		長 幅 - 厚 重 - 33.6	粗粒輝石安山岩		
	59	磨製石斧		長 幅 (7.5) (6.5) 厚 重 330.1	粗粒輝石安山岩		
	60	剥片		長 幅 - 厚 重 - 1.7	チャート		
	61	礪		長 幅 - 厚 重 - 16000	粗粒輝石安山岩		
	62	礪片		長 幅 - 厚 重 - 890.1	粗粒輝石安山岩		

第9表 1号竪穴建物出土遺物

種類 PL.No.	器種	出土位置 理上 底部～体部下位 片	残存率 底 8.0	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2084 PL.24	1 頭患器 杯	理上 底部～体部下位 片	底 10.3		織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。	

第10表 2号竪穴建物出土遺物

第2284 PL.24	1 土師器 杯	理上 口縁部～底部片	口 底 11.9 10.3		織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第2285 PL.24	2 土師器 杯	理上 口縁部～底部片	口 底 11.9 7.0	3.7	織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持 ちヘラ削り。内部は底部に螺旋状、体部から口縁部に斜放 射状凹。	
第2286 PL.24	3 土師器 甕	理上 口縁部～頸部片	口 底 20.0		織砂粒/良好/赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第2287 PL.24	4 土師器 小型甕	理上 底部～胴部下位 片	底 6.0		織砂粒/良好/赤褐色	底部はヘラ削り、胴部はヘラ削り後ナデで単位不明。内面 は底部から胴部にヘラナデ。	
第2288 PL.24	5 頭患器 杯	理上 底部～体部下位 片	底 7.0		織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。	
第2289 PL.24	6 頭患器 杯蓋	理上 口縁部～天井部 片	口 底 19.0		織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削 り。口縁部は端部を折り曲げ。	
第2290 PL.24	7 頭患器 杯蓋	理上 口縁部～天井部 片	口 底 20.0		織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削 り。口縁部は端部を折り曲げ。	
第2291 PL.24	8 製品製 鍵か	理上 破片	長幅 2.7 厚重 5.9			鍵の背のように丸くなっているが、明確な刃は確認できな い。一方の端部はだけており、もう一方の端部からも鍵と 機械的に判断できない。	
第2292 PL.24	9 滅津洋 埴形洋	理上 1/2	縦 横 4.3 3.5 厚 重 1.5 32.0			メタルなし、磁性10mS、下面の下部1/3に砂が詰じっている。 木炭痕が下面に2ヶ所確認できる。津質はやや密。	

第11表 3号竪穴建物出土遺物

第2384 PL.25	1 土師器 甕	理上 口縁部～胴部上 位片	口 底 19.5		織砂粒/良好/にぶ い褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第2385 PL.25	2 土師器 甕	底直 口縁部～胴部上 位片	口 底 24.1		織砂粒/良好/明褐色	外面頸部に輪積みが残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第2386 PL.25	3 土師器 甕	理上 口縁部～胴部上 位片	口 底 22.9		織砂粒/良好/明褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第2387 PL.25	4 土師器 甕	理上 口縁部～胴部上 位片	口 底 16.0		織砂粒/良好/明褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。外面口縁部に煤が付着。	
第2388 PL.25	5 頭患器 杯	底直 底部片	底 7.8		織砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黃褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第2389 PL.25	6 頭患器 杯	理上 1/5	口 底 15.8 8.0 高 4.5		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第2390 PL.25	7 頭患器 杯	理上 口縁部～底部片	口 底 16.6 7.6 台 5.0		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は切り離し技法不明、高 台は貼付。	
第2391 PL.25	8 頭患器 甕	理上 底部～胴部下位 片	底 6.6		織砂粒/還元焰/黃 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第2392 PL.25	9 軸輪陶器 底鉢	理上 底部～胴部下位 片	底 5.5 6.0		織砂粒/還元焰/褐 色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ。高台は 光ヶ丘1号窯 式期～大原2 号窯式期	
第2393 PL.25	10 頭患器 甕	理上 口縁部片			織砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回りか。	
第2394 PL.25	11 頭患器 甕	理上 口縁部～体部片	口 底 15.8 白		織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。口縁部はやや外反。	

第12表 5号竪穴建物出土遺物

第2684 PL.25	1 土師器 杯	1/2	口 底 11.9 12.3	4.0	織砂粒/良好/にぶ い黄	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り後ヘラミ ガキ、ミガキは一部器面摩減のため単位不明。	
第2685 PL.25	2 土師器 杯	口縁部～底部片	口 底 12.5 13.3		織砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	口縁部は横ナデ、稜下底部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第2686 PL.25	3 土師器 杯	1/3	口 底 11.2 10.2	9.8	織砂粒/良好/にぶ い赤褐色	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	
第2687 PL.25	4 土師器 杯	口縁部～底部片	口 底 10.9 11.1		織砂粒/良好/浅黃 色	外面黒色処理。口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘ ラ削り後ヘラミガキ、一部器面摩減のため単位不明。	
第2688 PL.25	5 土師器 杯	口縁部～底部片	口 底 12.4 12.6		織砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	口縁部は横ナデ、稜下底部はナデ、底部は手持ちヘラ削り	
第2689 PL.25	6 土師器 甕	1/4	口 底 13.5 5.8	14.5	織砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	口縁部から体部はナデ、一部に指痕が残る、底部には木 炭痕が残る。内部は底盤から体部、口縁部にヘラナデ。底 部は3.0cmほどの厚さをもつ。	
第2690 PL.25	7 土師器 甕	口縁部～胴部上 半片	口 底 17.7		織砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ後一部にナデ。	

遺物觀察表

種 団 PL.No.	種 類 種	出上位置 残存率	計測値			船上/底成・色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第27図 PL.26	8 石製品 白玉	埋土下位 完形	長幅 1.2 1.2	厚 1.2 重	0.6 1.3	滑石	断面は片側が厚い舟形を呈する。上面側の体部枝線は摩耗して角が取れているが、下面側の体部枝線は丸味を帯びずエッジは鋭い。体部には粗い斜位条線が残る。孔は片側穿孔。	孔D.3
第27図 PL.26	9 石製品 白玉	埋土下位 完形	長幅 1.3 1.3	厚 1.3 重	0.6 1.2	滑石	断面は片側が厚い舟形を呈する。上面側の体部枝線は比べ、下面側の体部枝線は丸味を帯びずエッジは鋭い。体部には粗い斜位条線が残る。孔は片側穿孔。上面側削および下面側平坦面には風化の差があり、時間差がある。	孔D.3
第27図 PL.26	10 磨石器 敲石	床直上 完形	長幅 15.4 7.6	厚 5.8 重 851.1	粗粒輝石安山岩		下端側小局部の敲打痕は風化しているが、右側縁の敲打・剥離痕は新鮮で、明瞭である。削線等の敲打痕も粗粒石様だが、決定的ではない。被熱してヒビ割れる。	こもあみ石
第27図 PL.26	11 磨石器 敲石	床直上 完形	長幅 15.1 7.5	厚 4.6 重 667.4	粗粒輝石安山岩		右邊側面の敲打痕は新鮮で確実な被熱痕。このほか、小局部に敲打痕が見られるが、風化して摩耗しているよう見える。表面の粗粒状況は側縁でも表裏面平坦面でも変わらない。	こもあみ石
第27図 PL.26	12 磨石器 敲石	床直上 完形	長幅 12.3 9.1	厚 4.3 重 768.4	粗粒輝石安山岩		上端側小局部の敲打痕は摩耗しており、機能が複合している可能性が高い。摩耗面は表面全般に広がっているが、背面側摩耗痕は光沢があるのに対して、側面や裏面側縁面は摩耗の程度が変わらず摩耗面から除外すべきかもしれない。	こもあみ石
第27図 PL.26	13 磨石器 敲石	床直上 完形	長幅 15.6 7.3	厚 4.7 重 762.7	粗粒輝石安山岩		上端側小局部には敲打痕を伴う摩耗痕があり、右側縁には敲打した際の剥離痕がある。その他の表面と側縁の摩耗状況は変わらない。	こもあみ石
第27図 PL.26	14 磨石器 敲石?	床直上 完形	長幅 10.6 6.7	厚 5.8 重 521.9	粗粒輝石安山岩		断面三角形状を呈する河床礫の純上に敲打痕がある。裏面側は平坦面となっており、裏面中央に敲打痕があるほか、摩耗面が光沢があり、磨石機能も想定されよう。掌サイズの河床礫。	こもあみ石
PL.26	15 こもあみ石	床直上 完形	長幅 13.3 5.4	厚 4.4 重 446.2	粗粒輝石安山岩		掌サイズの棒状穂。石材は多孔質で、裏面の摩耗状況は表面面・側面とも変わらないよう見える。	
PL.26	16 こもあみ石	床直上 完形	長幅 14.9 7.0	厚 6.5 重 997.2	粗粒輝石安山岩		やや大型の棒状穂となる。表面摩耗状況は裏面平坦面・側縁とも変わらないよう見える。5号建15と同質だが、やや円度感は高い。	
PL.26	17 こもあみ石	床直上 完形	長幅 12.0 7.3	厚 4.5 重 558.2	粗粒輝石安山岩		側縁片面と側縁の摩耗度は異なり磨石面だが、その際は微妙で積極的にはなれない。側縁形状は若干不定形だが、偏平面の組合せになる。	
PL.26	18 こもあみ石	床直上 完形	長幅 12.4 7.0	厚 6.4 重 749.0	粗粒輝石安山岩		側縁の角柱状。両端が尖り気味で、側縁の摩耗状況とは異なり、摩耗を伴う敲打痕と認定も可能かもしれない。	
PL.26	19 こもあみ石	床直上 完形	長幅 13.7 7.3	厚 4.3 重 449.0	粗粒輝石安山岩		裏面平坦面と側縁の摩耗度に変化は見られず、明瞭な使用痕は認定できない。角柱状を呈す河床礫。	
PL.26	20 こもあみ石	床直上 完形	長幅 10.9 6.4	厚 5.2 重 486.0	粗粒輝石安山岩		裏面には鉛筆が付着している部分があり、鉛筆が付着していない部分を摩耗範囲とするならば磨石となるだろうが、表面面と側縁の摩耗に変化がなく、断定は難しい。掌サイズの円錐。	
PL.26	21 簾端鍼	床直上 完形	長幅 12.4 8.2	厚 4.5 重 659.9	粗粒輝石安山岩		掌サイズの偏平河床礫。裏面平坦面と側縁の摩耗度の差は指摘できない。	
PL.26	22 棒状鍼	床直上 完形	長幅 14.7 5.3	厚 5.1 重 646.0	粗粒輝石安山岩		柱状を呈す河床礫。平坦面は黒色に光沢をもち、側縁の棱にはこれがない。黒色光沢部分には経年斑が見えており、光沢面の解釈が難しい。礫砥など光沢面の観察データと比較する必要がある。	
PL.26	23 種子	完形	長幅 1.770	厚 1.305			やや炭化する。バラ科の種子と見られるが、未同定。	

第13表 6号堅穴建物出土遺物

第30回 PL.27	1 土師器 杯	床直 完形	口 17.0 最 17.5	高 5.8	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。外頭は全体的に煤が付着。
第30回 PL.27	2 土師器 杯	理上土位 高	口 12.4 高 3.4	3.4	細砂粒/良好/明褐 褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。
第30回 PL.27	3 土師器 杯	理上土位 1/2	口 17.2		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。
第30回 PL.27	4 土師器 杯	理上 1/3	口 12.4 高 3.5	3.5	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。
第30回 PL.27	5 土師器 杯	口直 4/5	口 15.0 高 4.3	4.3	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、継下から底部は手持ちヘラ削り。
第30回 PL.27	6 土師器 杯	カマド及び床直 通	口 11.9 高 13.3	15.3 13.7 赤	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頭部は横ナデ、胸部から底部はヘラ削り。内面は底部から胸部にヘラナデ、裏面厚壁のため単位不明。
第30回 PL.27	7 頸忠器 杯	床直 ほぼ完形	口 11.6 高 8.0	3.5	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回軋は右回り。底部と体部下位は手持ちヘラ削り。
第30回 PL.27	8 頸忠器 杯	床直 3/4	口 13.1 高 8.6	4.5	細砂粒/粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回軋は右回り。底部と体部下位は手持ちヘラ削り。
第30回 PL.27	9 頸忠器 杯	床直上 ほぼ完形	口 11.8 高 7.5	4.0	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回軋は右回り。口縁部に赤がみられる。
第30回 PL.27	10 頸忠器 杯	理上土位 底部	底 7.5		細砂粒・粗砂粒/還元焰/明黄褐 白	ロクロ整形、回軋は右回り。底部と体部下位は手持ちヘラ削り。
第30回 PL.27	11 頸忠器 有台杯	床直上 底部～体部片 台	底 9.8 9.4		細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回軋は右回り。底部と体部下半は回軋ヘラ削り。高台は貼付。

種 団 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値	胎上/成形/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第30回 PL.27	12	須恵器 短頸壺蓋	床直上 3/4	口 横 17.5 4.8 高	16.2 6.0 織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り、端部に縫を作り、縫下に凹線を温らす。縫は届けで擬宝珠状に作る。外面天井部には隠灰が付着。	
第30回 PL.27	13	須恵器 杯蓋	床直上 完形	口 横 12.7 4.6 高	10.2 2.5 白 織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は手持ちヘラ削り。内面にカエリを作る。縫はボタン状の粘土板を貼付し周縁を削かれてつまみ上げやや環状に作る。内面は擦り磨かれてる。	転用磁として使用か
第31回 PL.27	14	須恵器 杯蓋	床直 完形	口 横 17.4 7.2 高	14.4 3.3 織砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。内面にカエリを作る。ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。	
第31回 PL.27	15	須恵器 杯蓋	理上 1/3	口 横 14.9 4.8 高	2.0 織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り。口縁部は端部を折り曲げ。ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。	
第31回 PL.27	16	須恵器 杯蓋	理上 口縁部～天井部 片	口 横 16.2 13.6 カ	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り。内面にカエリを作る。	
第31回 PL.27	17	須恵器 杯蓋	床直上 口縁部～天井部 片	口 横 17.9 15.5 カ	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り、周縁はヘラナデ。内面にカエリを作る。縫は削落。	
第31回 PL.28	18	須恵器 鉢	理上 口縁部～体部片	口 横 18.8 黄	織砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。内面の一部に保が付着。	
第31回 PL.28	19	縄輪陶器 長頸壺	理上 頭部～胸部上位 小口	頭 横 6.6 黄	織砂粒/還元焰/浅 黄	ロクロ整形、回転は右回り。釉調は濃緑色。	
第31回 PL.28	20	須恵器 甕	理上 胸部中位片		織砂粒/還元焰/灰	叩き締め成形。外面は叩き痕をナデ消している。内面は残存部下半に同心円アテ具痕が残るが、上半はヘラナデ。	
第31回 PL.28	21	須恵器 小型短頸壺	理上 口縁部～胸部片	口 横 6.0 6.2 制 白	8.5 織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。	

8号堅穴建物出土遺物

第33回 PL.28	1	土師器 甕	カマフ 底部～胸部下位	底 6.8	織砂粒/良好/明闇	底部と胸部はヘラ削り。内面は底部から胸部がヘラナデ。	
第33回 PL.28	2	土師器 甕	理上 底部～胸部下位 片	底 4.6	織砂粒/良好/に赤 い黄	底部には木葉痕が残る。胸部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第33回 PL.28	3	須恵器 杯	理上 口縁部片	口 10.6	織砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。内面は酸化焰状態。	
第33回 PL.28	4	須恵器 甕	理上 胸部片		織砂粒/還元焰/灰	叩き締め成形。外面は平行叩き痕。内面には無文のアテ具痕が残る。外面上に隠灰が厚く付着。	
第33回 PL.28	5	石製品 不明	カマフ 長 幅	8.2 6.4 厚 重 100.7	1.1 変質安山岩	薄い板状の側縁が研磨され、玉たる機能部をなす。内側縁の稜は明瞭で、激しく使い込んでいる。小口部の縫隙痕は平坦な縫隙側に及び、石製研磨器具の使用法が想定される。このほか、平坦面にも擦痕痕が部分的にある。	

9号堅穴建物出土遺物

第34回 PL.28	1	土師器 杯	床直 1/2	口 横 13.2 12.2	織砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。縫下から底部は手持ちヘラ削り。	
---------------	---	----------	-----------	------------------------	----------------	-------------------------	--

10号堅穴建物出土遺物

第37回 PL.28	1	土師器 杯	理上 口縁部～底部片	口 14.6	織砂粒/良好/明闇	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第37回 PL.28	2	土師器 杯	理上 口縁部～体部片	口 10.6 9.6	織砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。縫下から底部は手持ちヘラ削り。	
第37回 PL.28	3	土師器 甕	床下上坑3 口縁部～胸部上位 片	口 14.8	織砂粒/良好/に赤 い赤褐	口縁部は横ナデ。胸部はヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
第37回 PL.28	4	土製品 多孔円盤	理上 一部片		織砂粒/良好/に赤 い黄褐	表裏ともナメ。径0.3～0.5mmの小孔が多数穿けられてる。瓶底部に装着か。	
第37回 PL.28	5	土製品 多孔円盤	理上 一部片		織砂粒/良好/に赤 い黄褐	表裏ともナメ。径0.5mm前後的小孔が多数穿けられている。瓶底部に装着か。	
第37回 PL.28	6	須恵器 杯	理上 4/5	13.6 7.8 高	3.4 織砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り後周縁を回転ヘラ削り。	
	7	柱状標	長 幅	14.7 5.8 厚 重 650.4	4.5 變質安山岩	縫平坦面に黒色～褐色の光沢面がある。これが光沢痕の類か剥離は難し。	
	8	蔽石	理上 完形	12.9 7.1 厚 重 658.5	4.5 變質安山岩	角柱状を呈する休床石。側面中央に斜方に作る剥離痕1つがある。この剥離面の付近には縫の凹部があり、位置関係から縫が手用の加工とする見方もあろう。縫平坦面および縫縁の摩耗度に差はない。	

17表 遺構外出土遺物(古代)

第42回 PL.28	1	須恵器 甕	胸部片		織砂粒/還元焰/灰	外面上には平行叩き痕、内面は無文のアテ具痕が残る。外面は隠灰が付着。	
第42回 PL.28	2	須恵器 甕	底部～体部下位 片	底 8.6 9.0	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。	
第42回 PL.28	3	須恵器 甕	底部～体部下位 片	底 9.7 9.8	織砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	

遺物觀察表

第18表 非掲載遺物数量一覧

縦文上源

遺構名	時期	点数	備考
4号竪穴建物	前期中葉	34	
4号竪穴建物	阿玉台1b式	18	
4号竪穴建物	腰坂1式	7	
7号竪穴建物	前期中葉	13	
11号竪穴建物	前期中葉	31	有尾式
11号竪穴建物	前期中葉	285	黒浜式
11号竪穴建物	中期	2	
12号竪穴建物	前期中葉	14	
12号竪穴建物	中期前葉	6	

土師器・須恵器

遺構名	器種	点数	備考
1号竪穴建物	土師器杯類	14	
1号竪穴建物	土師器甕類	28	
1号竪穴建物	須恵器杯類	3	
1号竪穴建物	須恵器甕類	1	
2号竪穴建物	土師器杯類	104	
2号竪穴建物	土師器甕類	233	
2号竪穴建物	不明	60	
2号竪穴建物	須恵器杯類	42	
2号竪穴建物	須恵器甕類	1	
3号竪穴建物	土師器杯類	104	
3号竪穴建物	土師器甕類	87	
3号竪穴建物	須恵器杯類	42	
3号竪穴建物	須恵器甕類	10	
5号竪穴建物	土師器杯類	52	
5号竪穴建物	土師器甕類	90	
5号竪穴建物	不明	11	
5号竪穴建物	須恵器杯類	4	
6号竪穴建物	土師器杯類	110	
6号竪穴建物	土師器甕類	180	
6号竪穴建物	須恵器杯類	34	
6号竪穴建物	須恵器甕類	5	
6号竪穴建物	土師器甕類	6	
8号竪穴建物	土師器杯類	59	
8号竪穴建物	土師器甕類	105	
8号竪穴建物	須恵器杯類	15	
8号竪穴建物	須恵器甕類	4	
8号竪穴建物	不明	1	
8号竪穴建物カマド	土師器甕類	6	
8号竪穴建物カマド	土師器甕類	25	
9号竪穴建物	土師器杯類	9	
9号竪穴建物	土師器甕類	35	
9号竪穴建物	不明	1	
9号竪穴建物カマド	土師器甕類	4	
9号竪穴建物カマド	須恵器杯類	1	
9号竪穴建物1号ビット	土師器杯類	2	
9号竪穴建物2号ビット	土師器杯類	1	
10号竪穴建物	土師器杯類	62	
10号竪穴建物	土師器甕類	243	
10号竪穴建物	須恵器杯類	6	

石器

遺跡名	石材	点数	種別	総重量
1号竪穴建物	黒色頁岩	1	剥片	3.7
1号竪穴建物	珪質変質岩	1	礫片	9.7
1号竪穴建物	凝灰質砂岩	2	礫片	42.0
1号竪穴建物	粗粒輝石安山岩	1	礫片	1.0
3号竪穴建物	黒色頁岩	4	剥片	39.5
3号竪穴建物	珪質頁岩	1	剥片	8.4
3号竪穴建物	粗粒輝石安山岩	1	礫片	2.2

遺構名	時期	点数	備考
15・16号土坑	前期中葉	12	有尾式
15・16号土坑	前期中葉	29	黒浜式
15・16号土坑	中期前葉	5	
遺構外	前期中葉	580	
遺構外	前期後葉	30	
遺構外	中期前葉	322	
遺構外	中期後葉	127	
遺構外	後期前葉	76	
遺構外	不明	166	

遺構名	時期	点数	備考
10号竪穴建物	須恵器甕類	2	
10号竪穴建物	須恵器不明	2	
10号竪穴建物1号床下土坑	土師器杯類	1	
10号竪穴建物1号床下土坑	土師器甕類	1	
10号竪穴建物3号床下土坑	土師器杯類	2	
10号竪穴建物力マド	土師器杯類	6	
10号竪穴建物力マド	土師器甕類	13	
10号竪穴建物力マド	不明	2	
1号溝	土師器杯類	1	
1号溝	土師器甕類	1	
1号溝	須恵器甕類	1	
4号立坑	土師器甕類	1	
9号土坑	土師器甕類	1	
9号立坑	不明	6	
14号土坑	土師器杯類	3	
1号ビット	土師器甕類	1	
4号ビット	土師器杯類	2	
4号ビット	土師器甕類	1	
19号ビット	土師器甕類	1	
22号ビット	須恵器杯類	1	
24号ビット	須恵器甕類	1	
28号ビット	須恵器甕類	1	
33号ビット	土師器杯類	2	
37号ビット	土師器杯類	1	
37号ビット	須恵器甕類	1	
41号ビット	土師器杯類	1	
41号ビット	土師器甕類	3	
41号ビット	須恵器甕類	1	
42号ビット	須恵器甕類	1	
43号ビット	土師器杯類	1	
43号ビット	土師器甕類	1	
遺構外	土師器杯類	54	
遺構外	土師器甕類	151	
遺構外	須恵器甕類	21	
遺構外	須恵器甕類	11	
遺構外	不明	6	
泥面子	泥面子	1	近世

遺跡名	石材	点数	種別	総重量
9号竪穴建物	黒色安山岩	1	剥片	2.0
9号竪穴建物	泥岩	1	剥片	6.4
9号竪穴建物	細粒輝石安山岩	1	剥片	37.9
10号竪穴建物	黒色頁岩	1	剥片	0.8
10号竪穴建物	赤碧玉	1	剥片	9.8
10号竪穴建物	細粒輝石安山岩	1	剥片	17.9
11号竪穴建物	黒色頁岩	6	剥片	146.6

遺跡名	石材	点数	種別	総重量
3号竪穴建物	ホルンフェルス	1	礫片	21.5
4号竪穴建物	黒色頁岩	3	剝片	17.8
4号竪穴建物	黒曜石	2	剝片	5.8
4号竪穴建物	赤碧玉	1	剝片	1.4
4号竪穴建物	硬質泥岩	2	剝片	41.5
6号竪穴建物	粗粒輝石安山岩	1	剝片	21.6
7号竪穴建物	黒色頁岩	1	剝片	4.6
7号竪穴建物	珪質頁岩	1	剝片	63.8
8号竪穴建物	黒色頁岩	3	剝片	43.2
8号竪穴建物	珪質頁岩	3	剝片	22.4
8号竪穴建物	ホルンフェルス	1	剝片	41.9
9号竪穴建物	珪質頁岩	1	剝片	19.0

遺跡名	石材	点数	種別	総重量
11号竪穴建物	黒曜石	4	剝片	14.1
11号竪穴建物	細粒輝石安山岩	1	剝片	3.5
11号竪穴建物	硬質泥岩	1	剝片	6.6
11号竪穴建物	粗粒輝石安山岩	3	礫片	100.4
16号土坑	黒色頁岩	1	剝片	23.1
遺構外	黒色頁岩	7	剝片	105.2
遺構外	珪質頁岩	1	剝片	18.3
遺構外	変玄武岩	1	剝片	3.3
遺構外	細粒輝石安山岩	2	剝片	65.1
遺構外	変玄武岩	1	礫片	268.7
遺構外	粗粒輝石安山岩	1	礫片	265.9
遺構外	細粒輝石安山岩	2	礫片	19.1

報告書抄録

書名ふりがな	たかはまんぐはらいせき
書名	高浜天狗原遺跡
副書名	(主)前橋安中富岡線(西毛広域幹線道路高崎西工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	696
編著者名	山口逸弘
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20211130
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	たかはまんぐはらいせき
遺跡名	高浜天狗原遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしたかはままち
遺跡所在地	群馬県高崎市高浜町
市町村コード	10202
遺跡番号	H88A
北緯(世界測地系)	362281
東経(世界測地系)	13856992
調査期間	20191201－20191231
調査面積	761.8
調査原因	道路建設
種別	集落/包蔵地
主な時代	縄文/古墳/平安
遺跡概要	集落－縄文時代－竪穴建物 4+土坑 2－土器+石器／集落－古墳時代－竪穴建物 2+土器+石製品／集落－古代－竪穴建物 6+土坑 13+溝 1+ピット 44－土師器+須恵器+鉄製品
特記事項	前期中葉に比定される11号竪穴建物は、有尾式や黒浜式の出土量が豊富で周辺遺跡との比較に好資料を提供する。古代竪穴建物には壁外柱穴を示唆する例があり、該期建物の上屋復元に一助となる遺構である。
要約	縄文時代前期竪穴建物 3 棟、中期竪穴建物 1 棟、古墳時代竪穴建物 2 棟は 6 世紀後半、古代竪穴建物 6 棟は 7 世紀末～9 世紀に比定される。

写 真 図 版



1 調査区北側全景(西から)



2 調査区北側全景(東から)



1 調査区南部全景(西から)



2 調査区南部全景(東から)



1 4号竖穴建物土層(西から)



2 4号竖穴建物 遺物出土状況(西から)



3 4号竖穴建物遺物出土近接(東から)



4 1号・4号・7号竖穴建物重複状況(北から)



5 7号竖穴建物全景(西から)



6 7号竖穴建物土層(西から)



7 7号竖穴建物 遺物出土状況(北東から)



8 7号竖穴建物 遺物出土状況(南から)



1 11号竪穴建物全景(北から)



2 11号竪穴建物遺物出土状況(北から)



3 11号竪穴建物遺物出土状況(北から)



4 11号竪穴建物遺物出土状況(北から)



5 11号竪穴建物遺物出土状況(北から)



1 12号墳穴建物全景(北から)



2 15・16号土坑土層(西から)



3 15・16号土坑遺物出土状態(西から)



4 15・16号土坑遺物出土状態(東から)



5 15・16号土坑全景(西から)



1 1号竪穴建物全景(北から)



2 1号竪穴建物床下全景(北から)



3 1号竪穴建物床下土坑土層(西から)



4 1号竪穴建物床下土坑全景(北から)



5 2号竪穴建物全景(東から)



6 2号竪穴建物土層(北東から)



7 2号竪穴建物遺物出土状態(東から)



8 2号竪穴建物床下全景(東から)



1 3号竪穴建物全景(北から)



2 3号竪穴建物遺物出土状態(北から)



3 3号竪穴建物土層(西から)



4 3号竪穴建物床下全景(西から)



5 5号竪穴建物全景(西から)



1 5号竪穴建物土層(西から)



2 5号竪穴建物カマド全景(西から)



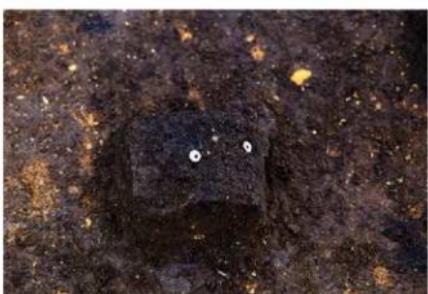
3 5号竪穴建物遺物出土状態(西から)



4 5号竪穴建物遺物出土状態(西から)



5 5号竪穴建物遺物出土状態(西から)



6 5号竪穴建物白玉出土状態(西から)



7 5号竪穴建物床下全景(西から)



8 5号竪穴建物調査風景



1 6号竪穴建物全景(北西から)



2 6号竪穴建物土層(南から)



3 6号竪穴建物カマド全景(北西から)



4 6号竪穴建物カマド内支脚(南西から)



5 6号竪穴建物カマド掘方(北西から)



1 6号竪穴建物遺物出土状態(北西から)



2 6号竪穴建物遺物出土状態(北から)



3 6号竪穴建物遺物出土状態(西から)



4 6号竪穴建物床下全景(北西から)



5 6号竪穴建物床下土坑(北西から)



1 8号竪穴建物全景(西から)



2 8号竪穴建物土層(南から)



3 8号竪穴建物カマド及び貯蔵穴(西から)



4 8号竪穴建物床下全景(西から)



5 9号竪穴建物全景(西から)



6 9号竪穴建物土層(南から)



7 9号竪穴建物遺物出土状態(西から)



8 9号竪穴建物床下全景(西から)



1 10号竪穴建物全景(西から)



2 10号竪穴建物土層(北から)



3 10号竪穴建物カマド全景(西から)



4 10号竪穴建物床下全景(西から)



5 10号竪穴建物床下土坑(西から)



1 1号土坑全景(南から)



2 2号土坑全景(北から)



3 3号土坑全景(南から)



4 4号土坑全景(北から)



5 5号土坑全景(北から)



6 6号土坑全景(南から)



7 7号土坑全景(北から)



8 8号土坑土層(北東から)



1 9・11号土坑全景(西から)



2 10号土坑全景(西から)



3 13号土坑全景(南から)



4 14号土坑全景(南から)



5 1号ビット全景(北から)



6 2号ビット全景(北から)



7 3号ビット全景(北から)



8 4・5号ビット全景(南東から)



9 6号ビット全景(北から)



10 7号ビット全景(北から)



1 8号ピット全景(北から)



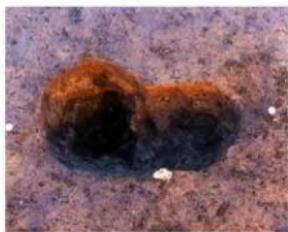
2 9号ピット全景(南から)



3 10号ピット全景(南から)



4 11号ピット全景(北から)



5 12・13号ピット全景(南から)



6 14号ピット全景(南から)



7 15号ピット全景(南から)



8 16号ピット全景(北から)



9 17号ピット全景(北から)



10 18号ピット全景(北から)



11 19・20号ピット全景(北から)



12 21号ピット全景(北から)



13 22・23号ピット・8号土坑全景(北東から)



14 24号ピット全景(西から)



15 25号ピット全景(西から)



1 26号ピット全景(西から)



2 27号ピット全景(西から)



3 28号ピット全景(西から)



4 29号ピット全景(北から)



5 30号ピット全景(西から)



6 31号ピット全景(西から)



7 32号ピット全景(南から)



8 33号ピット全景(南から)



9 34号ピット全景(南から)



10 35号ピット全景(南から)



11 36号ピット全景(南から)



12 37号ピット全景(南から)



13 38号ピット全景(南から)



14 39号ピット全景(南から)



15 40号ピット全景(南から)



1 41号ピット全景(南から)



2 42号ピット全景(南から)



3 43号ピット全景(南から)



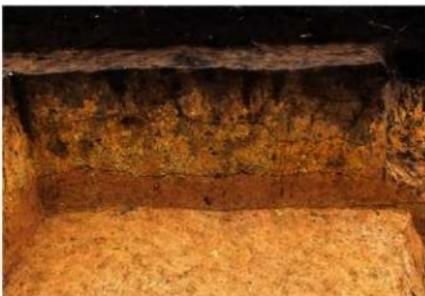
4 1号溝全景(北から)



5 遺構外出土土器(縄文時代中期)(西から)



6 基本土層1(南から)



7 基本土層2(南から)



8 調査風景



9 調査風景

PL.18

4号竖穴建物



1-2



2



3



4



5



6



7



8



9



10-1



10-2



10-3



11



12

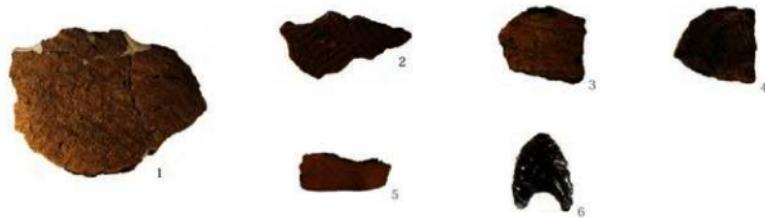


13



14

7号壁穴建物



11号壁穴建物



PL.20



7



8



9



11



10



12



13



14



15



16



17



18



20



19



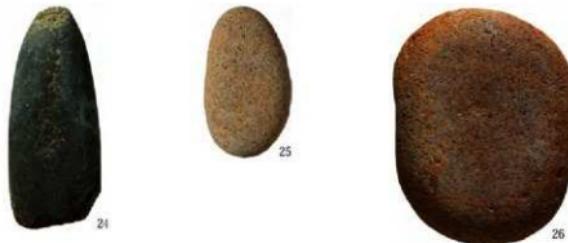
21



22



23

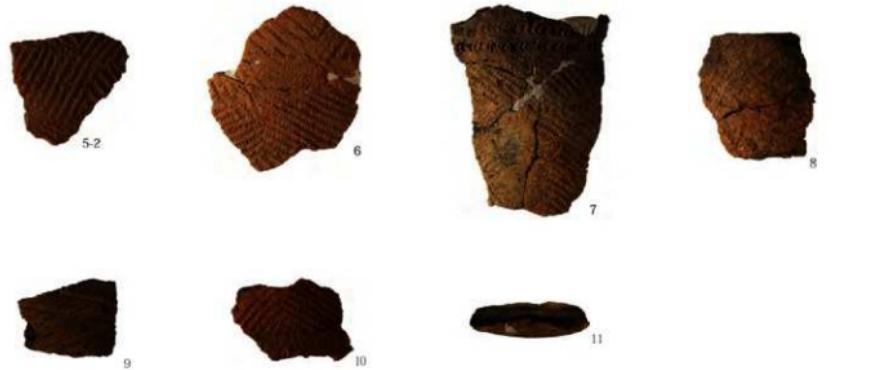


12号竖穴建物



15·16号土坑





遺構外





16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



37



35



36

PL.24



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



1号壁穴建物



1

2号壁穴建物



1



2



3



4



5



6



7



8



9

3号壁穴建物



5号壁穴建物





10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23

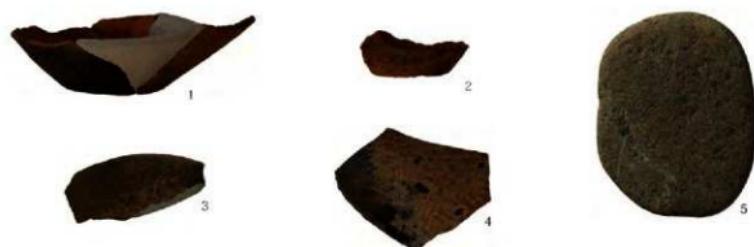
6号竖穴建物



PL.28



8号竖穴建物



9号竖穴建物



遺構外



公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第696集

高浜天狗原遺跡

(主)前橋安中富岡線(西毛広域幹線道路 高崎西工区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

令和3(2021)年11月22日 発行
令和3(2021)年11月30日 発行

編集・発行／公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県邑楽市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>
印刷／株式会社開文社印刷所

